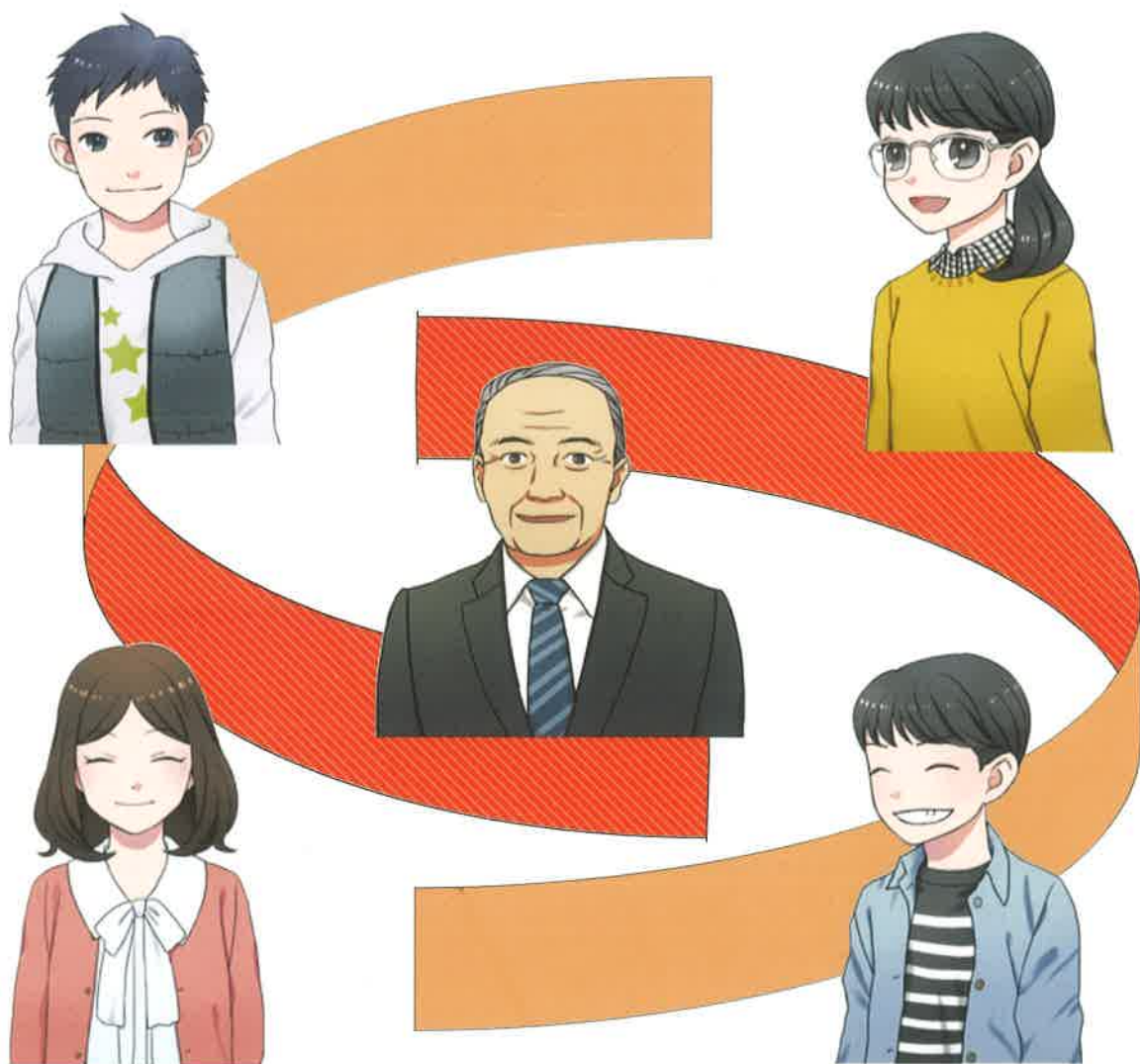


あわ文化テキストブック

教師用教材解説
ワークシート集



徳島県教育委員会

「あわ文化テキストブック」の活用について

教材解説

阿波の歩み

- 【 1 】 銅鐸と朱に込められた思い 3
- 【 2 】 木簡から見える古代の阿波 9
- 【 3 】 阿波の古代寺院を探ろう 15
- 【 4 】 阿波から都へ～三好氏の時代～ 19
- 【 5 】 なぜ徳島に城下町ができたのか 25
- 【 6 】 小学校のはじまり～学制と徳島の教育～ 34

地域に息づく伝統文化

- 【 7 】 阿波おどりの歴史と魅力について語ろう 39
- 【 8 】 阿波に根付いた人形浄瑠璃 42
- 【 9 】 「板東俘虜収容所」で結ばれた、日本とドイツとの交流 51
- 【 10 】 アジア初演「歓喜の歌」 54
- 【 11 】 人々の衣服を染めた阿波の藍 57
- 【 12 】 四国遍路とお接待 61

自然の恵みが生み出す地域の文化

- 【 13 】 橋でつながる人・もの・地域 70
- 【 14 】 徳島の郷土料理を知ろう 77
- 【 15 】 地域の食材を使って「そば米汁」を作ろう 83
- 【 16 】 徳島の天然記念物を見に行こう 85
- 【 17 】 奇勝「阿波の土柱」 91

阿波の伝統文化を発信しよう

- 【 18 】 陶器（セラミックス）で豊かな生活 93
- 【 19 】 徳島の名所や史跡・特産物を紹介しよう 96
- 【 20 】 暮らしのなかに息づく伝統・文化 98

Web教材

- 【 21 】 俳人 大高 翔の世界に触れよう 104

ワークシート集

「あわ文化テキストブック」の活用について

【あわ文化教育について】

あわ文化教育は、「徳島県に誇りと愛着を持ち、徳島の伝統と文化の課題に向き合い、解決に向けてよりよい行動をとろうとする子供を育成する。」という理念にもとづいて実施されるものであり、以下に示す目標を掲げて実施するものです。

あわ文化教育の目標

- 学校教育において芸術文化や文化遺産に親しむ機会を充実させ、これを活用し、児童生徒の豊かな感性と情操、コミュニケーション能力を養うことができるよう推進する。
- 「あわ文化教育」を通して、伝統や文化財を継承・活用する力を養い、ふるさと徳島への誇りと愛着を醸成することにより、多様な価値観への理解と国際的な視野を持つグローバルな人財を育てる。

※「グローバルな人財」・・・「徳島教育大綱」を参照

この「あわ文化テキストブック」を各教科等の単元のねらいを達成する一助として効果的に活用することで、授業が活性化し、ここに示した、あわ文化教育の目標実現につながることを願っています。

【本教材解説集について】

先に示した「あわ文化教育の目標」を達成するため、本教材解説集では、次の(A)から(D)の具体的な重点目標を掲げ、各題材の学習を通して、それぞれの具現化を図ることができるように作成しています。また、各題材についての解説資料及び、指導例を、ワークシートとともに提示しています。

「あわ文化テキストブック」の重点目標

- (A) 徳島の伝統と文化を知る。
- (B) 世界や日本の中における徳島の伝統と文化について思考し、公正に判断する。
- (C) 徳島の伝統と文化についての基本的な技能を身に付ける。
- (D) 徳島の伝統と文化の魅力を、県内外で主体的に発信できる。

「あわ文化テキストブック」は、様々な場面で活用できるように編集されています。そこで、

- 「あわ文化教育」推進担当者として、どういう目的で、年間計画のいつ・どこに「あわ文化」に関する学習を位置づけるかについてカリキュラムマネジメントを行ってください。
- 教科担任として、担当する教科等の授業で積極的に活用してください。教材研究で参照したり、1時間の投げ込み教材または補助教材として使用してください。長期休暇の課題図書として指定することもできます。
- 学級担任として、道徳や特別活動、総合的な学習の時間で積極的に活用してください。学年集会や朝の会・帰りの会等で話題に取り上げててください。朝読書用の本として推薦してください。

このテキストが、徳島の未来を支える子供の育成に資するものとなることを願っています。

あわっ子が「ふるさとにはこれがある」と誇りを持って語ることができる“徳島ならではの文化”を念頭に教材を選択しています。教育課程に位置付けて実施するにあたり、教科等名を例示しています。地域や生徒の実態に応じて、計画的に取り組んでください。

項 目	あわ文化教育 の重点目標	想定される対象 学年・教科等の例
阿波の歩み		
【 1 】 銅鐸と朱に込められた思い	A・B	1年生・社会科
【 2 】 木簡から見える古代の阿波	A・B	1年生・社会科
【 3 】 阿波の古代寺院を探ろう	A・B	1年生・社会科
【 4 】 阿波から都へ～三好氏の時代～	A・B	1年生・社会科
【 5 】 なぜ徳島に城下町ができたのか	A・B	2年生・社会科
【 6 】 小学校のはじまり～学制と徳島の教育～	A・B	2年生・社会科
地域に息づく伝統文化		
【 7 】 阿波おどりの歴史と魅力について語ろう	A	1/2年生・総合
【 8 】 阿波に根付いた人形浄瑠璃	A	1/2年生・総合
【 9 】 「板東俘虜収容所」で結ばれた、日本とドイツとの交流	A	1/2年生・労働
【 10 】 アジア初演「歓喜の歌」	A	1/2年生・総合
【 11 】 人々の衣服を染めた阿波の藍	A・B	1/2年生・総合
【 12 】 四国遍路とお接待	A	1/2年生・総合
自然の恵みが生み出す地域の文化		
【 13 】 橋でつながる人・もの・地域	A・B	2年生・社会科
【 14 】 徳島の郷土料理を知ろう	A・C	1/2年生・家庭
【 15 】 地域の食材を使って「そば米汁」を作ろう	A・C	1/2年生・家庭
【 16 】 徳島の天然記念物を見に行こう	A	1/2年生・理科
【 17 】 奇勝「阿波の土柱」	A	1/2年生・理科
阿波の伝統文化を発信しよう		
【 18 】 陶器（セラミックス）で豊かな生活	A・C	1/2年生・美術
【 19 】 徳島の名所や史跡・特産物を紹介しよう	B・D	1/2年生・英語
【 20 】 暮らしのなかに息づく伝統・文化	B・D	1/2年生・総合

※ 総合的な学習は「総合」、技術家庭科家庭分野は「家庭」と整理してあります。

※ 重点目標のうち、二つあるものについては中心的な目標を太字にしてあります。

教材解説

【1】

銅鐸と朱に込められた思い

1 生徒用資料解説

全国第3位の出土数

銅鐸は長野県から九州地方にかけての西日本各地で確認されている。しかし、その分布には明らかな偏りが見られ、近畿地方、山陰地方そして四国地方の東部に集中している。一方同じ青銅器であっても銅矛・銅戈は九州地方、四国地方西部に、銅剣は瀬戸内地域に集中的に分布している。同じ祭器であっても種類によって流行する地域・時期が異なっている。同じ種類の青銅器を保有する地域のまとまりは共通した祭祀を執り行っていた文化圏と考えられている。

最も古い銅鐸

日本列島で青銅器が最初につくられたのは、弥生時代前期末から中期初頭(B.C 2世紀)である。大阪府茨木市東奈良遺跡で出土した小銅鐸は最も古いタイプとされている。

最大の銅鐸

現在知られている銅鐸のうち最も大きいものは、滋賀県野洲市小篠原字大岩山で出土したけさだすき袈裟もん襷銅鐸で、総高 134.7 センチ、重量 45.47 キログラムに達する。徳島県内では徳島市国府町で出土した矢野銅鐸（総高 97.8 センチ、重量 17.5 キログラム）が最大である。

銅鐸をつくる

弥生時代の日本列島では銅の生産は行われていない。したがって、青銅器の素材となる青銅を中国や朝鮮半島との交流で入手していた可能性が高い。

銅鐸は、現代の南部鉄瓶や銅鐘といった鋳物製品の製造方法と同じように、高温でドロドロに溶けた青銅を鋳型に流し込んで製造する。熱が冷めて鋳型から取り出された銅鐸は、丁寧に研磨されて金色に輝いていたであろう。鋳型には石製と土製の2種類があった。大半の鋳型は石製であるが、奈良県田原本町のからこかぎ唐古鍵遺跡では土製の鋳型が出土している。なお、徳島県では鋳型は見つかっていない。



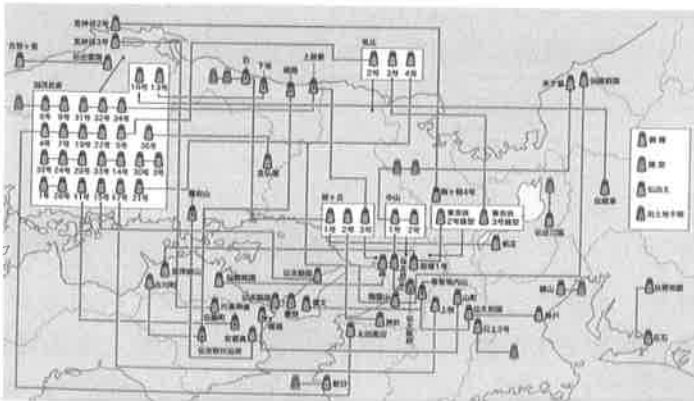
東奈良遺跡(大阪府東大阪市)出土の銅鐸石製鋳型

兄弟の銅鐸

石製の鋳型は丈夫であることから、1つの鋳型から複数の銅鐸を製造することができた。同じ鋳型で製造された兄弟の銅鐸を「同范銅鐸」と呼んでいる。これまでに7個の同范銅鐸が確認された例もある。徳島県で出土した銅鐸の同范銅鐸は海を越えた近畿地方・中国地方で見つかっている。製造地が同じであると考えられる同范銅鐸が移動する背景には、弥生人の広域な交流網がうかがえる。

徳島県出土の同范銅鐸

川島銅鐸(吉野川市)	—	加茂岩倉遺跡銅鐸(島根県雲南市)
伝脇町銅鐸(美馬市)	—	荒神谷遺跡銅鐸(島根県出雲市)
安都真1号銅鐸(徳島市)	—	種松山銅鐸(岡山県倉敷市)
伝榎瀬銅鐸(徳島市)	—	山町銅鐸(奈良県奈良市)



同范銅鐸関係図

銅鐸に託された想い

銅鐸は紐を通して吊すための鈕(ちゅう)、文様が描かれる身(み)、文様が描かれない裾(すそ)で構成されている。内部は空洞で裾の内側に突出した部分をめぐらせている。これを内部突帯(ないぶとつたい)と呼んでいる。音を鳴らす時は、内部に吊した舌(ぜつ)と呼ばれる棒(金属製もしくは鹿角製)を内部突帯に接触させて共鳴させる。実際、島根県荒神谷遺跡や兵庫県桜ヶ丘遺跡で出土した銅鐸には内部突帯が著しく摩滅しているものがあり、銅鐸が長期間使用されていた事を示している。このように音を鳴らす事に意味のあった銅鐸であるが、徐々に大型化し、鐸としての実用性からかけ離れていく。大型化に伴い内部突帯も退化していき、ついには鐸としての機能を失ってしまう。このような銅鐸の本質的な性格の変化を、考古学者の田中琢は「聞く銅鐸から見る銅鐸へ」と表現している。

銅鐸は村人共有の祭器

九州地方で出土する銅矛や銅戈は甕棺墓に副葬された状態で出土することが多いので、有力者が個人で所有する権威の象徴であったことがわかる。いっぽうで、銅鐸は墓から出土することは少なく、集落やその近辺に埋納された状態で出土する。西日本に普及した銅鐸は集落で共有する祭器であったと考えられている。

神聖な色 朱

弥生時代の赤色顔料である朱には、水銀朱（硫化水銀）とベンガラ（酸化鉄）の2種類がある。ベンガラの原料は鉄分の多い岩石（鉄鉱石）や土であり、これらの原料を精製、焼成することで生産される。容易に入手できたベンガラは縄文時代以来さかんに土器に塗布されたり、漆に混ぜることで赤漆に加工されてきた。いっぽう、水銀朱は原料である硫化水銀を産出する水銀鉱山が少ないため、ベンガラに比べ貴重であった。それでもベンガラに比べ鮮やかな赤色を発する水銀朱の生産が途絶えることはなかった。古代中国では朱に不老不死の力があると信じられ服用されることもあった。ただし、現在の科学では有毒物質が含まれるため、体に良いものでないことが明らかである。

朱の使い分け

生産量が異なる水銀朱とベンガラでは明らかな使い分けが見られる。弥生時代終わり頃から古墳時代前葉の有力者の埋葬には朱が欠かせなかった。ベンガラは石室や木棺の広い範囲に多量に塗布されるのに対し、貴重な水銀朱は横たわる被葬者の周辺に限定して塗布されることが多い。

採掘された水銀朱のゆくえ

若杉山遺跡で採掘された水銀朱を含む岩塊はどのように流通していたのか。板野郡板野町に所在する弥生時代の集落遺跡である黒谷川郡頭遺跡^{こくざ}では、朱に関連する遺物が豊富に出土したことで注目されている。竪穴式住居からは、水銀朱塊の細片、朱の付着した土器、そして水銀朱塊を粉末化するための石杵・石臼が出土した。この粉末を容器に入れて水に浸し、比重を利用して不純物である砂粒を取り除くことで水銀朱が作り出される。弥生人は若杉山遺跡で採掘した水銀朱塊を直線距離で約 30km はなれた集落へ持ち込み、水銀朱を生産していたのである。黒谷川郡頭遺跡は旧吉野川流域という水上交通に便利な立地に築かれた集落であることから、作り出した水銀朱を各地に搬出する拠点集落なのではないかと考える意見もある。

銅鐸と朱

農耕祭祀に関わる祭器と考えられる銅鐸と、魔除けを意図して埋葬施設に塗布される朱では、同じ神聖なものでも明確な使い分けが行われていた。しかし、全国でわずか10数点であるが、朱が塗布された銅鐸が見つかっている。徳島県では伝長者ヶ原1号銅鐸（阿南市）、源田銅鐸・星河内美田銅鐸・名東銅鐸（徳島市）で確認で確認され、他地域に比べ朱を塗布する確率が高い。徳島県が水銀朱の産地であることと関係あるのかもしれない。

2 銅鐸を見学できる施設

- ・徳島県立博物館
- ・徳島県立埋蔵文化財総合センター
- ・徳島市立考古資料館
- ・野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）
- ・辰馬考古資料館

3 参考文献

- ・北條芳隆 1998「阿波の銅鐸と朱」『川と人間－吉野川流域史－』溪谷社
- ・佐原真 1996『祭りのカネ銅鐸』講談社
- ・田中琢 1970「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』5角川書店
- ・島根県立古代出雲歴史博物館 2012『弥生青銅器に魅せられた人々－その製作技術と祭祀の世界－』

- ・大阪府立弥生文化博物館 2011 『豊饒をもたらす響き銅鐸』
- ・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1996 『弥生の精華－銅鐸に迫る－』
- ・市毛勲 1998 『新版朱の考古学』 雄山閣

4 授業の目標と授業過程

(1) 授業の目標

- ・徳島県で多く出土している弥生時代の祭器である「銅鐸」を取り上げ、弥生時代の稲作の開始とその内容を確認するとともに、弥生人の精神生活について考える。
- ・「朱」の使用の学びを通して、魔除け信仰の広がりや古墳時代の埋葬法を確認し、古代の人々の精神生活の変化について考える。

(関心・意欲・態度)

- ・「銅鐸」、「朱」を通じて、古代の人々の精神生活を理解しようとしている。

(思考・判断・表現)

- ・「銅鐸」の分布と弥生文化の広まりの一致及び、社会の変化に伴う「祭り」の変化を思考・判断し、説明することができる。

(資料活用技能)

- ・教材や教科書の資料を思考操作することにより、古代の人々の精神生活を復元することができる。

(知識・理解)

- ・弥生文化の内容を理解することができる。
- ・祭器の変化等の理解を通して、古代の人々の精神生活の変化を理解することができる。

(2) 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>○弥生文化の学習内容の復習。</p> <p>○徳島の出土数の多い「銅鐸と朱」を取り上げ、古代の人々の信仰について学習することを聞く。</p>	<p>○稲作と金属器の使用が特徴であることと、北九州から広まったことを確認する。</p> <p>○「銅鐸と朱」を取り上げることによって、生徒の古代の人々の精神生活の理解に近づこうとする態度を準備させる。</p>
展開	<p>○「銅鐸」の説明を聞き、理解する。</p> <p>○「銅鐸」の出土数が多い地域を考え、その理由とともに、発表する。</p> <p>・「銅鐸」の出土分布が、弥生文化の広まりと一致することを理解する。</p> <p>○弥生人が、なぜ、銅鐸をつくったのかを考え、弥生人の精神世界に近づく。</p> <p>・つくった理由を発表する。</p> <p>・豊作を祈る祭器（道具）であるとともに、共同体によって豊作の祈りが行われていたことを理解する。</p> <p>○古代人の特別な色について、自由に考えを発表する。</p> <p>・「朱」が棺や石室に使用され、魔除け的な役割を果たしていたことを理解する。</p> <p>○「朱」がどのようにして、つくられたかを理解する。</p> <p>・県内にその当時最大の辰砂採掘遺跡があったことを理解する。</p> <p>・「銅鐸」を使用したマツリが行われなくなっていた背景について考える。</p>	<p>○弥生文化を構成する金属器、青銅器であり、大陸（中国）起源説があることを理解させる。</p> <p>○日本地図を提示し、「銅鐸」の分布が弥生文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・稲作の広まりと一致することを理解させる。 <p>○「銅鐸」に描かれた稲作・水田に関する事項を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「銅鐸」の考えられる使用方法から、むらの共有祭器であることを理解させる。 ・共有祭器を使用する社会について、考えを深めさせるよう留意する。 <p>○「魏志倭人伝」の記述を紹介し、古代における「朱」のマージナルな意義を理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石室の使用例から、特定人物の葬送に関わりが深いことに気づかせる。 <p>○若杉山遺跡の立地と出土遺物を説明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県内に点在する辰砂加工遺跡と弥生時代末期から古墳時代にかけて主に古墳内部で使用されることを理解させる。 ・古墳時代になると、「銅鐸」を使用したマツリが行われなくなったことを説明する。 ・弥生時代後期の社会変化の一要素として「倭国大乱」があることを気づかせる。
結論	<p>○まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「銅鐸と朱」を通じて、古代人の精神生活を理解する。 ・徳島県からの出土が多い遺物の研究を通じて、古代の世界が明らかになっていくことに気づく。 	<p>○「銅鐸」を使用し、むら人共同で豊作を祈るマツリと、「朱」の持つ魔除けの思想と、有力者の墓での使用を再確認させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考古学の出土品から、古代人精神生活をうかがい知ることができることを気づかせる。

5 評価規準

- 教材の資料を思考操作することにより古代の人々の精神生活を復元することができる。
- 「銅鐸」の分布と弥生文化の広まりの一致及び、社会の変化に伴う「祭り」の変化を説明することができる。

6 板書計画

銅鐸と朱に込められた思い

- 「銅鐸」について → 青銅器，大陸（中国）起源説

- 「銅鐸出土数が多い県」

西日本中心に出土，徳島県第3位 → 稲作との関係

- 「弥生人は、なぜ、銅鐸をつくったのか？」

hint：伝香川県出土銅鐸絵画 → 稲作・水田に関する事項を確認



豊作を祈る祭器（道具）としての銅鐸

- 「古代人の特別な色は？」

hint：鳴門市西山谷2号墳石室 → 朱が塗られた石室



棺・石室に朱を使用 → 魔除け・神聖な色

- 「朱色は、どのようにしてつくられたか」

hint：若杉山遺跡の立地と出土遺物 → 辰砂・鉱脈と石杵・石臼



辰砂加工遺跡の点在と古墳での使用 → 古墳時代に使用のピークを迎える

- まとめ

古代人の精神生活 → むら人共同で豊作を祈る：銅鐸

魔除けの思想と，有力者の墓での使用：朱

【2】

木簡から見える古代の阿波

1 生徒用資料解説

国府について

古代の中央政府から派遣された国司（こくし）が政務をとる官庁域を国庁（こくちょう）ないしは国衙といい、その所在地として計画的に設定された都市を国府といった。ただし国衙と国府を同一視する資料などもあり、国府・国庁・国衙の関係は必ずしも一致しない。

国府は律令国家の地方行政組織の施設である。国による支配の拠点で国司が行政、司法・軍事・宗教などのあらゆる面を統轄した中核的な機関で、各国内の官道に沿ったところに立地することが多い。

阿波国府とその推定地の観音寺遺跡・敷地遺跡について

阿波国は南海道に属し、阿波国府の所在は、その地名に名をのこすように現在の徳島市国府町と見られてきた。『和名類聚抄』に「国府は名東郡に在り」と記され、吉野川支流の鮎喰川西岸に形成された沖積地に位置していたが、その正確な位置について諸説あり定まっていない。徳島市教育委員会による発掘調査によって札所観音寺の位置を中心とする政庁所在の候補地が提唱されている。

観音寺遺跡・敷地遺跡では南環状線・西環状線道路建設のための事前の発掘調査によって、埋没していた自然流路跡を確認した。調査地は伏流水や旧河道が多く存在する地点である。国庁の西縁を流れていたと考えられる南北方向と東西方向の2条の自然流路跡からは6世紀末から11世紀までの大量の木簡や木製品、墨書・刻書された土器、腰帯や印など国府・郡衙に関係する遺物が、良好な遺存状態で出土した。

7世紀後半に国府は一般的に成立すると見られているが成立過程など不明な点も多い。そのなかで全国的に見て7世紀～10世紀にかけて連綿と国府関連の資料が出土し、その成立経緯が位置づけできる事例として阿波国府の出土品は稀有であり、地方の国府のあり方を考える上で重要である。

木簡について 論語木簡・難波津木簡・勘籍木簡

木簡の中で特筆すべきものとして、8世紀の勘籍木簡は国司の政務と中央官庁とのやりとりを示すほか、7世紀後半の「五十戸税」木簡や「板野国守」木簡は国府の成立段階の様相を示している。また7世紀中ごろの「論語木簡」は棒状の四面体のうちの一面に『論語』学而篇一の一節を記す。特異な形態とともに我が国への論語の流入状況を示すものとしても貴重である。また、自然流路跡からは「己丑年□月二十九日」（持統3年：689年）と記された木簡も出土した。

論語木簡

墨書された角柱状の木が出土した。通称「論語木簡」と呼ばれている。それは木の一面に隸書風の書体で『論語』学而篇一の「子曰学而時習之。不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知而不愠。」によつた文章が墨で習い書きされていた。7世紀前半から中ごろに論語の教授・学習が行われていた可能性を示している。

(学びて、時に之をならう、また喜ばしからずや。朋有り、遠方より来る、また楽しからずや。人知らずして、憤らず。)

(学んだことを機会あるごとに復習して身に着けるのは、なんと喜ばしいことではないか。遠くから学問の仲間が訪ねてくるのは、なんとも楽しいことだ。世間の人が自分を認めてくれなくても、腹をたてない。)

難波津木簡

万葉仮名で難波津の歌の第一句と第二句を記した木簡。

『古今和歌集』の仮名序に見え、奈良時代には万葉仮名の手習いの手本とされていた。

難波津の歌

「難波津に咲くや木の花冬こもり今は春べと咲くや木の花」は百濟から渡来した王仁が仁徳天皇の即位を祝い献じたと伝承される歌。

(難波津に咲くよ、この花は。冬の寒い間は芽を出さなかつたけれど、今はもう春だと、咲くよ、この花は。)

勘籍木簡

長さ約 60 cmと長く、何度も墨で書いては小刀で削っていた状況が窺える。裏面に書かれた「阿波国司等解」の別筆部分には平城京で資人に任用されていた秦人部大宅について書かれている。大宅は26歳で、出身が阿波国名方郡殖栗郷の戸主の秦人部人麻呂の戸口であることを、阿波国司が中央の平城宮に報告した草案である。正倉院には勘籍に関わる文書が9通残っているが、木簡で確認されたのは、本例が最初である。

その他の出土品について

また、木製祭祀具についても7世紀から10世紀にかけての年代のものが出土する。斎串や立体的な人形・刀形・舟形などは継続的に使用されるが、7世紀末遺構に扁平で板状の人形や刀形などが加わるなど、在地的な祭祀と、律令的な祭祀が重層的に行われている様子が判明した。

このように、官衙の様相が7世紀から10世紀まで継続して認められるものは極めて稀であり、当時の政治機構を把握する上で貴重な資料となることから、徳島市国府町の観音寺遺跡と敷地遺跡から出土した遺物は、平成27年9月4日に、木簡や祭祀具を中心に紡織具・鏡・遊戯具などの木製品、墨書・刻書土器・硯や腰帯具など一括(922点)が「徳島県観音寺・敷地遺跡出土品」として、国の重要文化財(考古資料)に指定されている。

2 見学できる施設

「観音寺・敷地遺跡」出土品を見学できる施設

とくしま歴史文化総合学習館「レキシルとくしま」(徳島県立埋蔵文化財総合センター)

「阿波国府関連」出土品を見学できる施設

・徳島市立考古資料館

3 参考文献

- ・財団法人 徳島県埋蔵文化財センター 1999 徳島県埋蔵文化財センター調査概報第2集『観音寺木簡 観音寺遺跡出土木簡概報』
- ・徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2006 阿波歴史体感ネットワーク「いにしえ夢街道」推進事業シンポジウム『阿波国府と国分尼寺』資料集
- ・和田萃・藤川智之 2011 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要『真朱』第9号抜刷「徳島市観音寺木簡の歴史的意義」

4 授業の目標と授業過程

(1) 授業の目標

- ・古代の行政機関である阿波国府関連遺跡である観音寺・敷地遺跡の出土品を通して、奈良・平安時代の律令制の政治の仕組みや、地方官衙の状況を学ぶ。
- ・「木簡」に記される文字＝漢字の使用状況を学び、地方における外来文化の伝播と受容について考える。

(関心・意欲・態度)

- ・「観音寺遺跡出土木簡」の学習を通して、古代の人々の生活を理解しようとしている。

(思考・判断・表現)

- ・観音寺・敷地遺跡出土品、木簡記載内容から考え、当時の中央政府がすすめていた律令体制とその体制下の地方官衙の状況を説明することができる。

(資料活用技能)

- ・教材図版・解説や教科書・教科書資料から、古代の人々の生活を復元することができる。

(知識・理解)

- ・律令体制、体制下の地方行政の内容を理解することができる。
- ・地方における外来文化の受容状況とその内容を理解することができる。

(2) 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>○聖徳太子・大化改新の学習内容の復習する。</p> <p>○徳島市国府町を取り上げ、古代の地方政治について、学習することを聞く。</p>	<p>○天皇家と蘇我氏との対立というヤマト政権の緊張感の中で中央集権が目指されたことを確認する。</p> <p>○「観音寺・敷地遺跡出土木簡」を取り上げることによって、古代の地方政治、並びに古代の人々の生活を理解しようとする態度を準備させる。</p>
展開	<p>○「古代の政治」の説明を聞き、理解する。</p> <p>○観音寺・敷地遺跡の出土品の特徴を考え、発表する。</p> <p>○「観音寺・敷地遺跡出土木簡」の記載内容を学習する。</p> <p>○「文字＝漢字」の使用から、これまで学習してきた、外来文化の吸収について振り返る。</p> <p>○律令制導入前の地方政治を振り返るとともに、律令体制下の地方行政の学習の予告を聞く。</p>	<p>○東アジア情勢の緊迫化の中で、律令制度の導入が急速に進められていったことに気づかせる。</p> <p>○木簡、墨書・刻書土器に見られる文字の使用、文書の作成から、役所に関連する出土品であることを理解させる。</p> <p>○地方においても律令に基づく戸籍作成、租税徴収といった体制がが着実に進められていったこと理解させる。</p> <p>○6世紀に伝来した「漢字」、「儒教」、「仏教」といった外来文化・思想が、7世紀の阿波国においても浸透していたことに気づかせる。</p> <p>○中央政府から国司が派遣される以前は、地元豪族が中央政府からその地域の支配を認められていたことを確認する。</p> <p>○律令体制下の地方行政を学ぼうとする態度を持つ。</p>
結論	<p>○まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「観音寺・敷地遺跡出土品」から律令体制の地方行政の内容を理解する ・地方における外来文化の受容状況とその内容を理解する。 	<p>○遺跡の出土品から、当時の政治、生活を復元することができることに気づかせる。</p>

5 板書計画

1 「国府」について

①古代の地方政治の中心地 → 周辺に国分寺・国分尼寺

2 古代の政治について

① 645年大化改新 → 663年白村江の戦い

hint: 東アジア情勢の緊迫化

→ 都城制・律令制の導入 → 673年飛鳥浄御原令, 701年大宝律令
718年養老律令

②地方政治

中央政府から国司派遣 → 地方に国衙形成

cf.郡司・里長は地方から

3 観音寺・敷地遺跡

①徳島市国府町, 6～11世紀の遺跡

②出土品 木簡・木製祭祀具 → 文字の使用

墨書・刻書土器・硯 → 役所関連出土品多数

瓦・帯金具

4 木簡について

①律令 → 戸籍・租税徴収(計帳)作成 → 文書作成不可欠 → 木簡使用

hint: 7世紀前半 曇徴により紙・墨の製法伝来

②「勘籍木簡」出土 → 戸籍・計帳作成

③「論語」木簡 → 官人, 儒教学習

ex.5世紀 → 王仁: 儒教・「論語」伝える

→ 6世紀前葉 五経博士来朝 → 四書五経

cf.5世紀 阿知使主 → 「漢字」伝える, 538年 → 仏教伝来 → 百済の聖明王より

④「難波津」木簡 → 官人, 「歌」の学習 → 万葉仮名 → 仮名へ

hint: 「万葉集」 5世紀, 仁徳天皇の歌～8世紀後半, 大伴家持の歌 約4万5千首
防人の歌

5 これから調べてみよう

①律令導入前の地方の政治 → 地元豪族が国造・県主 → 氏姓制度

②律令導入後の地方政治 → 国・郡(評)・里(郷) → 国司・郡司・里長

→ 守・介・掾・目

→ 旧国造 → 郡司(郡衙)

6 まとめ

木簡 → 貴重な考古・歴史資料

6 評価規準

- 古代の行政機関である阿波国府関連遺跡である観音寺・敷地遺跡の出土品を通して、奈良・平安時代の律令制の政治の仕組みや、当時の地方官衙の状況について説明することができる。
- 「木簡」に記される文字＝漢字の使用状況を学び、地方における外来文化の伝播と受容について考えを深める。

【3】

阿波の古代寺院を探ろう

1 生徒用資料解説

国府跡

律令制度下の地方都市，地方行政官庁の所在地。国司が政務をとる官庁の主要建物を国庁または国衙と称した。阿波国府跡推定地については，従来，国府町の大御和神社を中心とした方6町あるいは方8町とする説があった⁽¹⁾。徳島市教育委員会は，1982年から10回に及ぶ発掘調査を行い，国庁跡の発見に努めたが，明確な遺構は検出できず，新たに第16番札所観音寺を中心とする説が唱えられた⁽²⁾。1992年以降，国府跡推定地の西を南北に通過する徳島南環状道路・西環状道路の建設に伴う発掘調査が実施され，観音寺遺跡で国庁に関わると見られる大量の木簡が出土した（観音寺木簡）⁽³⁾。一連の発掘調査の成果から，近年では，国府跡は字観音寺から北の字敷地方面に広がり，国庁跡は字観音寺周辺が，その有力な候補地として考えられるに至っている⁽⁴⁾。

国分寺

741(天平13)年の聖武天皇の詔勅にもとづいて全国に建てられた僧寺のこと。正しくは，金光明四天王護国之寺といい，僧20人を置くこととされた。国司や郡司と連携し，国分尼寺とともに各地の仏教信仰の中心となったが，律令制度の衰退とともに廃絶や移動等の転変を余儀なくされた。阿波国分寺跡は，阿波国府跡推定地の南西約1.5kmにある第15番札所国分寺の境内を中心とした一帯にあったと推定されている。周辺には，東門・北門・西門・坊屋敷・塔ノ本など寺院に関連した地名が残る。境内には，塔ノ本付近から掘り出されたとされる巨大な青石の塔心礎（長さ3.78m,幅1.75m,高さ0.7m）が置かれており，往時には巨大な塔が建っていたものと考えられる。徳島市教育委員会により昭和51年に道路工事に伴う発掘調査，昭和53～55年に寺域確認の発掘調査が実施され，2町（約216m）四方の寺域の中に北門・金堂・中門が南北に並ぶ東大寺式の伽藍配置であったと想定されている。また，出土遺物の年代から，寺は創建の奈良時代から室町時代に至るまで存続していたと考えられている。昭和28年に徳島県史跡に指定されている。

また，境内の桃山様式の庭園は，国の名勝に指定されている。

国分尼寺

国分寺と同じく聖武天皇の詔勅にもとづいて造立された尼寺のこと。正しくは，法華滅罪之寺といい，尼10人を置くこととされた。阿波国分尼寺跡は，阿波国府跡推定地の西約0.7kmの石井町石井字尼寺で確認されている。石井町地福寺境内には，当地の通称「法華寺藪」で出土されたとされる巨大な青石の礎石が置かれている。昭和45年民家建設工事の際に瓦や礎石が出土したことをきっかけに，昭和45～46年に発掘調査が実施され，1町半（約158m）四方と推定される寺域の中で，金堂跡・北門跡・築地跡などが確認された。金堂基壇跡は東西28m，南北18mで凝灰岩切石の地覆石（基壇の外装石）が確認さ

れている。寺は、出土遺物の年代から鎌倉時代まで存続したものと考えられている。全国の国分尼寺跡の中でも、寺域や伽藍配置が判明する数少ない事例として、昭和 48 年に国史跡に指定されている。平成 11～17 年には、史跡整備のための発掘調査が行われ、新たに講堂跡が確認された。現在、史跡公園造成に向けて整備が進められている。

石井廃寺

石井町石井字城ノ内にある。昭和 32 年～34 年に発掘調査され、奈良時代前期の金堂跡・塔跡・西回廊跡が確認された。金堂の東側に塔が建つ、法起寺式の伽藍配置と推定される。金堂跡は、東西約 14 m、南北約 12 m で 28 個の礎石が残存している。塔跡は、一辺約 10 m 四方で塔心礎をはじめ 11 個の礎石が残存している。当地域の有力氏族の氏寺であったと考えられており、昭和 30 年に徳島県史跡に指定されている。塔跡と金堂跡の礎石の並ぶ様子は、現地で見学できる。

史跡

貝塚・古墳・都城跡・城跡・旧宅その他の遺跡で、わが国にとって歴史上または学術上価値が高いものについて、国および地方公共団体が史跡として指定をすることで法律上の保護措置を行ったもの。文化財保護法に基づく国史跡、県条例に基づく県史跡、市町村条例に基づく市町村史跡がある。

名勝

庭園・橋梁・峡谷・海浜・山岳その他の名勝地でわが国にとって芸術上または鑑賞上価値が高いものについて、国および地方公共団体が名勝として指定をすることで法律上の保護措置を行ったもの。

2 参考文献

全体について

- 天羽利夫・岡山真知子『徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館 1985
菅原康夫『日本の古代遺跡 37 徳島』保育社 1988
一山典「律令時代の世界」『徳島県の歴史』図説日本の歴史 36 河出書房 1994
藤川智之「古代」『論集徳島県の考古学』徳島考古学論集刊行会 2002

阿波国府跡

- 木下良「国府と条里の関係について」『史林』50-5 1967
『阿波国府跡第 1 次～10 次調査概報 1982 年度～1991 年度』徳島市教育委員会 1983～1992
『観音寺遺跡 I～V』（財）徳島県埋蔵文化財センター 2001～2008
シンポジウム『阿波の国府と国分尼寺』徳島県教育委員会・石井町教育委員会・（財）徳島県埋蔵文化財センター 2006

- 阿波国分寺跡** 天羽利夫・一山典「阿波 国分寺」『新修国分寺の研究 第五卷 北海道』吉川公文館 1987
『徳島市史・第一巻総説編』徳島市 1973
- 阿波国分尼寺跡** 田辺征夫・松永住美 「阿波国分尼寺」『新修国分寺の研究 第五卷 北海道』吉川公文館 1987
『石井町史・上巻』石井町 1991
『阿波国分尼寺跡 I』石井町教育委員会 2007
- 石井廃寺跡** 『石井』徳島県教育委員会 1962 『石井町史・上巻』石井町 1991
- 下浦廃寺** 『石井町史・上巻』石井町 1991
- 合蔵廃寺** 『指定史跡等保存活用事業埋蔵文化財発掘調査報告書 I』徳島県埋蔵文化財センター 2006
『三加茂町史』三加茂町 1973
- 河辺寺跡** 『指定史跡等保存活用事業埋蔵文化財発掘調査報告書 I』徳島県埋蔵文化財センター 2006
- 郡里廃寺** 『立光寺跡の発掘調査』・『阿波・立光寺跡調査概報』徳島県教育委員会 美馬町教育委員会 1968.1969
『美馬町史』美馬町 1989 報告書
『郡里廃寺第3次～8次調査概要報告書』美馬市 2006～2011
- 川島廃寺跡** 『川島町史・上巻』川島町 1979
- 法輪寺跡** 『土成町史・上巻』土成町 1975
- 大唐国寺跡・かんぞう寺跡・金光明寺跡・釈迦堂廃寺** 『板野町史』板野町 1972
- 金剛光寺跡 常楽寺跡** 『徳島市史・第一巻総説編』徳島市 1973
- 土佐泊廃寺** 『鳴門市史・上巻』鳴門市 1971
- 立善寺跡** 『阿南市史・第一巻』阿南市 1987

[写真の出典]

国分寺・国分尼寺 「国分寺・国分尼寺」『ゲンちゃんと学ぼう徳島の歴史舞台より』
徳島県教育委員会 徳島県立埋蔵文化財総合センターオフィシャルサイト

(<http://awakouko.info>) で閲覧できます。

川島廃寺出土鬼瓦・螺髪 吉野川市教育委員会

石井廃寺金堂基壇 『石井』徳島県教育委員会 1962

3 授業の目標

- 1 本県の国分寺と国分尼寺の建立について学習し、仏教を通して中央と地方(徳島)の関係を理解する。
- 2 本県の古代寺院跡の分布について知り、自分たちの身近にある寺院跡について興味と関心を持つ。

4 教材について

[教材選定の理由]

本教材は、中学校社会科歴史的分野の内容(2)古代までの日本、イ律令国家の確立に至るまでの過程、及び、ウ仏教の伝来とその影響についてのうち、天平文化の項の発展的な内容として選定した。

展開例

(1) 展開例

天平文化の項のまとめの後の発展として、本県の国分寺・国分尼寺について、また、県内の古代寺院跡の分布等について資料に基づき10分程度で学習する。

(2) 発問例

○国分寺や国分尼寺は、どうして国府の近くに造られたのでしょうか。

○阿波国分尼寺には、どのような施設があったのでしょうか。

○丸瓦の模様は何を表したのでしょうか*。

○みなさんの住んでいる地域の近くには、どのような古代寺院跡があるのでしょうか。

* 軒丸瓦の模様(瓦当)は、蓮の花をデザインしたものです。古来、泥水の中から生じる蓮の花は、清浄と尊さのシンボルとされており、仏様がお座りになる台座(蓮華座)や寺院の屋根を飾る瓦にも蓮の花が用いられました。こうしたデザインが中国から日本に伝えられ、広まったものです。

(3) 「これは何でしょう。」

吉野川市の川島廃寺跡で出土した螺髪らぼつです。螺髪とは、悟りを開いた仏様の髪型で、髪の毛の一本一本が巻貝のように右巻きにカールしたものです。川島廃寺跡出土の螺髪は粘土製であり、塑像の仏像(如来形か)から剥離したものと考えられます。

【4】

阿波から都へ～三好氏の時代～

1 生徒用資料解説

三好長慶画像（大阪府堺市南宗寺所蔵）

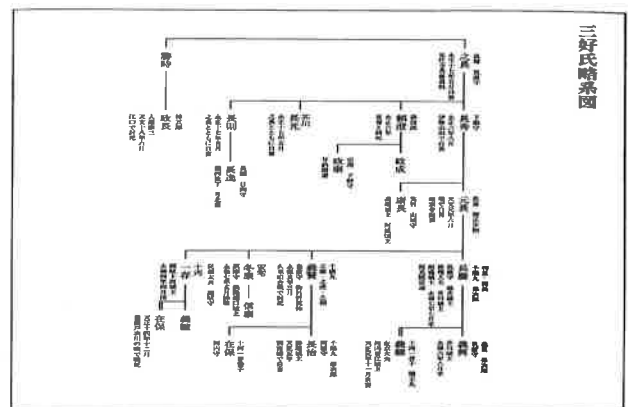
南宗寺は三好長慶が建立した寺院で、三好氏一族の墓所となっている。長慶は三好氏の最盛期を築いた人物で、父元長が死去した翌年の天文2(1533)年、わずか12歳で本願寺と細川晴元の講和を仲介。以後、父の仇でもある晴元の被官として専ら畿内で活動した。軍事的危機の時には、四国・淡路を押さえていた弟義賢・安宅冬康・十河一存が大軍を率いて兄長慶を支援。長慶は天文17(1548)年に主君晴元に背いて自立。天文22(1553)年には將軍不在となった京都を支配し、以後、5年余り、政治の実権を握った。長慶は優れた武将であったが、人柄は、敵であっても降伏すれば命は助けたことから温厚で寛容であったと評価され、和歌・連歌を愛好した優れた文化人としても知られている。生没年は1522年～1584年。

戦国大名三好氏の最大領地（今谷明『戦国 三好一族』所収図版に基づいて作成）

三好氏の支配領域については、年代、政治状況によって変遷があつて、一概に示すことはできないが、本図は今谷明氏が『戦国三好一族』において、三好長慶最盛期の領地を示したものに依拠した。この時には、山城（京都府）・摂津（大阪府）・河内（同前）・和泉（同前）・大和（奈良県）の一部・讃岐（香川県）・阿波（徳島県）・伊予（愛媛県）の一部・淡路（兵庫県）・丹波（京都府・兵庫県）の一部・播磨（兵庫県）の一部を領地とした。三好政権の主な拠点城郭としては、長慶の支配拠点は越水城（兵庫県西宮市）・芥川城（大阪府高槻市）・飯盛城（大阪府大東市）と変遷、弟義賢は勝瑞城（徳島県藍住町）・高屋城（大阪府羽曳野市）、同じく弟の安宅冬康は矩ノ口城（兵庫県洲本市）、十河一存は十河城（香川県高松市）・岸和田城（大阪府岸和田市）、重臣の松永久秀は信貴山城（奈良県平群町）・多聞山城（同県奈良市）などであった。

三好氏の系図

三好氏は鎌倉幕府の阿波国守護小笠原氏の末裔が三好郡に居住し、地名を名乗った氏族と伝えられる。ここでは近畿地方で活躍した三好之長・元長・長慶の三代と、長慶に協力した兄弟の関係を示した。特に、長慶の力が、兄弟によって支えられていたことを十分に説明する。



三好之長画像（藍住町見性寺所蔵）

之長は長輝とも称したことから、三好長輝肖像画として一般に知られている。之長は澄元の後見人として管領細川氏の被官となった後、敵対したもう一人の養子澄之とその支持者との対立・抗争を通じて頭角を現し、後の三好氏の発展の土台を作った人物である。永正17(1520)年、合戦に敗れ、京都百万遍で自害。

「兵庫北関入船納帳」に記された阿波の港

文安 2(1445) 年に「兵庫北関」に入関して、記録された船の船籍地として記載された阿波の港を示したもので、当然ながら、これ以外にも各地に港があった。なお、「惣寺院」は現在地名が伝わらないため、所在地は正確には不明であるが、藍を積み出した船の船籍地であったことから、吉野川河口部付近と考えられている。

阿波の港から積み出された産物

「兵庫北関入船納帳」に記載された阿波国の港に所属する船舶が積載した積荷を示したもの。阿波国南部は榑・材木が主体。阿波国北部では穀物・胡麻・藍などが中心。なお、このほかに、「兵庫津」に所属する船が、阿波から「阿波塩」・「藍」を大量に運んだことや、淡路島の「由良」船が榑を大量に運搬していたことも判明する。

勝瑞から出土した遺物の写真

藍住町教育委員会所蔵。勝瑞では平成 6 年度から発掘調査が開始されて以来、膨大な量の土器・陶磁器などの出土品が蓄積されている。本写真は特に茶道に関係する遺物の一部を示した。

三好義賢は著名な茶人であり、堺の商人とも度々茶会を開いた。勝瑞でも茶会が盛んであったことが多数の茶道具の出土から明らかになる。

2 発展的資料について

「兵庫北関入船納帳」

本史料は京都灯心文庫所蔵。もともとは奈良東大寺所蔵で、東大寺が管轄していた兵庫北関（神戸市）の通関記録であり、文安 2 年のほぼ 1 年間のものが伝来し、瀬戸内・九州の諸国から兵庫北関に入関した船舶・積荷とその量・船頭・問丸などが詳細に記載される。阿波国関係の港・船舶に関する記載も極めて多数に上っており、中世後期の阿波の水運・産物の具体的な姿を伝えてくれる貴重な史料となっている。



〈記載内容について〉

- 入関月日（左は 7 月 1 日入）
- 船籍地（最上段・末尾から 2 行目に突喰が見える）
- 積載品 ○積載量
- 関銭 ○関銭納入日
- 船頭名 ○問丸名

「兵庫北関入船納帳」の記事

区 分	積 載 品								
	樽(石)	材木(石)	米(石)	大麦(石)	小麦(石)	藍(石)	胡麻(石)	アラメ(石)	阿波塩(石)
阿波の港津	土佐泊			1212	1515	10	4		
	撫養					6	30		
	別宮							41.5	
	惣寺院						14		
	平島	735	1095						140
	橋	430							
	車枝	1680							
	海部	9440							
穴壁	2210	250							
合 計	14495	1345	1212	1515	16	48	41.5	140	
参 考	地下	3620	260				371		480 305
	由良	14100					23		265 300
合 計	17720	260				394		745 605	

○品目別の数量を示した。

○「参考」として「地下」（じげ・地元の兵庫津のこと）「由良」の船舶が樽・材木・藍・阿波塩などを大量に運んだことを示した。

阿波の港津から運ばれた産物

三好元長画像（＊画像は省略）

藍住町見性寺所蔵。徳島県指定有形文化財。三好元長は之長の孫で長慶の父。元長は大永 6(1526)年に細川澄元の子晴元を擁して阿波から堺に上陸。敵対する足利義晴・細川高国を破って、足利義維を将軍に就け、堺でそれまでの幕府に代わって政治を行った。（そのため堺幕府と呼ぶ研究者もいる。）しかし、享禄 2(1529)年に柳本賢治等と対立し、阿波に帰国してからは内部対立が絶えず、勢力が弱まった。最後は天文元(1532)年に本願寺一向一揆に攻められ、堺の顕本寺で自害した。

三好実休画像（＊画像は省略）

大阪府堺市妙国寺所蔵。実休は法名。妙国寺は実休（義賢）が深く帰依した日蓮宗の寺院。実休は長慶の次弟で、兄が中央に進出して活動したことから、兄に代わって阿波及び当時実質的に三好氏が支配下に置いていた讃岐国を勝瑞を拠点として統治した。阿波では当初は守護細川持隆に仕えたが、天文 22(1553)年に持隆を勝瑞で自害に追い込み、幼主真之を守護に立て、実施的に阿波の国主となった。実休は武将として活躍しただけでなく、茶人としても知られ、堺などでの茶会の詳細な記録である「茶会記」に、他の三好一族とともに度々登場する。後に実休は河内国を与えられ、高屋城に移り、永禄 4(1561)年には幕府御相伴衆に列したが、翌年 3 月の和泉久米田（大阪府岸和田市）の合戦で、畠山高政に敗れて戦死した。

国史跡「勝瑞城館跡」

守護町勝瑞遺跡 Official Web Site <http://www15.ocn.ne.jp/~shouzui/index.html>

3 参考文献

- 天野忠幸『三好長慶』ミネルヴァ書房、2014年。
- 今谷 明『戦国三好一族』新人物往来社、1985年。
- 徳島城博物館『平成 13 年度秋の特別展 勝瑞城館国史跡指定記念 勝瑞時代 三好長慶天下を制す』2001年。
- 第 22 回国民文化祭藍住町実行委員会『戦国浪漫 勝瑞探訪 よみがえる三好氏の文化』2007年。

4 目標と本時

授業の「目標」

身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味や関心を高め、様々な資料

を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

本時の目標

- ・身近な地域の歴史として、阿波出身の戦国大名三好氏を取り上げることにより、戦国時代及び戦国大名に対する興味や関心を高める。
- ・中世後期の阿波の水運の発達の様子と、当時の産物について、具体的な史料に基づいて取り上げる事により、戦国大名三好氏の経済的基盤等に対する理解を深める。
- ・三好氏が本拠とした勝瑞の発掘調査を通して、埋もれていた歴史の解明が進められていることについても理解を促し、遺跡や文化財に対する愛護精神の涵養を図る。

5 評価規準と評価方法

評価規準の設定	評価方法
世界や日本の中における徳島の伝統と文化について、公正に判断する。	○戦国時代の日本歴史の中に三好政権が正しく位置づけられているかが評価のポイントとなる。
徳島の伝統と文化の魅力を、県内外で主体的に発信できる。	○三好氏が阿波出身でありながら、なぜ中央へ進出することができたのかについて理解できているかどうか、また、三好氏が中央で活動できた背景に阿波の経済力・軍事力があることを理解しているかどうか、さらには中世阿波の政治拠点としての勝瑞についてその場所を説明できるかどうかを評価のポイントとなる。

6 板書計画

(1) 戦国大名三好氏

- ・阿波国三好地方出身。
- ・之長・元長・長慶と3代にわたって近畿地方に進出。
- ・長慶の活動を義賢・冬康・一存の兄弟が支援。←阿波の軍勢も度々渡海。
- ・長慶の時、最大8か国の戦国大名として、近畿地方を支配。
- ・この時、阿波国内でも義賢が天文22(1553)年に細川氏を討つ→三好政権の全盛期。
- ・永禄7(1564)年、長慶病死。→三好三人衆・松永久秀・篠原長房の活動。
- ・永禄11(1568)年、織田信長上洛。→三好政権崩壊へ。

(2) 中世阿波の港と産物

- ・活発な水運の展開 (『兵庫北関入船納帳』に阿波の港・産物の記事)
- ・阿波の特産物 (材木・藍・塩など)

(3) 戦国城下町勝瑞の発展

- ・細川氏・三好氏の政治的拠点。
- ・当時の文化先進地・堺(大阪府)との活発な交流=茶会など。
- ・国史跡「勝瑞城館跡」の発掘調査によって堀跡・庭園跡、土器・陶磁器など出土。

(4) まとめ

- ・近畿地方と阿波との密接な歴史的つながり→歴史的視点での検証へ

7 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入	<p>○戦国時代・戦国大名についての学習内容を復習。</p> <p>○本時の学習内容の予告を聞き、地元徳島とも関係の深い内容であることを理解する。</p>	<p>○既習の戦国時代・戦国大名の学習内容を簡潔に振り返り、本時の学習の時代背景等を理解させる。</p> <p>○本時の学習内容を予告し、身近な歴史を通して戦国時代に対する興味関心を喚起する。</p>
展開	<p>○三好氏が戦国大名として成長するまでの過程を理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・三好長慶の画像とその領地を示した地図を見て、戦国大名三好氏の存在を知る。 ・三好氏の出身地をその名字から推定し、発表する。 ・三好氏がなぜ中央政界で頭角を現すことができたのか、その理由を理解する。 ・三好長慶がなぜ近畿から四国にかけての広い領地を支配することができたのか考え、話し合う。 ・三好政権の下での阿波と近畿地方との関係について考え、意見を発表する。 <p>○阿波の特産物と水運についての理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「兵庫北関入船納帳」が当時の歴史を考える上で貴重な史料であることを理解する。 ・阿波の港から運ばれた産物を示した表を見て、気がついたことをそれぞれ発表し、阿波の特産物について理解する。 ・中世阿波の港の場所を地図で確認し、それぞれの地域の産業について考える。 ・当時の阿波と近畿地方との交通・運送について意見を発表する。 <p>○阿波三好氏の拠点「勝瑞」が中世地方都市として発展したことを理解する。</p>	<p>○複雑な政治過程のため、主要事項のみを簡潔に整理して理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・肖像画の説明の時には、優れた文化人であったことなど、人間像についても取り上げる。 ・三好氏が小笠原氏出身と伝えられていることも合わせて紹介する。 ・管領細川氏の家督争い（両細川の乱）にも簡単に触れ、三好氏が細川氏の権勢に支えられていたことを理解させる。 ・長慶と義賢などの兄弟について簡略に説明し、一族の協力関係に気づかせる。 ・三好氏が海を取り込んで領国支配を行ったことから、当時の海の役割についても考えさせる。 <p>○三好氏の活動の背景に経済力と水運の力が不可欠であったことを理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史が良質の史料に基づいて解明されるものであることを具体的に理解させる。 ・材木は西国では最多、藍は唯一、塩は「阿波塩」と呼ばれることから、それぞれ有力な特産物であったことを理解させる。 ・港の場所と積荷が、その周辺の産業（生産）と深く繋がることに気づかせる。 ・前近代の社会における水運の重要性について理解させる。 <p>○勝瑞が阿波国の中心地として発展していたことを通して、時代によって中心地が変遷す</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・中世の町としての勝瑞が持つ「特徴」について気がついたことを発表する。 ・勝瑞の発掘調査の成果を基に，勝瑞の町の姿について意見を出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ることを理解させる。 ・吉野川河口デルタ地帯という地理的条件の持つ意味について考えさせる。 ・報道等を通して知っていることを積極的に発表させ，日頃から郷土の情報に対する興味関心を高めておくことの重要性に気づかせる。
結論	<ul style="list-style-type: none"> ○阿波出身の三好氏が信長・秀吉登場以前の京都・日本の歴史に大きな足跡を残したことを理解する。 ○阿波と近畿地方が歴史的にも密接に関連していることを理解し，地域社会の形成を歴史的な視点から理解しようとする意欲を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○現在の京都・大阪に当時の遺跡などが数多く伝わっていることも合わせて紹介することにより，今後の興味関心につなげる。 ○現代的視点だけで京阪神地区との関係を考えるのではなく，中世という歴史上の時点でも彼我の関係性を考える視点の重要性に気づかせる。

【5】

なぜ徳島に城下町ができたのか

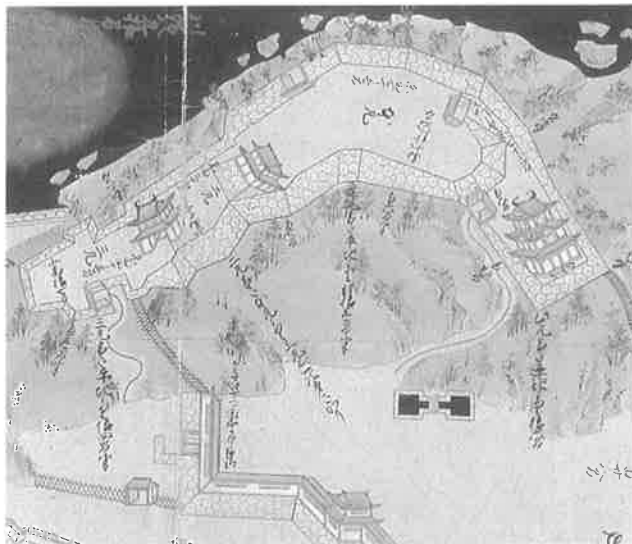
1. 生徒用資料解説

写真 「阿波国徳島城之図」(生徒用テキスト9P)

(徳島市立徳島城博物館編『徳島城下絵図』, 2000年)

天保3(1646)年 東西 361.1 cm×南北 240.0 cm 手書き彩色, 見取図, 個人蔵

徳島城下町については何枚もの絵図が作成されている。ここに載せた1646年のものは、その中でも比較的早い時期のものである。幕府は天保元(1644)年に諸藩に城下絵図を提出させたが、本図はその控である。中央部分に徳島城が描かれ、東二の丸に立つ天守(右に拡大写真)をはじめ、櫓、枡形、塀、石垣(右下の写真は本丸東端に残る天正年間の野面積石垣、以上2点は「徳島城まるごと博物館」徳島城博物館, 2008年より)などの防御施設が描かれている。



なお、下の写真は、明治5(1872)年頃に写された、徳島城の唯一の写真。鷲の門や月見櫓に加えて、中央やや上に山上の天守が見える点で貴重である(「徳島城まるごと博物館」)。

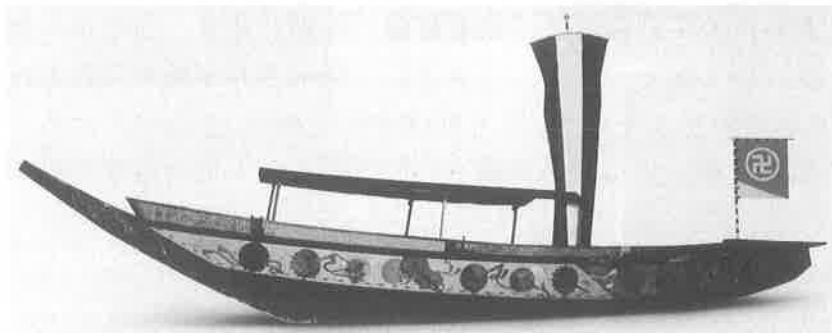


本図に戻り、目を引くのは、濃紺色で示された海・川・堀である。左上部には「吉野川の枝川」と別宮川(現・吉野川)が示されているが、「吉野川」との川名が絵図で示されたものでは最古の絵図である。城下には大小の河川が網の目のように流れており、湿地帯を埋め立てながら城下町が建設されたこと、また川が徳島城の防御の役割を果たしていたことが確認できる。

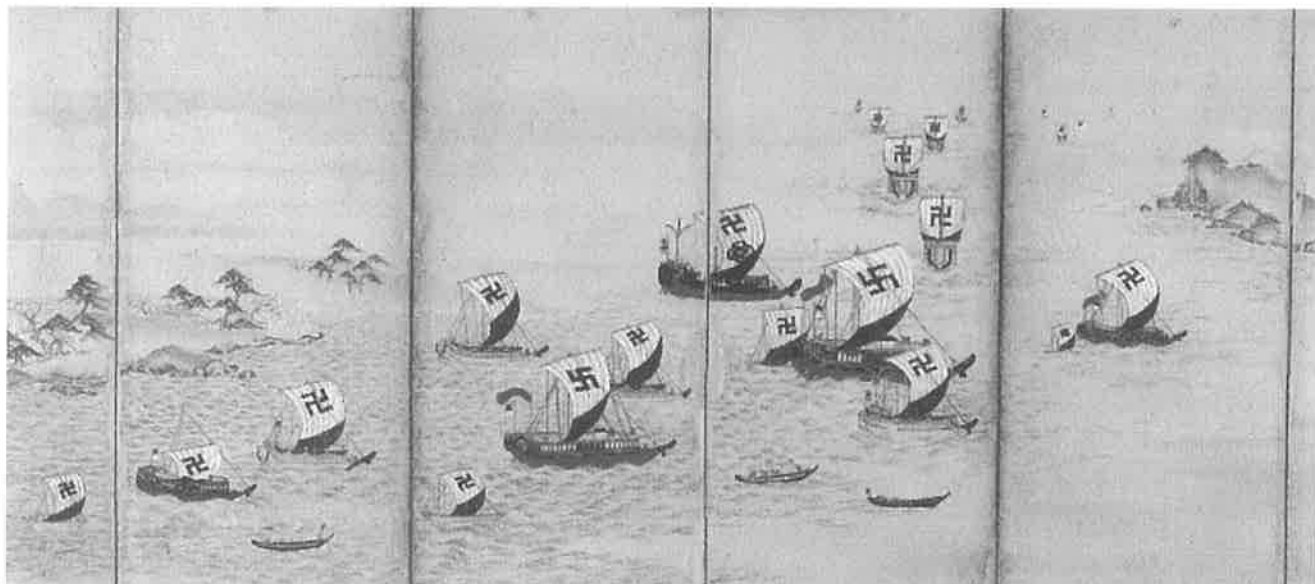
さて、城の周囲(徳島・寺島・出来島・助任・常三島・福島・住吉島)には「侍屋敷」



「葺屋敷」が占め、中央やや左下には「足軽町」が存在した。



また東端には「舟入」と記された水軍基地がみえる。当初は常三島南島の安宅島（現在の徳島大学工学部付近）に、船置所や役所、船頭屋敷・加子屋敷が存在したが、寛永 16 (1639)年以降に、本図に見える安宅地区（現在の城東中学校敷地）に移転したものである。



徳島藩では、参勤交代する際には、船が不可欠であったため、こうした水軍が存在した（写真上は、「徳島藩御召鯨船千山丸」で、藩主が大船への乗り継ぐ際に用いられた船で、金箔を貼り、装飾が施されている、徳島城博物館所蔵、写真下は、「徳島藩参勤交代渡海図屏風」の一部、近世後期—近代の藩御用絵師森崎春潮の作とされる。蓮花寺蔵、徳島城博物館寄託。写真2点は展示図録「わがまちのたからもの」徳島城博物館、2008年より取込）。

一方、「町屋」と示された町人地は、内町・新町が中心であり、西端の佐古、東端の福島、北側の助任にもそれぞれ存在していた。

写真 「徳島盃蘭盆組踊之図」（生徒用テキスト10P）

1巻、紙本著色、縦 34.7 cm × 横 578.0 cm、近世後期、原田弘也氏蔵
（特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島城博物館、2007年より）

江戸時代の盆踊りを描いた数少ない作品の一つで、「組踊」（くみおどり）を描いた唯一の作品。徳島城下 14 町から繰り出した「組踊」が、出し物を凝らして繰り出す様子を、色鮮やかに描いている。同じ意匠でそろえた踊り子が道から溢れんばかりに踊りを繰り広げ、それを多くの見物人が取り巻き楽しんでいる。

ここで注目されるのは、現在の阿波踊りのような「連」ではなく、町が踊りや出し物の単位となっている点である。14 町の構成は、富田中園組の十二支踊り（図はこの拡大部分）、

籠屋町組の鏡研ぎ踊り，助任町組の拳踊り，福島町組の星踊り，西助任町組の汐干狩踊り，八百屋町組の石切屋踊り，佐古大谷組の宇治橋踊り，新屋敷組の祇園会踊り，通町組の越後獅子踊り，石場組の忠臣蔵十段目伊五踊り，佐古十一丁目組の物干さわぎ踊り，佐古八丁目組の胡蝶踊り，紙屋町二丁目組の浮世又平踊り，大工町組の雨乞踊り，となっている。

なお，二階建ての町屋が道にそって建ち並んでいる様子も，当時の町人地の景観の特徴をよく示している。

以下，参考までに全部分を掲載する。



24 徳島宝華堂船橋之図
文化・大保存期(1924)44[歴史] 縦34.7cm・横57.6cm 著/著 島田玄徳氏蔵

写真 徳島城下町跡徳島一丁目地点から出土した木簡の赤外線写真
(公益財団法人 徳島県埋蔵文化財センターのホームページより)

<http://www.tokushima-maibun.net/modules/bulletin/index.php?storytopic=2380>

「徳島城下町跡徳島町一丁目」地点は、徳島市徳島町1丁目5に所在し、明治11(1878)年に高知裁判所徳島支庁庁舎が建設されて以降、徳島地方裁判所が設置されている。この地は、近世では徳島城の外郭にあたる「徳島惣構」を構成する「徳島」の一角に位置し、徳島藩蔵や藩の家老・中老・物頭等上級家臣屋敷地によって構成されていた。

調査地点は、安政年間(1854年～1860年)作製の「御山下島分絵図(徳島)」には、「新御蔵」敷地と徳島藩中老森甚太夫家、中老武藤左膳家敷地として、徳島城下町成立期にあたる正保3(1646)年「阿波国徳島城之図」には「蔵屋敷」として記載されていることから、徳島藩御蔵や上級武家屋敷地の一角に該当する。

2013年の徳島県埋蔵文化財センターの調査により、ここからは17世紀後半の溝状の遺構と、そこから木簡226点が出土した。その大半が米俵等に付した荷札木簡であった。形状は、俵物に突き刺すために先端を尖らした一群、俵物から吊り下げるために紐通し穴をあけた一群、俵物から吊り下げるために上部左右に抉りを入れた一群などがあり、多様であるという。徳島藩では米1俵に5斗入っていたが、木簡にはその生産地として「上佐那河内村」「浅川村」「くし川村」「大野村」「吉野村」「板野郡」等、名東郡佐那河内村や海部郡の地名が記されており、領内からの年貢米がこの「蔵屋敷」に納められていたことが判明する。

写真右(表面)では、年貢米として米五斗を辺川村(現在海部郡牟岐町辺川)の貞左衛門が納めたことを記し、写真左(裏面)は村役人である五人組の儀三郎が「升起」(年貢米の品質検査カ)をしたことを記している。この木簡を付した米俵が、辺川村から徳島城屋敷まで運ばれたものと考えられる。

写真 絵はがき 「藍場の昔懐かしき新町川」(生徒用テキスト10P)

20世紀前半(大正・昭和) 9.2cm×14.3cm 高田恵二氏所蔵

(特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島城博物館, 2007年より)

白壁の藍倉が建ち並び、川には帆掛け船が物資を輸送している。近代の水を活かした町の様子を示す写真は、他にも多く残されており、「水運」が中心であった当時の状況を理解しやすい。

(参考1) 明治後期の城下町徳島 「東宮行啓記念写真帳」(1908年)より



眉山中腹から撮影された徳島市街地の様子。上には吉野川、右上に紀伊水道、中心部を左から右に新町川、そして中央左側に城山が写し出されている。とくに新町川筋には、白

壁の藍倉が軒を連ねている。山裾には寺町の寺院が並び、市街地は低層（2階建てが大半）の町屋の屋根が密集していることがうかがえる。

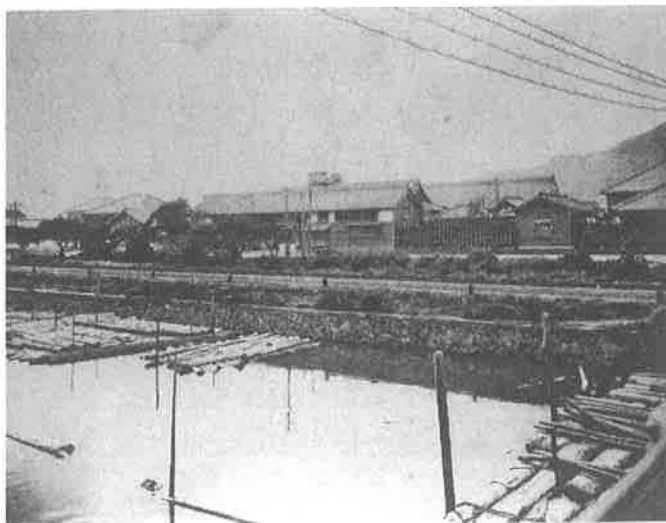
（参考2）賀島屋敷と寺島川

（「東宮殿下行啓記念写真帳」1922年）

寺島川は現在埋め立てられ、JR牟岐線となっている。川の西側にあった家老・賀島屋敷は、近代に入ると1930年まで徳島県庁舎となっていた。

ここでは寺島川に材木が浮かべられていることが確認できる。

（特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島城博物館，2007年より）



（参考3）新町川の藍倉

（展示パンフレット「城下町徳島」徳島県立文書館，2005年より）



表 （石躍胤央・高橋啓他『徳島県の歴史』山川出版社，2007年，136頁より）

2 授業の目標と授業過程

（1）目標

（関心・意欲・態度）

○城下町の特徴について、自分なりに意見を持って積極的に発言しようとする。

（思考・判断・表現）

○学習した内容や具体的な資料に基づいて、幕藩体制下に形成された城下町の特徴について、立地、居住した人びとの身分、機能の観点から、考え説明できる。

（資料活用技能）

○城下町の特徴について説明するために、教科書の資料や提示された資料、あるいは自分が調べてきた資料を活用できる。

(知識・理解)

- ①幕藩体制のもとでの藩領支配の拠点として役割，②藩の政治的・経済的中枢として建設された城下町の特徴，③および全国市場につらなる物流の結節点としての城下町の機能について，理解し説明できる。

(2) 授業過程

〈1. 導入〉蜂須賀氏の支配と徳島城

- ・羽柴秀吉の家臣である蜂須賀氏が阿波国を領地とし，これが後の徳島藩となったこと，その蜂須賀氏が一宮城ではなく徳島城を本拠とし，徳島城下町を建設したことを説明。
- ・余裕があれば，阿波九城（支城）の位置を確認し身近な地域との関連を示唆した上で，それが一国一城令により廃止された事実を示す。藩は必ずしも独立した存在ではなく，その軍事力は幕府の統制下におかれていたこと，また戦時から平時へと時代が変化しつつあったことを理解したい。
- ・設問1なぜ蜂須賀氏は，一宮城ではなく徳島城を拠点としたのだろうか？

〈蜂須賀氏の立場〉

前の単元での一宮城の図と，徳島城下絵図とを比較する

回答例．山城から平山城，平地が多い場所，水運を利用しやすい，広い土地 etc = こうした特徴は何を意味するのだろうか？みんなで考えよう。

(あわせて阿波国概略図を利用して，徳島の地政学的位置を確認してもよい

ex 吉野川を通じて西部地域の統治，海を通じて南部の統治や，阿波外部との関係を持ちやすい等)

〈2. 展開1〉17世紀絵図から徳島城下町を探ろう。

- ・設問2 徳島城下町をさぐろう

正保3年(1646)絵図をよく見て気づいたことを発表しよう。

- 回答例・いくつもの島からできた都市 ⇒ 湿地帯にできた都市
- ・まだ田んぼや海のところが多い ⇒ これからも都市は拡大
 - ・天守閣は三重で，しかも本丸にない ⇒ マニアック？！
 - ・城の区画と内町付近の川沿いは石垣 ⇒ 湿地を埋め立てた技術的背景
 - ・多くが「侍屋敷」や「足軽町」 ⇒ 城下町の大半が武家地
 - ・東端の海近くに四角い区画 ⇒ 阿波水軍の基地／参勤交代に必要
 - ・「町屋」が少ない ⇒ 意外に少ない町人地／でも成長

- ・表で，17世紀の町人地には，いつもの「町」が存在していたこと等を確認

(正保絵図とあわせて寛政8年絵図(1796)や現在の地形図と比較してもよい = 都市拡大の様相)

- ・余裕があれば，「徳島孟蘭盆組踊之図」(近世後期の作)を見せて，阿波踊りが，町ごとに実施されていることに気付かせたい(町ごとに異なる踊り・テーマ性・意匠など多様)

- ・生徒の気づいた諸点が、城下町の特徴（⇒部分）である点を確認しつつ小括
 - ① 徳島城下町は湿地を埋め立ててできた都市＝水運の利用が可能
 - ② 武士・町人・寺などが、身分に応じて計画的に配置されて居住／百姓は不在＝武士団や町人を身近におくためにも、広い土地に都市建設

〈 3. 展開 2 〉

- ・設問 3 城下町を流れる川をどのように利用していたのだろうか

（ 2. 展開 1 の①②を活かしつつ…）

素材 1. 徳島地方裁判所付近から出土の木簡（年貢米についていた荷札）

⇒領内の年貢米が徳島城下の蔵に納められていた。

素材 2. 藍場浜付近の藍蔵&船／石垣の古写真（近代）

⇒領内で産出された藍玉・葉が、藍倉に一旦保管され、全国へ流通。

これらの素材からわかることをまとめる

- ① 城下町は年貢米を集めるだけでなく、城下に住む武士・町人の生活に必要な物資を、外の世界から移入させてくる必要があった消費都市
- ② 領内の産物を、全国各地に移出していく拠点
- ③ 領内⇔城下、あるいは城下⇔全国各地と、産物・物資を流通させる結節点＝だから水運を利用できる都市である必要

〈 4. まとめ 〉

○各章で指摘できた点をふまえ、もう一度「どうして徳島に城下町ができたのか？」という設問に立ち返る。

○○だったから、徳島に城下町を作った。

△△…

××…

○その上で、展開

・発展例 1 自分たちの地域が、徳島城下町とどのような関わりがあったのだろうか。

ex 調べ学習

⇒徳島市内でなくても、身の回りの地域（領内）が城下町と政治的・経済的に関連していたことに気づかせる。

・発展例 2 同じ頃に建設された都市はどこだろう？その共通点は？

ex 江戸・大坂・高松…海沿い埋め立て地

⇒徳島だけの特徴ではなく、この時期に建設された城下町としての共通性に気づかせる。

・発展例 3 水を活かした城下町が、その後どのように変化して現在に至るのか、調べてみる。あるいは城下町の痕跡を歩いて探す。

ex. 現地を歩き、疑問点を徳島城博物館の学芸員に質問したり、「ひょうたん島クルーズ」に乗って、現在の都市を、視点をかえて川から眺め考える。

3 板書計画

どうして徳島に城下町ができたのか？ —徳島城下町の成立—

1. 蜂須賀氏の支配と徳島城

- ・天正13年、蜂須賀氏が阿波入国
- ・一宮城から徳島城へ

⇒領地（「藩」）を支配する拠点として、徳島城・徳島城下町を建設

2. 17世紀絵図から徳島城下町を探ろう —徳島城下町の構成

- ・（生徒が気づいた点1）
- ・（生徒が気づいた点2） …etc

⇒湿地を埋め立ててできた都市

=逆に水運を活用

⇒武士（家臣団）と町人らが、身分に応じて配置され居住＝百姓不在

3. 「水の都」—物流の結節点—

- ・消費都市
- ・阿波の産物を各地へ移出する拠点の一つ

まとめ

- ① 軍事的防御のためだけでなく、藩内を支配する政治・経済の中心地
- ② 武士と町人の居住地であり、一大消費地
- ③ 水運を活かし、領内や全国とを結ぶ物流の結節点

4. 発展的教材研究のための資料とその解説

- ・佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6都市社会史』山川出版社，2001年）
- ・山口啓二『鎖国と開国』（岩波現代文庫）（岩波書店，2006年）
- ・石躍胤央・高橋啓他『徳島県の歴史』山川出版社，2007年
- ・石躍胤央編『街道の日本史44徳島・淡路と鳴門海峡』吉川弘文館，2006年
- ・徳島市立徳島城博物館編『徳島城下絵図』徳島市立徳島城博物館，2000年
- ・特別展図録『秀吉の町・家康の町』徳島市立徳島城博物館，2007年
- ・展示図録「徳島城まるごと博物館」徳島城博物館，2008年
- ・展示図録「わがまちのたからもの」徳島城博物館，2008年

5. 評価規準

徳島の伝統と文化を知る。

○なぜ徳島に城下町ができたのか，その理由を探ることで，藩領支配の中心地という政治的側面，水運を活かした物流の結節点という経済的側面など，複数の側面から徳島城下町の特徴を理解できる。また，蜂須賀氏による支配の立場の観点だけでなく，都市機能やそこに住み生きた人たちにも目を向けることができる。

○ふだん見慣れた徳島が，違う景色に見える。

世界や日本の中における徳島の伝統と文化について、公正に判断する。

○徳島城下町の特徴を通じて、幕府と藩との関係、全国市場との関連、新しい町人文化の生まれる場としての側面など、当該期に建設された城下町に、共通して見られる要素を理解することができる。

【6】 小学校のはじまり～学制と徳島の教育～

1 生徒用資料解説

①明治期の小学校・寺島校：徳島県教育委員会編『徳島県の歴史読本 平成17年版』
2005年3月，p.102

「1872年（明治5）に公布された「学制」によって，徳島では出来島に一番小学校（旧西校），寺島に二番小学校（旧南校），助任に三番小学校（旧北校）が名称も新たに設立された。そのころの名東県（阿波・淡路・讃岐を含む）には，公立31，私立439の小学校が誕生し，教育をうけなければならない年齢に達した児童の約30％がそこで学ぶようになった。やがて，師範学校・中学校・女学校の創立もあいつぎ，また児童の就学率もしだいに高まり，明治の末には96％に達した。」

②名東県で発行された教科書：三好昭一郎・大和武生編『徳島県の教育史』思文閣出版，1983年7月，p.218，一部改変

「当時の教科書を見ると，（注・『小学読本』巻一冒頭には）『凡そ世界（地球上？）の人類は五つに分れたり。亜細亜人種，欧羅巴人種，亜米利加人種，亜非利加人種，馬來人種，日本人は亜細亜人種のうちなり・・・』とある。私はこれに対して幼な心にはじめて妙な感にうたれた。即ち世の中に人間は皆同じと思うていた（尤も西洋人は父母から唐人として教えられたけれども）のに，かくの如く五つの人種があるとは初めて知った」（鳥居龍藏『ある老学徒の手記』所収）というような，一種のはげしい好奇心を誘い，異質なものにふれさせようとしたのも，学制当初の小学校教育内容の一面をよく表現している。」

③明治初年の教授法：徳島市教育委員会編『徳島市教育史』教育出版センター，1974年3月，資料集 p.1（関連）板倉聖宣「小学校の誕生」『週間朝日百科 94 日本の歴史（近代Ⅰ） 学校と試験』p.10-104

「この「問答」を中心とした授業は，そのために作成された掛図や『小学読本』がアメリカのものを直訳したもので，難解極まるものが少なくなかった。たとえば，一年後期から二年前期で教える「色図」の授業では，四十種もの色の名前や色の合成分解まで教えるようになっていた。読本だって，英語では易しい文章をそのまま直訳して日本文としたために，やたら難しい文章から教えた。（中略）掛図や実物による問答法の授業は，欧米でも進歩的な教育思想の流れをくんだものであったことは間違いない。しかし，その内容を日本の言葉や事物に合わせて編成しなおさなければ，その教育は伝統的な寺子屋教育よりも遙かに劣るものでしかなかったことは明らかであろう。」

④名東県の小学校就学状況：三好昭一郎・大和武生編，前掲書，p.216

「明治六年度に三十一校であった小学校は，同八年度には四一六校に急速な増加を見ている。当時における名東県の小学校就学状況は，学齢就学率についてみると明治6年が32.4

%, 明治7年が 29.3 %, 明治8年が 29.9 %である。さて, 新設校の校舎は, 民家使用が二〇〇校, 寺院借用が七十八校, 神社が十六校で, 新築はわずか三校のみであった。そこに当時の小学校設立の行財政上の特色がよく表現されている」(斜体字部分は, 統計にもとづき改変した)

2 発展的に扱える資料

○制度としての学校が持つ国民形成の機能について考察したもの

桜井哲夫『「近代」の意味－制度としての学校・工場－』NHKブックス, 1984年

○日本近代化の過程(社会変動)と学校や試験の機能との関わりを論じたもの

竹内洋『立身出世主義』NHKライブラリー, 1997年

○大阪府等を事例に, 明治の小学校教育の制度や教員養成制度について考察したもの

大森久治『明治の小学校－学制から小学校令までの地方教育』泰流社, 1973年

○日本の学校教育制度の変遷を概観したもの

文部省編『学制百年史』帝国地方行政学会, 1972年

3 参考文献

1. 徳島県教育委員会編『徳島県教育八十年史』1955年3月

2. 徳島県退職婦人校長会編『徳島県教育女性史』1989年3月

3. 徳島市史編さん室編『徳島市史 第四巻 教育編・文化編』徳島市教育委員会, 1993年10月

4. 石躍胤央・北條芳隆・大石雅章・高橋啓・生駒佳也著『徳島県の歴史』山川出版社, 2007年6月

5. 久保義三・米田俊彦・駒込武・児美川孝一郎編『現代教育史事典』東京書籍, 2001年12月

4 板書計画

小学校のはじまり～学制と徳島の教育～

○比べてみよう

江戸時代の寺子屋の様子

明治初年の小学校の授業の様子

- ・ 明治の小学校では、掛け図を使った問答中心の授業が行われた。
- ・ 全員が同じ科目を学ぶ。等

学習課題 1 明治に入り、なぜ小学校の教育が必要と考えられたのだろうか。

- ・ 学問は、国民が身を立てるための資本（立身・産業教育）
- ・ 国民すべてに必要なとされる教育（国民教育）
- ・ 子供（子弟）の教育は、保護者（父兄）の義務（義務教育）

学習問題 2 徳島では、小学校教育はどのように始まったのだろうか。

- ・ 1873（明治6）年、一番小学校・二番小学校・三番小学校が設立
- ・ はじめは、男女とも10歳から入学
- ・ 就学率は、約32%→必ずしも高いとは言えない。

学習問題 3 国民の義務としての教育を定めたのに、なぜ就学率は高くなかったのだろうか。

- ・ 校舎の建設や教員の雇用→町や村の負担
 - ・ 親の授業料負担
 - ・ 「子どもは働き手」という考え方
- ⇒学校教育の意義が、国民に十分に広がらなかった。

学習問題 4 当時の徳島の人たちに、学校がないと困る理由を自分の言葉で主張してみなさい。

主張 A

主張 B

主張 C

主張 D

5 授業の目標

(社会的事象への関心・意欲・態度)

○学校の存在理由について、自分なりの意見を持って積極的に発言しようとする。

(社会的な思考・判断・表現)

○学習した内容や具体的な資料に基づいて、明治新国家の建設という観点から、学校の存在意義について考え説明できる。

○学校の存在意義について自分の意見を表現し、相手の意見も聞きながらクラスで議論することができる。

(資料活用の技能)

○明治はじめの小学校教育の状況や学校の存在意義を説明するために、教科書の資料や自分が調べてきた資料を活用できる。

(社会的事象についての知識・理解)

○学制の理念となっている小学校教育の意義について理解し説明できる。

○明治のはじめ、学校教育の意義が国民に十分に広がらなかった理由を、時代の特色とむすびつけながら理解し説明できる。

6 授業展開例

－ 2 単位時間配当の小単元構成の場合 －

	学習活動	指導上の留意点
導入	江戸時代の寺子屋の様子と明治はじめの徳島の小学校での授業の様子(図版「明治初年の教授法」を活用)とを比べ、小学校の授業の特徴について、気づいたことをワークシート(問題1)に書き込む。その内容をクラスで発表し合う。	○江戸時代の寺子屋の様子については、教科書や図説資料集に掲載されている図版を活用する。
展開	【パート1】 テキストブック掲載の資料「学事奨励に関する仰せ出され書」(一部要約)を読み、その記述から、明治政府による学制にもとづく小学校教育のねらいを読み取り、ワークシート(問題2)に書き込む。 ワークシートに書いた内容をクラスで発表し合う。	○資料「学事奨励に関する仰せ出され書」(一部要約)について、文中の難解な用語は、教員が適宜解説する。

<p>【パート2】</p> <p>テキストブック掲載の資料（写真資料「二番小学校（寺島校）」、写真資料「名東県発行の小学校教科書」）を参考にしながら、徳島ではじまった小学校教育の実情について、テキストブックの本文記述（徳島ではじまった小学校）をもとに、ワークシート（問題3）にまとめる。</p> <p>小学校で教えられた科目や授業の方法について理解する。</p>	<p>○小学校で教えられた科目や授業の方法については、具体例を挙げながら、生徒がイメージ豊かに理解できるように工夫する。</p>
<p>【パート3】</p> <p>小学校教育のはじまりのころ、全国的にも、徳島においても就学率が低かったことを統計資料「名東県の小学校就学率」や補足資料（就学率に関する全国統計）から読み取り理解する。</p> <p>その理由を、行政や保護者の立場、あるいは当時の「子ども観」を観点に、テキストブックの本文記述（学制が徳島の人々に与えた影響）をもとに、ワークシート（問題4）にまとめ、クラスで発表し合う。</p>	<p>○就学率が低かった理由を、生徒が具体的なイメージをもって考えることができるように、補足資料（小学校の建設費、教員の給料、授業料、「子ども観」等に関する資料）を準備し活用させる。</p>
<p>【パート4：発展学習】</p> <p>グループに分かれ、「当時の徳島の人たちに向けた、学校がないと困る理由についての主張」を自分の言葉で作る。グループの主張をワークシート（問題5）にまとめ、クラスで発表し合う。</p>	<p>○パート4は発展学習である。この学習を展開する場合は、パート1～3を1単位時間（50分）とし、パート4及び終結部の学習活動に1単位時間を配当するようにする。</p>
<p>結論</p> <p>パート4で出し合った主張をふまえながら、学校教育の意義について政府（国家）の立場と国民（個人）の立場に分けて整理してみる。</p>	

【7】 阿波おどりの歴史と魅力について語ろう

1 教材について

〔教材選定の理由〕

「徳島県出身なら阿波おどりが踊れるやろ。」と言われて、小学校の運動会以来、踊ったことのない阿波おどりをこわごわ踊ってコミュニケーションを図ったという話をよく聞く。阿波おどりは、それほど本県の文化を代表するものでありながら、その歴史についてきちんと学ぶことなく大人になっている。また、ふるさとについて「阿波おどりしかない。」という否定的な言い方をする若者も多いが、阿波おどりの現在の状況について正確に知ろうとはしていない。

そこで、まず徳島県の伝統芸能の中で一番馴染みのある阿波おどりの歴史について学び、その特徴と魅力を探りながら、阿波おどりを大切にできる態度を身に付けてほしい。さらに、これからの阿波おどりのあるべき姿について話し合うことを通して、自信と誇りを持って阿波おどりを語り、積極的に関わっていかうとする意欲を培いたいと考え、この教材を選定した。

〔生徒用資料解説〕

阿波盆踊図

18世紀末の「阿波盆踊図」は最古の盆踊り図とされ、図に見える大きな傘は依代（よりしろ）といって祖先の霊が宿るシンボルであり、その横では、輪になって踊る姿が見える。このような小規模な盆踊りは、空き地や辻で踊ったと考えられる。このタイプの踊りとして、現在も踊られているのがワークシートの「津田の盆（ぼに）踊り」である。

「それは城下はずれの津田の漁村における盆踊りとして、今日に継承されている。」「図説 徳島県の歴史』（河出書房新社）から。

徳島盃蘭盆組踊之図

19世紀初頭と考えられる「徳島盃蘭盆組踊之図」の一部では、例えば西新町二丁目や大工町西一丁目などの町組が100人以上の規模で、巨大な屋台や黒地円形の方位盤を中心に輪踊りを演じている。戦国時代末期の風流（ふりゅう）とのつながりが指摘される豪華で派手な「組踊り」は、今の「連」の原型と言えるものだが、藩の規制もあり次第に衰退していく。「風流踊りの再現」は、平成23年11月に藍住町で実施されたもので、派手な衣装や持ち物が目につく。

阿波盆踊図屏風

19世紀中頃の「阿波盆踊図屏風」では満月に照り映える新町橋で群衆がひしめき溢れ、一方向に進む行進型の踊りが見られ、現在の踊り歩く「ぞめき」のスタイルが出来上がっている。

幕末の文化・文政期（1804～1830年）になると、阿波の藍玉が全国市場に進出するなど活況を呈するとともに踊りに加わる町人も急増したため、辻や空き地では踊れなくなり、道に繰り出す行進型の踊りに変化していったものと考えられる。

《参考》 「よしこの」の歌詞にあるように，“阿波の殿様，蜂須賀さまが，今に残せし”とする説には，年表の「1656年 盆踊り許可の御触れが出る。」からも異論がある。また，「こうした起源説話は，民衆が自分たちの踊りの由緒を，お殿様に結び付けようとして生み出されたものであり，歴史的な事実とはいえません。」（『あわいろ』徳島市）という見方もある。

【現在】…現在，県内では10カ所程度で踊られているが，代表例として徳島市阿波おどりを示す。

連の数<2010年現在>：数百～1000組

（有名連40～50，企業連，学生連，気の合う仲間の連）

無料演舞場＝3カ所，

<2004年～>有料演舞場＝4カ所の改革…指定席制，全国のコンビニで入場券販売，2部入替制（18:00～20:00，20:00～22:00）最終連に一般観客が参加可能のため大人気。

踊り方：団扇踊り，提灯踊り，やっこ踊り，あばれ踊り→フォーメーションを組む

（例）凧踊り

演舞場以外の踊り：

→「輪踊り」踊り広場や踊りロードで自然発生的に踊りが練り広げられ，その周囲に見物の人垣ができるが，その客と踊り子たちの位置関係から呼ばれる。自由奔放，ダイナミックが特徴。

→「一丁回り」繁華街の路地裏で，簡素な衣装と鳴り物で踊りながら流す。大人たちが道端で三味線を弾くと，子供が寄ってきて踊り出し，「いっちょ，回らんで」と少人数で街を巡る。

→「三味線流し」風流に三味線を弾きながら練り歩く盆流し。徳島市や脇町うだつの町並みで。

日本3大阿波おどり：徳島の他として，

東京都高円寺（商店街の町おこし120万人），埼玉県南越谷（県出身企業60万人）

*参考：総合教育センターのeラーニングの動画の一部をプロジェクターで見せることも有効。

2 授業の目標

- （1）阿波おどりについて学び，理解と関心を深めるとともに，ふるさとへの愛着を高める。
- （2）話し合いを通して，阿波おどりの魅力に触れ，伝統芸能として大切にすることを養う。
- （3）阿波おどりについて自信と誇りを持って語り，積極的に関わるができるようにする。
- （4）阿波おどりについて学習することで，他のあわ文化の意欲的な学習にもつなげる。

3 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 2分	<ul style="list-style-type: none"> ・資料1を見て、本時のねらいの説明を聞く。 ・阿波おどりについて知っていることを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒それぞれが、阿波おどりと自分との関係について考えるよう留意する。
展開 20分	<p>① <u>阿波おどりの歴史について</u>，ワークシートに沿って学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料本文から、阿波おどりの変遷について知る。 ・阿波おどりの隆盛を支えた、徳島藩の特産物を考える。 ・「阿波の盆踊り」ではなく「阿波おどり」と呼ぶことで何が変わるか考え、発表する。 ・お鯉さんについて知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「組踊り」「ぞめき踊り」については、資料の解説を加え、余り深入りしないように理解させる。 ・踊りの明るい楽天的な調子が、藍商人の経済力を反映していることに気付かせる ・時期や地域を越えた存在として普及していったことに気付かせる。 ・よしこのやその他のかけ声の意味を理解させる。
15分	<p>② <u>阿波おどりの特徴と魅力について</u>，ワークシートに沿って考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・阿波おどりの特徴について、班で話し合い、発表する。 ・現在の連の構成や鳴り物の種類を確認する。 ・阿波おどりを取り上げた文学作品と新聞記事を読む。 ・全国に広がる阿波おどりの状況や集客数からその魅力と人気を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適切なヒントを出し、特徴について気付かせる。 ・文学作品に阿波おどりが登場することを知り、ふるさとの再発見につなげる。 ・踊りの特徴が魅力となって、全国や世界に広がり、多くの人に親しまれている現状を理解させる。
10分	<p>③ <u>阿波おどりのこれからについて</u>各自でまとめ、発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・現状に関する資料も提示した上で、自分との関わりを含めて考えさせる。
結論 3分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のまとめと次の文化に関する学習の予定を聞く。 ・各自で自己評価をし、ワークシートに○をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・阿波おどりに関する学習が他の文化学習への興味付けに繋がるように留意する。

【 8 】 阿波に根付いた人形浄瑠璃

1 人形浄瑠璃を知っていますか？

「浄瑠璃」とは

もともと仏教用語で美しい玉のこと。美しいお姫様（浄瑠璃姫）と奥州へ下る牛若丸（源義経）との恋物語が室町時代に流行し、語り物は「浄瑠璃姫物語」と呼ばれ、後に略して「浄瑠璃」と呼ばれるようになった。もともと浄瑠璃の伴奏には「琵琶」が使われていたが、16世紀に入ると琉球から渡来した楽器「三線」を改良した「三味線」が用いられるようになった。

『傾城阿波の鳴門』（順礼歌の段）

<あらすじ>阿波の主君の盗まれた名刀を探し出すよう家老に命じられた家臣の板東十郎兵衛は、妻のお弓と大坂で盗賊に身をやつして住んでいる。そこへ、父母恋しさに徳島から西国を巡礼していた娘お鶴が偶然立ち寄った。お弓は我が子と分かるが、そこで親子の名乗りをしたのでは我が子にどんな災いがふりかかるとも限らないと思い、お弓は涙を飲んで別れる。その後の「十郎兵衛住家の段」では、お鶴は十郎兵衛と出会う。我が娘とは知らない十郎兵衛はお鶴に金を借りようとし、騒がれたため誤って殺してしまう。お弓と十郎兵衛は事情を知り、悲嘆に暮れる。お鶴の懐から出てきた手紙から、名刀を奪ったのは小野田郡兵衛だと判明し、事件は解決に向かい、十郎兵衛も帰参がかなう。

<作品について>1768（明和5）年大坂竹本座で初演、近松半二らの5人の合作といわれる。

徳島藩のお家騒動と実際にあった板東十郎兵衛事件を題材に描かれた。それは、4代将軍徳川家綱の時代、当時の徳島は藍と製塩産業に力を入れており米不足であったため、幕府から禁止されていた米の密輸入を行っていた。その罪を十郎兵衛に押しつけて1698（元禄11）年に処刑してしまうという事件であった。板東十郎兵衛は実在の人物であるが、作品の内容はこの史実とは異なる。

太夫と三味線

・太夫：中国からきた称で五位以上の官位（貴族）を指したが、日本では、神職にたずさわる人や芸人の称号・敬称にも用いた。太夫は、「見台」の上に浄瑠璃の台本である「床本」を置いて語る。座った状態でも上半身を立った姿勢と同じにして下腹部に力を込めて腹式呼吸がしやすいように、「尻引」と呼ばれる椅子を尻の下に置き、両足の爪先を立てて座っているため、三味線奏者より一段背が高くなっている。

・三味線：細棹・中棹・太棹の種類の中で、太棹は糸が太く、撥も大きいため浄瑠璃に適している。弾き方によって表現が異なる。琉球では蛇皮（にしきへびの皮）を、日本

の内地では犬や猫の皮革を胴皮に使用している。

・外題：書物や浄瑠璃・歌舞伎の題を書物の表紙に記したものをいい、扉や本文の初めに書かれる「内題」に対する言葉である。内容としては、歴史上の事件を題材にした「時代物」、町人社会を題材にした「世話物」のジャンルがある。

人形遣い

18世紀初めまで、人形は一人遣いだった。1734（享保19）年に竹本座で行われた公演で三人遣いの人形が登場した。主遣いは、一段高くなるように12～30センチくらいの高さの舞台下駄を履き、自分の左手を人形の背中側の帯の下から差し込んで人形の頭（首）を操り、自分の右手で人形の右手を操る。左手遣いは、自分の右手で人形の左手から伸びている「差金」と呼ばれる長い棒を持つ。以前は、「足十年、左十年」と言われ、主遣いの役ができるようになるまでは20年以上の修行が必要だったと言われる。資料③の人形は、明智光秀をモデルに描かれた『絵本太功記』武智光秀の子、十次郎である。

2 人形浄瑠璃の歴史

人形浄瑠璃の広がり

西宮と淡路のつながり

西宮神社は、平安時代の末期、「海の神」「商業の神」として蛭児（蛭子・恵比須）神を祭り、海岸に近い場所に広田神社（兵庫県西宮市）によって建立された。広田神社は、淡路島の津名郡にあった荘園から農民を呼び寄せ、西宮神社の祭神の功德を分かりやすく庶民に知らせるため、タイを釣り上げる恵比須人形を操って神徳の宣伝をさせた。室町時代末期には、広田神社は淡路島の荘園を失ったので、西宮と淡路島のつながりは薄れ、ほとんどの農民は淡路に帰村した。そうした農民の子孫から江戸時代の初期に淡路の人形座が生まれ、一部は京都や大坂に出て専門の人形遣いになり、常設の小屋で人形浄瑠璃公演を行った。

徳島・蜂須賀家と淡路の人形座

初代徳島藩主蜂須賀至鎮は、1615（元和元）年大坂の夏の陣の功績により、領地に淡路島を加増された。蜂須賀氏は淡路を支配するにあたって「道薫坊廻百姓」という「人形廻しを生業とする農民」の身分を作った。道薫坊とは、淡路特有の言葉で、木彫りの人形を意味する木偶から生まれた。彼らの所有する農地は狭く、農業経営だけでは生活が成り立たないため、全国各地への人形芝居興行の道を選ばざるを得ない状況だった。当時、淡路には約40の人形座があり、一座の人数は30～50人で、農閑期に西日本を中心に全国各地で興行を行った。人形座の中でも最も伝統ある上村源之丞座は、蜂須賀歴代の藩主に許可を得て興行（有料公演）を行うなど保護を受けている。1693（元禄6）年徳島城下の「東富田操場所」（徳島市南昭和町あたりか？）における14日間の小屋掛け公演では、純益が銀十六貫（2670万円）で、別に祝儀を座や個人でもらっている。（大和武生

『阿波人形浄瑠璃物語』)

◎竹本義太夫 (1668～1714年)：摂津国天王寺村（現・大阪市天王寺区）の農家に生まれる。

古浄瑠璃諸派の優れた部分を取り入れて「義太夫節」を確立。1684（貞享元）年、大坂の道頓堀で近松門左衛門の作品『世継曾我』（曾我兄弟の仇討ちと兄弟の恋愛をからめた物語）を演じて大成功をおさめた。この作品を演じた芝居小屋の持ち主は、阿波国撫養（鳴門市）出身の竹田近江とその弟（一説には子）の竹田外記（初代竹田出雲）であったと言われている。

◎近松門左衛門 (1653～1724年)：福井に生まれる。武士出身。京都に出て公家などに仕えた後、人形浄瑠璃の台本を書くようになった。竹本義太夫に『出世景清』を書いた後は歌舞伎の台本を書いていたが、その後、義太夫が創設した竹本座の座付作家として『国性爺合戦』（時代物）、『曾根崎心中』『冥途の飛脚』（世話物）など人形浄瑠璃の作品を多く手がけた。

『曾根崎心中』（1703（元禄16）年5月初演）：初演の前月、実際に曾根崎で起こった徳兵衛とお初の心中事件を題材にして書かれた作品だったため、人々の共感を得て興行的にも大成功した。

<あらすじ>大坂の醤油商平野屋の使用人徳兵衛は、北の新地の遊女天満屋のお初と恋仲にあった。主人からすすめられていた縁談を断るため、縁談先の女性の家からすでに受け取っていた持参金を自分の継母から取り戻したが、親友に頼まれてその金を貸すことになった。

結局、親友に裏切られて金を返してもらえず、死を決意した徳兵衛はひそかにお初と店を逃れ、曾根崎の森で心中する。

◎植村文楽軒：人形浄瑠璃の文楽座座元。初代（1751～1810年）は通称「道具屋大蔵」といい、阿波の吉野川中流域出身の道具屋だった。結婚後淡路に住み、19世紀初頭に大坂の高津橋南詰（現在の国立文楽劇場付近）に浄瑠璃の稽古場を開き、これが常設の芝居小屋になり、人形浄瑠璃を行う「文楽軒の芝居」、その後「文楽座」と呼ばれるようになった。座の経営が植村家から松竹合名会社に移って以後も、「文楽座」の名称は残り、大正・昭和のころから文楽は人形浄瑠璃の代名詞となった。文楽は2003年にユネスコの世界無形文化遺産に登録された。

淡路人形浄瑠璃

江戸時代には40以上の人形座が全国を巡業した。明治以降、最も伝統のある上村源之丞座をはじめ多くの座が消えたが、郷土芸能を守るため1964（昭和39）年に「淡路人形座」が発足、1969（昭和44）年に「財団法人淡路人形協会」が設立され、後継者育成と人形座の存続管理が図られた。1976（昭和51）年には国の重要無形民俗文化財に指定され、南あわじ市の大鳴門橋記念館（2012年8月に、同市福良港に移転し、「うずの丘 大鳴門橋記念館」としてグランドオープン）で上演を続けるとともに全国各地で公演

を行っている。文楽と異なり野外の舞台上演していたため、人形も、動作も大きい。

阿波の人形師・四代目大江巳之助（1907～1997年）

本名大江武雄。鳴門市大津町出身。初代天狗久に教えを請い、人形作りを始め、その後文楽座の座付きの人形師となった。太平洋戦争による空襲で焼失した文楽座の人形頭を、数年間で約300個作るという超人的な仕事ぶりを発揮し、文楽の復興に大きく貢献した。生涯の製作数は1000体に及び、1976（昭和51）年には国選定保存技術保持者に認定された。なお、人形を作る人を「人形師」といい、人形を操る人を「人形遣い」という。

3 阿波人形浄瑠璃の特徴

天狗屋久吉（初代）（1858～1943年）

本名吉岡久吉，徳島市国府町生まれ。16歳の時，川島富五郎に弟子入りして人形作りを始め，26歳の時「天狗屋」を名乗って独立したことから「天狗久」と呼ばれるようになった。86歳で死ぬまでの間，徳島市国府町に構えた工房で人形を彫り続けた。目立たせるために人形の頭を少しずつ大きくし，もともとは約12センチだった頭の大きさが，最終的には約18センチくらいまでになった。宇野千代の小説『天狗屋久吉』で取り上げられたり，映画にも2度出演するなど，最も有名な阿波の人形師である。2001年には天狗久旧工房と製品などの資料が県指定となり，2002年には「阿波人形師（天狗屋）の製作用具及び製品 附（つきたり）販売関係資料」が国の重要有形民俗文化財に指定されている。

阿波木偶人形の頭

木偶とは，木彫りの人形の意。阿波木偶とは，徳島の民俗芸能で使われる木製の人形を指す。

写真左：阿波人形浄瑠璃人形頭 角目頭（熊谷）作…初代天狗久（大正4年） 県指定

写真右：阿波人形浄瑠璃人形頭 娘頭（お染）作…初代天狗久（明治33年） 県指定

文楽人形は照明の乱反射を避けるため，つやを消すのに対して，阿波木偶は30回ほど塗り直して光沢を付ける。塗りには貝殻から作られる胡粉とよばれる白い顔料を水に溶いて，にかわという接着剤を混ぜたものを使用する。文楽では「文七」など役名ごとの人形があるが，阿波木偶は文楽人形に比べて種類が少なく，「角目」「丸目」など主に形状を基本にした名称で呼ばれる。1つの頭を，かつらや飾り物，衣類を変えることで幾通りもの役柄に変化させる。「角目」は主役の善人で，目尻が角張っており，顔を白く塗る。一方，「丸目」は敵役の悪人で，目尻が丸くなっており，時に顔を赤く塗る。写真右の「娘」は未婚の女性（18歳まで）の役の頭である。天狗久をはじめ，人形忠（1840～1912年）の作品など，全部で47個の人形頭が県指定の有形文化財になっている。

地域別農村舞台の分布

江戸時代から庶民の娯楽の花形だった歌舞伎や人形芝居は，戦前まで全国至るところ

で盛んに行われ、それを演じるために建てたものは「農村舞台」である。1967（昭和42）年から行われた調査によると、全国で1338棟の農村舞台が発掘された（うち徳島県は209棟、全国の15.6%）。そのうち1122棟が歌舞伎、216棟が人形芝居のために建てられた舞台である。徳島県には人形芝居用の農村舞台が208棟あり、これは全国の96%を占めている。人形芝居系の舞台は、舞台に向かって右側（上手）に太夫と三味線が座る太夫座が設けられているのが特徴である。農村舞台は、非藍作地帯である山間部のB勝浦川流域、C桑野川流域、D那賀川流域に多く見られる。一方、藍作地帯のA吉野川流域には農村舞台が少ない。これは、藍作地主や藍商人など当時の有力者が仮設の舞台小屋（＝小屋掛け）を建て、人形座による興行を行っていたためである。2013年現在、徳島県内の農村舞台の数は88棟である。（NPO法人「阿波農村舞台の会」による調査）

小屋掛け

興行のために建てられた仮設の舞台小屋を小屋掛けという。通常は16日間、長い場合は25日間の公演が行われた。現在は毎年10月に徳島中央公園内（徳島城跡）で小屋掛けの公演が行われている。

農村舞台

徳島では、江戸時代より神社の境内に建てた舞台で人形浄瑠璃の公演が行われてきた。村の鎮守の神社では、春秋の祭りが行われる際に、村人の間で人形浄瑠璃を楽しむようになった。常に専門の人形座を呼ぶ経済的余裕がなかったため、村人は自分たちで人形操りを稽古するようになり、その練習や発表の場として農村舞台を造った。舞台は村人の集会場や祭りの酒盛りの場、だんじりの保管倉庫など地域により様々な用途に使われていた。犬飼の舞台（徳島市）、坂州の舞台（那賀町）は国の重要有形民俗文化財に指定されている。

ふすまからくり

農村舞台、小屋掛けとも阿波人形浄瑠璃の舞台の背景には「ふすま絵」が使用されることがあり、その「ふすま絵」を場面に応じてからくり仕掛けで転換させていくのが「ふすまからくり」である。最も多い「引き分け」という手法の場合、6～8枚のふすま絵を左右に動かして、後ろにセットされた別の絵を次々に見せていく。犬飼（徳島市）、坂州・川俣・拝宮（いずれも那賀町）、小野（神山町）などの農村舞台には「ふすまからくり」が残っており、特に犬飼では、132枚のふすまを操り出して、42景の背景を展開することができる。毎年文化の日に公演を行っている。また、吉野川流域など小屋掛け公演で用いられるふすまは、地域の神社に保管されていた。

4 阿波人形浄瑠璃の現在

阿波人形浄瑠璃の展開

「阿波人形浄瑠璃の最盛期は明治10（1877）年から明治20年ごろであったと、阿波の人形師・初代天狗久が語っている。」（大和武生『阿波人形浄瑠璃物語』より）また、天狗久の注文帳には、徳島県内の人形座として72の座名が記録されている。

明治～昭和の人形芝居の興行数

	明治42年	大正6年	昭和13年
人形芝居（営業）	105	32	43
人形芝居（非営業）	272	228	4

『徳島県統計書』（M41～S13年）

営業は主に淡路島人形座の興行、非営業は主に徳島県内の農村部に存在する人形座の農村舞台での公演と考えられる。

阿波人形浄瑠璃の文化財指定

1999（平成11）年、阿波人形浄瑠璃振興会を保持団体として、国の重要無形民俗文化財に指定された。

国民文化祭

徳島では2007（平成19）年と2012（平成24）年に開催された。阿波人形浄瑠璃は、阿波藍、第九、阿波おどりとともに四大モチーフとして重要なテーマとなった。国民文化祭の開催を機に復活した農村舞台もある。2009年には「ジョールリ100公演」が行われ、8カ所の農村舞台でも10公演が開催された。

ふすまからくり復元の動き（三好市西祖谷山村^{うしろやま}後山）

三好市西祖谷山村では昭和30年頃まで上演されていたふすまからくりの舞台を再現した。平成17年には後山地区の阿弥陀堂前で50年ぶりの復活公演を行い、平成19年6月からは三好市有形民俗文化財であるからくり襖絵の操作技術を後世に残そうと保存会が後継者育成の講習会を開催している。同市徳善地区でも復活し、市指定文化財となっている。

人形座・太夫部屋

人形座14座189名、太夫部屋5部屋69名（2013年公益財団法人阿波人形浄瑠璃振興会所属）。

阿波十郎兵衛屋敷

『傾城阿波の鳴門』に登場する架空の人物「阿波の十郎兵衛」にちなんで名付けられた、阿波人形浄瑠璃の魅力を伝える施設。館内には神社の境内によく見られた農村舞台

を模した舞台と観客席があり、阿波人形浄瑠璃を毎日上演している。江戸時代、事件に巻き込まれて処刑された実在の人物、庄屋・板東十郎兵衛の屋敷跡である。

伝承教室

徳島県では昭和56年から約30年間にわたって伝承教室を開催しており、受講生数はのべ1400名を超える。部活動で人形浄瑠璃をしている中学生・高校生や社会人等が広く受講している。

平成25年度は14日間開催し、48名が受講（うち中高生が24名）。太夫・三味線・人形遣いに分かれて稽古を行った。教室への参加を機に人形座に加わる人もいる。また、勝浦町や神山町などでも、地域の人形座が子どもを対象に伝承教室を実施し、後継者育成に努めている。

部活動

徳島市川内中学校、城北高校、小松島西高校勝浦校では人形浄瑠璃を行う民芸部が活動しており、徳島市川内北小学校や阿南市立新野中学校にも活動歴がある。県内の人形座の中には部活動をきっかけに座を結成したり、座員となった人も多い。

《参考文献》

- 『阿波人形浄瑠璃物語』（大和武生 徳島新聞社） 2012年
- 『阿波の農村舞台』（阿波のまちなみ研究会） 1992年
- 『国指定重要無形民俗文化財 阿波人形浄瑠璃財団法人阿波人形浄瑠璃振興会設立 50周年記念誌』（財団法人阿波人形浄瑠璃振興会） 2005年
- 『民俗文化財集 阿波の人形芝居』（徳島県郷土文化会館）1982年
- 『阿波の人形浄瑠璃』（四国大学・阿波の文化研究会） 1995年
- 『徳島地域文化研究第8号』（徳島地域文化研究会）2010年

《関連サイト》

- 徳島県立阿波十郎兵衛屋敷 「阿波人形浄瑠璃の世界」
※「あらすじ&ムービーの段」に「傾城阿波の鳴門」の動画が掲載
<http://www.joruri.info/movie/01.html>
- 独立行政法人日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」
「舞台芸術教材で学ぶ」→「文楽」→「歴史と義太夫節」※人形浄瑠璃についての動画が掲載
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc4/index.html>
- 徳島県県民環境部とくしま文化振興課「人形浄瑠璃芝居の振興にあたって」
<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2005032800084/>
- 阿波農村舞台・阿波人形浄瑠璃ボランティアガイド
<http://www.joruri.info/butai/butai.html>

5 ねらい

◎阿波人形浄瑠璃について学び，理解と関心を深めるとともに，ふるさとへの愛着を高める。

◎話し合いを通して，阿波人形浄瑠璃の魅力にふれ，伝統芸能として大切にすることを養う。

6 教材について

〔教材選定の理由〕

日本の人形浄瑠璃の中心は大阪の文楽であるが，人形浄瑠璃の成立や発展において，徳島の人々が大きく関わってきていること，また，文楽とは違う特徴を持った，徳島の人々の娯楽の中で生まれ，受け継がれてきた伝統芸能として阿波人形浄瑠璃があるということを知っている人は多くない。人形浄瑠璃の特徴・歴史を概観した上で，屋外で演じられることが多かったことに起因する阿波人形浄瑠璃の特徴を知ることによって，阿波人形浄瑠璃への興味・関心を高め，徳島の誇る伝統芸能として関わり，大切にしていこうとする態度を養うことを目的に，本教材を選定した。

7 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	・本時のねらいの説明を聞き，資料①『傾城阿波の鳴門』順礼歌の段の映像を視聴する（3分半）。	徳島の人形座で演じられる定番の外題の場面であることを紹介し，興味を持たせる。
展開 5分	1. <u>人形浄瑠璃</u> について知る。 ・太夫，三味線，人形遣いの3つが一体となって演じられる芸能であることを知る。 ・資料③の中で主遣い，左手遣い，足遣いの立ち位置を確認する。	・資料①～③を活用する。 ・三人で一体の人形を操ることの難しさと芸の奥深さを感じさせる。
10分	2. <u>人形浄瑠璃の歴史</u> について知る。 ・人形浄瑠璃の成立（京都の浄瑠璃語りと西宮神社の人形遣いが出会う），発展から現在（竹本義太夫・近松門左衛門の登場，植村文楽軒から文楽へ）の流れをつかむ。 ・人形浄瑠璃の成立，発展の過程において阿波・淡路の人々が大きく関わっていることを	・資料④を参照し，成立～発展～現在の流れを概観させ，深入りしないようにする。 ・人形浄瑠璃の歴史において，阿波・淡路の人々が大きく関わっていることに気づかせることによって，人形浄瑠璃に対する

	理解する。	興味・関心を高める。
15分	<p>3. <u>阿波人形浄瑠璃の特徴</u>について知り、その特徴を生み出した背景について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人形の頭や演じ方の特徴が人形浄瑠璃を屋外で演じていたことから生まれていることを理解する。 ・資料⑦から、地域別の人形浄瑠璃の楽しみ方の違いとその理由を考える。 <p>・徳島で人形浄瑠璃が人々の生活の中にある娯楽として大切に育てられてきたことを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・資料⑤～⑩を活用する。 ・資料⑧小屋掛け，資料⑨農村舞台で演じるのに使われていた資料⑥人形頭の特徴に注目させる。 ・藍作で繁栄していたA吉野川流域では，小屋掛けで淡路の人形座による有料公演で，それ以外の地域では，農村舞台で地元の人々が結成した人形座による公演で，人形浄瑠璃を楽しんでいたことを理解させる。
10分	<p>4. <u>阿波人形浄瑠璃の現在</u>について知り，これからどのように関わられるかを話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人形芝居系の農村舞台の数が全国一であること，資料⑩ふすまからくりがあることにもふれる。
結論 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のまとめと次の文化に関する学習の予定を聞く。 ・各自で自己評価をし，ワークシートに○をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習で初めて知ったことを挙げさせ，今後，阿波人形浄瑠璃と関わろうとする態度をもたせる。 ・阿波人形浄瑠璃に関する学習が他の文化学習への興味付けに繋がるように留意する。

【9】 「板東俘虜収容所」で結ばれた、日本とドイツとの交流

1 生徒用資料解説

「板東俘虜収容所 要図」(「ドイツ日本研究所」所蔵)

この図は 1919 (大正 8) 年当時の板東俘虜収容所の地図である。この図からは、「将校棟、病院、図書館、印刷所、炊事場、製パン所、酒保、兵舎、タバトー、製菓所、営倉、管理棟、倉庫、洗面所、便所」があったことがわかる。酒保 (しゅほ) は、軍事施設内に設けられた売店に類するもの。「タバトー」とは、「およそ 40 軒の小屋からなる営業区域のことで、青島 (チンタオ・中国) の商店街、大鮑島 (タバトー) にちなんだもの」である。

《引用・参考文献等：③》

「板東俘虜収容所 全景」(鳴門市ドイツ館所蔵)

「板東」は、収容所開設当時の板野郡板東町、現在の鳴門市大麻町板東のこと。

「俘虜」とは、「戦争で敵軍にいけどりにされた者」をさし、捕虜と同義語。第二次世界大戦以前の 1899 年に制定された「ハーグ陸戦条約」では、「俘虜」と記されている。

「板東俘虜収容所」は、第一次世界大戦下、中国山東半島におけるドイツの租借地をめぐる戦闘で、敗れて俘虜となったドイツ兵を収容するために設けられた施設である。中国から移送されてきた 4,700 名の俘虜は、当初、全国 12 カ所に設けられた仮設の施設に収容された。その後、収容環境の改善を図るため、大規模な兵舎 (バラック) 式の収容所が、「板東」を含めた全国に 6 カ所 (久留米 [福岡県]、名古屋 [愛知県]、習志野 [千葉県]、青野ヶ原 [兵庫県]、似島 [広島県]) に建設された。板東俘虜収容所には、四国の徳島、松山、丸亀の各収容所から約 1,000 名が移送された。

《参考文献等：①》

「^{まつえとよひさ}松江豊寿所長」(鳴門市ドイツ館所蔵)

松江 豊寿 (1872 ~ 1956) は元会津藩 (現在の福島県) 出身の軍人。1914 (大正 3) 年、徳島俘虜収容所長に就任。その後、各地の収容所の統合に伴い、1917 (大正 6) 年、板東俘虜収容所の所長となった。同年、陸軍大佐となる。その後、1922 (大正 11) 年、福島県会津若松市長となる。映画「バルトの楽園」の主人公のモデルとなった人物。

《参考文献等：②》

板東俘虜収容所新聞「デイ・バラック」第一巻の表紙 (「鳴門市ドイツ館」所蔵)

板東俘虜収容所新聞「デイ・バラック」最終版表紙 (「鳴門市ドイツ館」所蔵)

「デイ・バラック」は、戦争の状況や収容所内の生活に関わることを記事にした収容所内で発行された新聞である。編集や印刷は俘虜によって行われた。「毎週日曜に発行され、月五十銭の購読料で予約」を取り、「どの号も二四ページ前後」あった。1919 (大正 8) 年 1 月から「ドイツ人俘虜の送還の現実化」によって、「刊行が停止」された 9 月の間は、「新聞は週刊から月刊」に変更された。

《引用・参考文献等：②》

「バラック内部の様子」（「鳴門市ドイツ館」所蔵）

板東俘虜収容所のバラックは東西に4棟ずつ並んで建てられた。建設当時の1棟の規模は全長72.90m、幅7.50mであった。写真は西側の最も北側に位置した第4棟の内部を写したもので、内部の様子に加えて、バラック独特の梁組みが良く分かる貴重な写真である。

「鳴門市ドイツ館全景」

ドイツ館は、板東俘虜収容所のドイツ兵俘虜と地域の人々との交流を記念し、1972（昭和47）年に建設された。開館当初は、「元俘虜たちから寄贈された資料を中心に」展示されていた。開館20年後の1993（平成5）年には、「施設の老朽化や収集資料の増加により手狭になって」きたことから、現在の地に移転、新築された。ドイツ館には、「ドイツ兵俘虜達が作成した図書や写真、日用品等を初めとした当時の貴重な資料が数多く保存・展示」されている。鳴門市大麻町桧にある。

《参考文献等：⑤》

2 参考文献等

《主なもの》

- ①：「第九」と日本出会いの歴史（ニコレ・ケンプケン著 2011年 彩流社）
- ②：「第九」の里 ドイツ村（林 啓介著 1993年 井上書房）
- ③：板東ドイツ人俘虜物語（林 啓介他著 1982年 海鳴社）
- ④：NPO法人鳴門「第九」を歌う会HP（<http://www.naruto-9.com/>）
- ⑤：鳴門市ドイツ館HP
（<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/germanhouse/index.html>）

《その他》

- ：鉄条網の中の四年半-板東俘虜収容所詩集-（ヴィリームツテルゼー 1979年 井上書房）
- ：鳴門市史 中巻（鳴門市編 1982年）
- ：板東俘虜収容所物語（棟田 博 2006年 光人社）
- ：徳島の文化財（徳島県教育委員会/徳島新聞社 2008年 徳島新聞社）
- ：板東俘虜収容所の全貌-所長松江豊寿のめざしたもの-（田村一郎 2010年 朔北社）
- ：板東俘虜収容所跡調査報告書-鳴門市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-（鳴門市教育委員会 2012年）
- ：鳴門市公式サイト 「第九のふるさと」
（<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/index.html>）

3 ねらい

現在の鳴門市大麻町板東にドイツ兵俘虜を収容した「板東俘虜収容所」が設置された歴史的背景を知るとともに、その収容所での俘虜の生活の様子を通して、この収容所が、なぜ、後に日本とドイツとの友好的な交流の架け橋となったのかについて考えさせる。

4 教材選定の理由

鳴門市大麻町板東にある「鳴門市ドイツ館」は、鳴門市とドイツとの交流の象徴といえる施設である。このドイツ館が板東の地に建設された理由は、第一次世界大戦時に中国山東半島におけるドイツ租借地（青島）を守備したドイツ兵を収容した「板東俘虜収容所」が当地に設けられたことと深く関わる。

板東俘虜収容所が設置されていた期間は1917(大正6)年から1920(同9)年までの約3年間。この間、約1,000人のドイツ兵が収容所で過ごした。第一次世界大戦下の俘虜収容所という厳しい制限が課せられるべき場所ではあったが、板東俘虜収容所の松江豊寿所長は人道的で寛容な収容所の運営を行い、俘虜たちの自主的な活動を認めた。

また、俘虜の帰国後、草に埋もれた状態で忘れられようとしていたドイツ兵の慰霊碑を地域の人たちが清掃活動が続けていたことがドイツに伝えられたことがきっかけとなって、昭和40年代に日本とドイツとの交流が次第に活発となった。そして、鳴門市は元俘虜から寄贈された多くの資料を展示するとともに、ドイツ兵俘虜と地域の人々との交流を顕彰するために、昭和47年にドイツ館を建設した。

この教材は、こうした板東俘虜収容所の歴史的経緯や収容所内の俘虜たちの生活に焦点を当てたものであり、この教材をとおして、当時のドイツ兵俘虜の人たちと、地域の人々との交流が現在のドイツと日本との友好的な交流に繋がっていることに気づかせたい。そして、こうした学習活動によって、郷土の歴史への理解やふるさと徳島に対する誇りと愛着を深めることに資すると考え、本教材を選定した。

5 学習の流れ（例）

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 鳴門とドイツとの交流について、知っていることを発表する。	○「ドイツ館」・「第九」などの発言を引き出すことにより、「板東俘虜収容所」についての学習意欲を喚起する。
展開	2 本文の「板東俘虜収容所とは」を読み、「板東俘虜収容所」が設置された時代背景を理解する。	○第一次世界大戦と日本との関わりについて学び、ドイツ兵の俘虜が日本に送られた経緯を理解させる。 ○収容所全景写真などに見える「バラック」の一部が現存し、「道の駅」などで身近に見学できることなども説明する。
	3 「板東俘虜収容所」の松江所長の人道的な運営方針の下で、俘虜たちが所内で自主的な生活を送っただけでなく、地元の人たちとも活発な交流を行ったことに気付く。	○所内での自主的な活動、特に文化・スポーツ面の活動を図版資料等を用いて詳しく理解させる。
	4 当時の地元の人々と俘虜との交流に加えて、その後の長年のドイツ兵慰霊碑の清掃活動が日独交流のきっかけとなったことを理解する。	○日独交流がどのようにして始まり、現在のように活発になったかについて正しく理解させる。
結論	5 本時のまとめをする。	○ワークシートを活用し、自己評価を行わせるとともに、授業後の感想を発表させる。

1 生徒用資料解説

ベートーヴェン「第九」交響曲演奏会（NPO法人鳴門「第九」を歌う会）

この演奏会は、1982（昭和57）年に鳴門市制施行35周年、鳴門市文化会館落成記念として開催された第1回の演奏会から始まっている。第1回の演奏会での合唱団は、377名で構成されていたが、平成25年度に開催された第32回の演奏会では、県内外から参加した合唱団は、600名を超えた。この中には、地元の鳴門市の中高生も含まれている。また、演奏会の来場者数は、毎年1,300名を超え、立ち見の観客が出るほど盛況となっている。《参考文献等：③》

ベートーヴェン「第九」交響曲演奏会全曲コンサートプログラム表紙（鳴門市ドイツ館所蔵）

このプログラムが、板東俘虜収容所において、「第九」が日本・アジアで初めて全曲演奏されたことを示す資料である。

このプログラムから、1918（大正7）年6月1日、徳島オーケストラの第2回の演奏会において、ハンゼンの指揮により「第九」が演奏されたこと、独唱と合唱を伴って演奏される第4楽章を含めた4つの楽章全てが演奏されたこと、独唱者と80名の合唱団は、全て男性によって構成されていたことがわかる。また、前日には、総練習を公開して行ったことも記されている。

なお、プログラムの表紙の挿絵には、「マックス・クリンガー作のベートーヴェンを古代神に様式化した像」が描かれている。

《引用・参考文献等：①》

※ 「第九」の「日本人による初演は、東京上野の音楽学校生による1924（大正13）年11月29日、30日」の演奏となる。

《引用・参考文献等：②》

「徳島オーケストラと合唱団」（鳴門市ドイツ館所蔵）

板東俘虜収容所には、オーケストラ、吹奏楽団、合唱団などが複数組織されていた。

「第九」を初演したのは、写真の「徳島オーケストラ（後に、『MAKオーケストラ』に名称を変更）」であった。45名で編成され、指揮は、ヘルマン・ハンゼン軍楽隊長が行った。

他にもエンゲル・オーケストラがあり、指揮者のパウル・エンゲルは、「『エンゲル音楽教室』を通じ地元青年を指導」し、エンゲルの「帰国後も徳島エンゲル楽団を組織して徳島における洋楽の草分けとなった人たち」を育成した。

なお、オーケストラで使用された楽器は、俘虜たち自身が購入したものが多いが、その他、青島（チンタオ）から携えてきたもの、救援団体の援助品、俘虜手作りのものがあった。

※ オーケストラは、板東だけでなく、久留米、名古屋にも組織されていた。

《参考文献等：①》

ベートーヴェン「第九」演奏会「世界に広がれ！とくしま歓喜の歌」プロジェクト

演奏会の主催は、徳島県である。平成27年度の第1回演奏会は、1月30日の日曜日に開催され、県立中学校の生徒をはじめ、徳島県内外から2000名近く合唱団が参加した。

2 参考文献等

《主なもの》

- ①：「第九」と日本出合いの歴史（ニコレ・ケンプケン著 2011年 彩流社）
- ②：「第九」の里 ドイツ村（林 啓介著 1993年 井上書房）
- ③：NPO法人鳴門「第九」を歌う会HP（<http://www.naruto-9.com/>）

《その他》

- ：鉄条網の中の四年半-板東俘虜収容所詩画集-（ヴィリームツェルゼー 1979年 井上書房）
- ：鳴門市史 中巻（鳴門市編 1982年）
- ：板東ドイツ人俘虜物語（林 啓介他著 1982年 海鳴社）
- ：板東俘虜収容所物語（棟田 博 2006年 光人社）
- ：徳島の文化財（徳島県教育委員会/徳島新聞社 2008年 徳島新聞社）
- ：板東俘虜収容所の全貌-所長松江豊寿のめざしたもの-（田村一郎 2010年 朔北社）
- ：「第九」と日本 出合いの歴史（ニコレ・ケンプケン、大沼幸雄ほか、2011年彩流社）
- ：板東俘虜収容所跡調査報告書-鳴門市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告書-（鳴門市教育委員会 2012年）
- ：鳴門市公式サイト 「なると第九」
（<http://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/index.html>）
- ：鳴門市ドイツ館HP
（<http://doitsukan.com>）

3 ねらい

徳島県鳴門市が、ベートーヴェン「第九」の「アジア・日本初演の地」となったことに関心をもち、その背景や経緯などについて理解を深める。

4 教材選定の理由

「楽聖」とも呼ばれるベートーヴェンは、楽曲が音楽科の授業で教材として扱われるだけでなく、聴力を失った後もその困難を乗り越え、数々の傑作を生み出した生涯を描いた伝記をとおして、多くの人に知られているドイツの偉大な作曲家である。「交響曲第九番（以下、「第九」）」は、ベートーヴェンが作曲した最後の交響曲で、現在、日本各地で、毎年200回を超える演奏会が開かれているなど、有名な楽曲の1つと言えるだろう。

しかし、この「第九」の「日本初演の地」が徳島県の鳴門市であることは、あまり知られていない。

この教材では、「第九」が鳴門市で演奏された歴史的な経緯や背景に焦点を当てている。第一次世界大戦下の俘虜収容所という厳しい制限が課せられるべき場所で、人道的で寛容な収容所の運営がなされ、俘虜たちの自主的な活動が認められていたこと、その中で「第九」の演奏が日本で初めて演奏されたことについて理解していくことをねらいとした。また、鳴門に「『第九』初演の地」という「宝物」を残してくれた、ドイツ兵俘虜の人たちと、地域の人々との交流のシンボルとして、現在の「第九」演奏会が受け継がれていることに気づかせたい。そして、こうした学習活動を行うことは、郷土の歴史への理解やふるさと徳島に対する誇りと愛着を深めることに資すると考え、本教材を選定した。

5 学習の流れ（例）

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	1 本文の「鳴門市の『第九』は6月開催」を読み、ベートーヴェン「第九」について知っていることや、演奏会の印象について発表する。	○教材の資料の他、「第九」の合唱部分について、訳詞の資料を配ったり、演奏をCDなどで聞かせて、学習意欲を喚起する。
展開	2 本文の「徳島オーケストラ」をもとに、「徳島俘虜収容所」及び「板東俘虜収容所」内での音楽活動を通して、鳴門で「第九」が演奏される背景を理解する。	○「板東俘虜収容所」について知っていることを発表させ、松江所長による人道的な運営が行われたことに気づかせる。 ○収容所内での俘虜の兵士たちの生活の様子や思いについても想像させる。
	3 本文「『第九』アジア初演」から、本公演を開催した収容所の人々の心情について話し合う。	○俘虜収容所という閉鎖的な場での本格的なオーケストラの演奏が如何に困難であったか、にもかかわらずその実現に全力で取り組んだことを理解させる。
	4 「第九」を通じた鳴門市とドイツとの交流の発展について理解する。	○鳴門市で「第九」演奏会が開催された目的や、その後の市民の取り組みなどを様々な資料を通して理解させる。
結論	5 本時のまとめとをする。	○ワークシートを活用し、自己評価を行わせるとともに、授業後の感想を発表させる。

【11】 人々の衣服を染めた阿波の藍

1 生徒用資料解説

(1) 「四国三郎」吉野川と藍づくり

江戸時代に吉野川水系に堤防はなく、徳島藩は藍作を保護するために、本格的な河川改修工事を控えてきたのではとの説もある。しかし、当時の最も有利な作物は米であり、藩も農民も米作によって安定した収入や生活を夢に描いていたが、改修には莫大な資金と人手が必要で一大名の力で成し遂げられるものではなかった。そのため吉野川流域では「藍しかない」という土俵際での選択であった。



吉野川流域では、毎年のように台風後に洪水が発生し、洪水により地力の衰えた表土が藍畑から流失し、入れ替わりに上流から肥沃な客土が流入する。さらに大量の魚肥を投入することで、流域は強大な藍葉産地を形成していった。

また藍は、連作を嫌い、隔年でしか収穫できないが、吉野川流域では上述のような洪水の肥沃な客土により、毎年収穫が可能であったことも藍作が盛んになった理由の一つである。

(2) 藍屋敷「田中家住宅」

田中家は、寛永年間(1624～44)、徳島藩の招きによって播磨から藍作の指導者としてこの地に移り住み、開発と藍作を家業としてきたが、毎年のように吉野川の氾濫で被害を受けるため、1854(安政元)年ごろからこの敷地の造成をはじめ、1887(明治20)年ごろまでにすべての建物を完成させた。敷地は川の氾濫に備えて石垣を高く積んで造られている。敷地の中央やや後ろよりに寄棟入母屋造の主屋[1865(元治2)年]が建つ。表門[1870(明治3)年]との間に広場(作業場)をとり、この広場を中心に石垣に沿って藍納屋[1887(明治20)年]、南藍寝床[1860(万延元)年]、北藍寝床[1873(明治6)年]、土蔵[1870(明治3)年]など、藍の製造に使用される建物が建てられている。主屋の東側には表庭があり、これに面して座敷[1885(明治18)年]、その裏に宝庫[1859(安政6)年]があり、建物で敷地を取り囲む城郭のような景観を造っている。このような屋敷構えは大規模な藍商農家の特徴であり、当家は、江戸時代末から明治にかけての「藍屋敷」の姿をそのままに残す貴重な民家である。

□主な建物の役割

主屋、座敷：藍商農家の住まい。 表門：藍屋敷の入り口。 藍納屋：できあがった阿波藍を一時保管しておく納屋。 藍寝床：藍を発酵させる作業を行う建物。 土蔵：財産を保管するための建物。

(3) 新町川沿いの藍倉

徳島藩では藍の需要が急増したことを背景に生産地と徳島城下の水上輸送の向上を図るため、5代藩主綱矩の下、吉野川本流(現旧吉野川)を分水して、別宮川(現本流)に流す計画をした。当時の別宮川や城下の支流は、^{べっく}濁水期になると船の通行もままならなかったが、1672(寛文12)年に本



明治期の徳島市の様子

流からの通水路が完成し別宮川が本流となっている。

水量が豊かになった徳島城下の河川には、大型の船も通行できるようになり、とくに新町川の西船場町と対岸の新町船場町には、江戸と大坂をはじめ諸国の藍市場に藍玉を販売する藍商たちが郷村部から進出し、店舗や出荷前の藍を保管する倉庫が建ち並んだ。こうして吉野川流域で産出された藍玉を集積し、藩外の市場からの注文に応じて出荷できる体制を備えていった。また藍の栽培には大量の金肥(魚肥)を必要としたためその集積にも倉庫が必要であった。

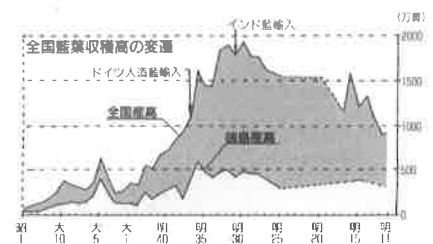


藍場浜親水公園の藍倉群のオブジェ

このように新町川沿いには藍倉が立ち並び、徳島城下に景観上・経済上大きな変化をもたらした。

(4) 藍作の衰退のあともなお

藍産業の衰退は、大量生産に伴う品質低下が直接的な原因ではあったが、ドイツから的人造藍(化学染料)の輸入が、決定的な打撃となった。明治30年代の人造藍の輸入拡大は、徳島をはじめ国内各地の藍作・藍業を急速に衰退させていった。このことによって、藍は商品作物としての歴史的役割を終えていった。



藍の衰退のなかで、吉野川中下流域の藍作地帯では、稲作への転換をめざし、麻名用水や板名用水、北麓用水、柿島用水、阿波用水などの大規模な用水工事が開始された。また、藍作の後作としてダイコンやニンジン、ゴボウ、カボチャ、スイカなどの栽培が始まり、とくに板野郡の畑地ではダイコンが大量に栽培された。これは「阿波たくあん」として加工された。また、藍の間作として栽培された大豆を利用した味噌造りも盛んになった。その後大正から昭和期にかけて、養蚕業の発展に牽引されて桑作が拡大し、この地域の農業構造は大きく転換した。戦後も吉野川中下流域では園芸作物の栽培が盛んで、京阪神への農産物の供給地として重要な役割を果たしている。

徳島県指定有形文化財『奥村家住宅』

吉野川下流域は阿波藍の生産で栄えた地域で、今も諸処に「藍屋敷」と呼ばれる豪壮な民家が残る。奥村家もその代表的な例である。主屋は、広い敷地北寄り中央に南面して建ち、これを囲むように県下でも遺構の少ない奉公人部屋、南と東西に三棟の寝床、贅を尽くした西座敷、北・中・南の各土蔵、大門、東門、湯殿、便所など13棟がたつ。建物は文化年間(1804~18)から明治20(1887)年ごろにかけて建てられた。

国選定重要伝統的建造物群保存地区『美馬市脇町南町』

脇町は吉野川北岸沿いに鳴門に至る撫養街道と、高松へ通じる街道が交叉する交通の要衝であり、江戸時代に阿波特産の藍の吉野川中流域での集散地として、早くから舟運を利用できる南町に富商が軒を並べた。保存地区の範囲は、東西約400mの南町の両側、戸数88の町並みである。地区には18世紀はじめから大正・昭和ごろのものまで、それぞれの時代の特徴を示す民家が揃っており、主屋の7割が伝統的建造物として保存され、現在は「うだつの町並み」として知られている。

選定保存技術『阿波藍製造』

阿波藍の品種は蓼藍たてと呼ばれるタデ科植物で、葉の中に青色の染料となる色素を含む。近年の藍栽培農家は70余軒、栽培面積は約23町歩である。春まだ浅いころ種を蒔き、間引き、定植、防虫、除草、施肥、灌水と7月の炎天下の刈り取りまで続く。梅雨が明け晴天の日に刈り取って乾燥させ細かく刻み葉と茎を分ける。蓼藍の製造法は「発酵法」である。細かく刻み乾燥させた葉藍を「寝床」という特殊な土間に堆積し、水を与えて藍こなしを繰り返し発酵させる。約3ヶ月後には「すくも」という染料ができあがる。現在、徳島では約797俵（平成26年度実績）製造され全国に送られている。繊維産業、染料化学の発展とともに藍産業は世界的に衰退したが、阿波藍は途絶えることなく作り続けられた。国は阿波藍の優れた製造技術を保存するため、阿波藍製造を国選定保存技術に選定した。

《参考文献》図解『徳島県の歴史』河出書房新社、『阿波藍民俗史』上田利夫著、『吉野川の歴史』三好昭一郎、『徳島の文化財』徳島新聞社・徳島県教育委員会、『徳島県の近代化遺産』2006年徳島県教育委員会、『徳島県の近代和風建築』2013年徳島県教育委員会、『重要文化財田中家住宅保存修理報告書』1981年重要文化財田中家住宅修理委員会

2 ねらい

◎かつて阿波を代表する特産物であった阿波藍とそれを生産・出荷した藍屋敷・藍倉について学ぶことを通して、郷土の歴史について関心を高め、理解と愛着を深める。

◎藍を作るために洪水とたたかった先人の知恵と努力を通して、藍関連施設の文化財的価値を理解し、これを大切に守っていこうとする心情と態度を育てる。

3 教材選定の理由

ほとんどの徳島県人が、かつて阿波の代表的な特産物が阿波藍であったことを知っているが、藍作が盛んになった理由や先人が吉野川の洪水と闘いながら住居等を工夫して藍作を行ってきた知恵やたくましさを知るものは少ない。

藍屋敷には、吉野川の洪水に遭いながら、そこに藍作に適した土壌を見いだすなど、デメリットをメリットに転じた先人の努力や工夫があった。かつて全国に名をはせた「阿波藍」とそれを支えた「藍屋敷」に見られる藍商農家の工夫を通し、先人の知恵やたくましさ学ぶことで、郷土を愛し誇りに思う態度と心情を育てることに資すると考え、本教材を選定した。

4 学習の流れ

	学習活動	指導上の留意点
導入	1 阿波藍について知っていることを発表する。	1 教材の資料や阿波藍の実物などを提示し自由な発想を促し，学習意欲を喚起する。
展開	<p>2 徳島で藍作が盛んであった背景を理解する。</p> <p>3 徳島で藍作を行った田中家等の藍商農家の工夫や心情について話し合う。</p> <p>新町川の藍倉の写真から阿波藍により繁栄した徳島市内の様子を知る。</p> <p>4 藍産業衰退後の徳島の第1次産業と受け継がれている阿波藍の伝統について話し合う。</p>	<p>2 江戸時代初期に描かれた吉野川（正保図）を提示し，現在の吉野川と比較することでどんなメリット・デメリットがあるかを発表させ，藍作が吉野川流域に適した作物であったことを理解させる。</p> <p>3 田中家住宅の構造や特徴から，あえて洪水に遭いやすい土地に屋敷を構えた工夫や心情について想像できるように促す。</p> <p>新町川の藍倉の写真から阿波藍で栄えた徳島の様子を想像できるようにする。</p> <p>4 藍関連施設の活用や製造方法の継承を通じて，阿波藍の伝統を受け継ぐ人々の思いや努力を感じ取らせる。</p>
結論	5 本時のまとめをする。	5 ワークシートを活用し，自己評価を行わせる。

【12】

四国遍路とお接待

1 生徒用資料解説

四国遍路について

四国遍路は、四国各地に伝承の残る、弘法大師空海によせる信仰（大師信仰）を基盤として、大師ゆかりの四国各地の霊場（札所寺院）88箇所を順を追って参詣する巡礼である。一度に88箇所全てを回る「通し打ち」、何回かに分けて回る「区切り打ち」、1番から順に回る「順打ち」、88番から逆に回る「逆打ち」など、様々な遍路の方法が存在する。全行程約1400km、徒歩による通し打ちでは50日程を要するとされる。

徳島県は、四国遍路出発の地であり、「発心の道場」とも言われる。順打ちの場合は、鳴門市大麻町の1番札所霊山寺を皮切りに、阿波市市場町の10番札所切幡寺までは、吉野川北岸の村々や田畑の間をぬって遍路道を進む。吉野川を南に渡り、吉野川市鴨島町の11番札所^{ふじいし}藤井寺から神山町の12番札所焼山寺までは、阿波の遍路道最大の難所「遍路転がし」と呼ばれる山道に行く。焼山寺からは鮎喰川に沿って徳島市に入り、13番札所大日寺から17番札所井戸寺の国府町の平野部の五ヶ寺を参った後は、徳島市街地を抜け、小松島市の第18番札所恩山寺、19番札所立江寺に参る。続く勝浦町の20番札所鶴林寺、阿南市の21番札所太龍寺周辺には、昔ながらの遍路道（国史跡「阿波遍路道」）が残る。その後、遍路道は美波町田井で海岸部にさしかかり、美波町奥河内の23番札所薬王寺を経て、高知県に向かう。また、三好市の66番札所雲辺寺は、愛媛県から香川県に向かう途中にある山岳の札所寺院である。徳島県内を通過する遍路道は約280km、札所寺院は24箇所を数える。

コラム巡礼

巡礼

いくつかの決められた聖地や霊場を順番に参拝して歩くこと。順礼とも書く。世界的にはキリスト教のサンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼（フランス・スペイン／世界遺産）やイスラム教のメッカへの巡礼（サウジアラビア）等が有名。

日本の代表的な巡礼には以下のものがある。

- 1 紀伊山地の霊場と参詣道（世界遺産）
霊場（吉野・大峰（修験道）・熊野三山（熊野信仰）・高野山（真言密教））の三大霊場参詣道（熊野参詣道・大峯奥駈道・高野山町石道）
平安時代末～鎌倉時代の貴族・武士階級の参詣から、室町時代の民衆参詣時代へ
- 2 西国三十三観音霊場
平安時代（12世紀中頃）成立 日本最古の巡礼
畿内を中心に起こった観音巡礼が広がる
- 3 板東三十三観音霊場
鎌倉時代成立 源頼朝が西国霊場を規範として札所を制定
- 4 秩父三十四観音霊場
室町時代成立 西国・板東・秩父を合わせて「日本百観音巡礼」として発展
- 5 四国遍路
中世末～近世に確立 庶民信仰の社寺巡礼

(1) 四国遍路の歴史

① 古代・中世の四国遍路

四国遍路の起源については、明らかになっていないことが多い。開創1200年も弘仁6(815)年空海42歳の時に四国遍路を開創したという一説に基づくものである。

空海(774~835)が四国を修行の地としたことは、その著書である『三教指帰』(797年)に記されている。これによると18歳で出家した空海が、「阿国大滝嶽」(阿波国太龍寺)、「土州室戸崎」(土佐国室戸岬)で修行をしたことがわかる。そして空海の入定後に、弟子の修行僧らが大師の足跡をたどって遍歴の旅を始めたのが四国遍路のはじまりと考えられている。

平安時代の終わり頃から、四国は辺境の地として、修行僧や山伏など様々な宗教者の修行の場となり、補陀洛渡海信仰や熊野信仰などと混交し、四国遍路の原型が形づくられる。この段階では88箇所の札所寺院などは定まっておらず、四国の山海や様々な靈験所を巡る形であったと考えられる。

中世の文献に登場する四国遍路の原型

『梁塵秘抄』(後白河法皇編 12世紀末)

「我らが修行せし様は、忍辱袈裟をば肩に掛け、又笈を負ひ、衣は何時となく潮垂れて四国の辺地を常に踏む」

『今昔物語』(11世紀末~12世紀前半)

「今昔、仏の道を行ける僧、三人伴なひて、辺地と云は伊予・讃岐・阿波・土佐の海辺の廻也」

『醍醐寺文書』(弘安3(1280))

「修験之習(略)四国辺路、三十三所諸国巡礼、遂其芸」

コラム 補陀洛渡海信仰と熊野信仰

補陀洛渡海信仰とは、南方にある観音菩薩の浄土、補陀洛浄土を目指して室戸岬・足摺岬、那智勝浦などから船を出して渡海しようとする信仰。熊野信仰とは、平安時代に始まる熊野三山の信仰。皇室や貴族をはじめ、武士や庶民階級にまで熊野詣が流行し、その様子は蟻の熊野詣と言われた。

② 近世の四国遍路

修行僧の他に、一般人の遍路が確認できるのは、室町時代末期からのことである。さらに江戸時代に入り、一般人の遍路が増える。江戸時代前期には、空海(弘法大師)ゆかりの88箇所の札所寺院を巡るという現在の形に近い四国遍路が定着する。17世紀後半には、四国遍路の案内書が相次いで出版されていることから、この時期に民衆に深く浸透したと考えられる。

代表的な四国遍路案内書

『四国遍路日記』(澄禅・承応2年(1653))

『四国遍路道指南』(真念・貞亨4年(1687))

『四国遍禮靈場記』(寂本・元禄2年(1689))

江戸時代後期には観光的な要素も加わり、民衆に支えられた巡礼として発展する。江戸時代の遍路の数や出身地について、札所で死亡した遍路の数を分析した田中智彦によると、遍路は宝暦年間（1751～63）から増加、さらに文化・文政年間（1804～29）に大きく増加し、天保年間（1830～43）にピークとなり、明治に向かって減少する。遍路の出身地は四国を中心として、近畿・中国地方が多い。中部から関東地方にかけては少なく、東北・北陸、九州南部では極端に少ない（田中智彦「四国遍路の歴史的変遷」『遍路道』徳島県教育委員会）。下川清の分析によると、徳島県内の道標や遍路墓などの建立のピークは1800年前後（文化・文政期）にあるとされ、該当時期に遍路が増加したことの裏付けとなる。

遍路は修行僧、先祖や縁者の供養のために回る人々だけではない。身体障害者・ハンセン病患者・犯罪者など、当時の社会に受け入れられなかった人々も弘法大師の救い（信仰による病の治癒や贖罪）を求めて回った（終生・遍路は死出の旅）。四国遍路は、あらゆる階層を受け止め、これらを救済するシステムでもあった。

③近現代の四国遍路

明治維新以降、全国的に廃仏毀釈の風潮が広がった。四国では土佐藩や多度津藩で激化しているが、徳島藩では大きな変動はなかったと言われる。ただし、蜂須賀家やその家臣団と関係の深かった寺院は、寺領の喪失、境内地の縮小などの影響を受け、一部には廃寺化するものも見られた。しかし、真言宗や浄土真宗など、一般庶民を檀家とする大多数の寺院では、江戸時代と変わることなく、寺院経営が維持されていた。四国遍路についても「藩政時代からの伝統を受け継ぎ、四国霊場巡拝の風も益々盛んで、一番・五番・十番・二十三番などの札所寺院の門前は隆盛を続けていた。」（『徳島県史』）とされる。このことは、徳島県内の道標の建立年代の第2のピークが1890年前後（明治中期）にあるとする下川清の分析からも首肯されよう。

1930年頃からは、西洋風の服装をしたり、公共交通機関を利用したりして、「合理的に」巡礼を行う「モダン遍路」と呼ばれる遍路も登場している。第2次世界大戦が激化する頃には、遍路の数は激減し、戦後も、しばらくは少なかったとされる。再び四国遍路が多く行われるようになるのは、1950年代半ばからで、昭和29年（1954）には、四国鉄道局が四国遍路に関する書籍『観光と宗教の旅の道標』を近畿地方を対象に配布している（森正人「戦後から1980年代までにみる四国88か所巡礼の動態：マスメディア、観光とのかかわりから」三重大学学術機関リポジトリ研究教育成果コレクション）。

高度経済成長期以降、モータリゼーションの発達に伴い、自動車を使った遍路が一般的となり、四国遍路も大きく変容したと言われる。現在、主流を占める観光バスによる団体の遍路は昭和28年（1953）に愛媛県の伊予鉄バスが企画した四国八十八箇所巡拝バスが嚆矢とされる。また定年退職を機に自家用車で巡拝する個人や夫婦なども多い。遍路の数は、年間10万人程度と言われる。そのうち歩き遍路は3000人程度とされるが、近年は、増加の傾向にあると言われる。また、外国人の歩き遍路が増加していることも近年の特徴とされる。遍路の動機としては、信仰のため、先祖や縁者の供養のためなど伝統的なものに加え、観光や癒やし、悩みの解消・自分への挑戦など多様化している。

コラム 歩き遍路の日数

- 澄禅『四国遍路日記』承応2年（1653）＝91日間
（奥の院に詣でたり，寺に逗留の日数が多い）
- 土佐国朝倉村の兼太郎 文化2年（1805）＝32日間
（経費の節約が目的で「走り遍路」とも言われる）
- 新井頼助『四国巡拝日記』文政2年（1819）＝57日間（名所・旧跡巡りの色彩が強い）
- 中務茂兵衛 明治時代 22歳～78歳で亡くなる57年間に280回の遍路
（→1回50日程度の計算）
- クレイグ・マクマラン 平成7年（1995）＝30日
（ニュージーランドのトレッキングガイド）
- 西川阿羅漢『歩く四国遍路・・・』平成9年（1997）＝31日間
（健康のため，歩くことが目的の遍路）
[佐藤光久『遍路と巡礼の民俗』人文書院2006より]

（2）遍路道の石造物

①道標（どうひょう・みちしるべ）・丁石（ちょうせき・ちょういし）

「道標」は，遍路道の分岐点などに建てられた札所寺院への道しるべ，「丁石」は札所寺院への距離を示したもの。一町（約109m）毎に札所までカウントダウン形式で設置される。

道標は主として遍路が願主（建立の発起人）となり，施主から寄付を集めて，遍路の便宜のために造立したものが多い。現代も路傍には，遍路による吊り札道標・シール道標などが見られ，その精神が受け継がれている。丁石は村単位が講で設置する場合が多い。

代表的な道標建立者と道標

真念

真念は1687年に『四国遍路道指南』を出版し，四国遍路の祖と呼ばれる僧侶。碑面に「右へんろみち願主真念」等と刻む。200基あまりの道標を建てたとされており，現在は37基ほどが確認されている。

武田徳右衛門

伊予の人で1800年前後に道標を建立。碑面には，上部に弘法大師像が刻まれ，その下に何寺まで何里と次の札所への距離が明記されているのが特徴。現在130基ほどが確認されている。

照蓮

阿波の人で武田徳右衛門に続き，1809年頃から道標の建立を始める。碑面は，上部に遍路道を示す手印（指さし）があり，その下に弘法大師像，更にその下に「四國中千躰大師」と刻み，道標千基を建立するとの意思が示される。現在72基が確認されており，

内62基は、阿波国内に建てられている。

中務茂兵衛

明治時代、山口県の人。22歳から遍路を始め、78歳で亡くなる57年間一度も故郷に帰ること無く遍路を続け、279回の遍路を達成し、280回目の途中で亡くなった。88度目の遍路から、各地に道標を建て始めた。現在、240基余の道標が確認されている。同時代の僧侶からは「至る處（ところ）に道しるべを建てつゝあるく人で、四國ではこの人を知らぬ人はない程の篤信者なり」と評された。碑面には手印と札所名、中務茂兵衛の名前、遍路の回数、施主の住所氏名等が刻まれる。

丁石

角柱形丁石

鶴林寺道やかも道の角柱形丁石は、花崗岩製で南北朝時代の丁石を近世に転用したものの。焼山寺道では、砂岩製のものが見られる。

舟形丁石

舟形で中央に地蔵を浮き彫りにしている。徳島県内ではこちらが主流。

② 遍路墓（へんろばか）

遍路の途中で行き倒れ、亡くなった人を村で弔い、遍路道沿いに墓を建てる習慣があった。「遍路墓」といい、碑面には、戒名・没年月日・生国郡村・俗名などが刻まれる。病気の遍路は村で介護し、子連れの遍路で親が亡くなった場合、子は「宿継村継」で世話をしながら出身村に送り届けられた。

徳島藩では、遍路に対し、生国の庄屋や寺院が発行した「往来手形」の所持を義務づけており、国境の番所で厳しく改められた。また、上方から鳴門の岡崎港に上陸する遍路には「渡海切手」の所持が義務づけられていた。これら証明を持つ遍路に対しては四国遍路が保証され、遍路の宿泊や病気の治療、食事などの世話、死亡時の取り扱いなどが村に命じられていた。逆に往来手形を持たない遍路は「乞食体（こつじきてい）」と呼ばれ、死後の扱いは異なった。

（3）お接待

① お接待

四国遍路の特徴として「お接待」がある。遍路が通過する村々の住民が遍路に対し、米やお茶、お菓子、金銭を与えたり、食事や宿を提供するなどの施しを行ったものである。これは、善行を積む功德であり、遍路とともに四国を巡っている弘法大師（「同行二人」）への接待と考えられた。接待をすると四国遍路をしたのと同じ功德が得られるとされた。接待は、地域住民が遍路を支える役割を果たし、貧しい遍路や女性遍路など経済的弱者の保護に繋がった。

また、接待は地域住民だけでなく、他国の団体によっても行われた。中でも毎年春に靈山寺や薬王寺で蜜柑等を配った和歌山の「紀州接待講」や「有田接待講」、立江寺で活動した大阪の「泉州信達組」が有名である。

接待は、西国巡礼や板東巡礼にも見られたが、西国巡礼は近世以降、板東巡礼は近代以降に衰退した（佐藤光久『遍路と巡礼の民俗』）。四国遍路においても、バス遍路や車遍路の増加により、一時減少傾向にあったが、近年の遍路ブームや歩き遍路の復活により、再び活発になりつつある。伝統的な個人接待や接待講のほか、地域の老人会や婦人会、ボランティアグループによる接待、学校教育の一環としての生徒などによる接待、まちづくりグループによる地域活性化を目指した接待など、その形態や目的も多様化している。

「四国遍路に残る接待は、遍路する人々に感動を与え、感謝の念を植え付ける。現代の日本社会は経済的に豊かになった反面、人と人との交流が乏しくなった。見ず知らずの人からの接待に感激し、改めて人の心の温かさを認識し、それが心に深く刻まれる。そこには接待を施す側の功德としての信仰心と苦勞して歩く遍路との間に心の通いがある。」
（佐藤久光『遍路と巡礼の民俗』）

②善根宿^{ぜんこんやど} 他，宿泊施設

旅籠は、食事、寝具が提供される宿泊施設で、通常、一般の旅人が利用するものであった。遍路は接待としての善根宿や遍路屋・木賃宿・通夜堂などを使用した。これらは、昭和40年頃から宿坊や民宿・旅館の増加に伴い衰退した。

善根宿

接待の一環として、自宅を宿として遍路に提供する行為。宿を貸そうとする者は最寄りの札所に行って宿を乞う遍路を自宅に連れ帰る。返礼として遍路はその家の仏壇で読経し、先祖を供養した後、食事の提供を受け、家族たちと他国の会話に興じた。

遍路屋

江戸時代の真念の建設に始まる宿泊所。無住の庵や観音堂、地藏堂、大師堂が利用された。

木賃宿

遍路宿 米を持ち込み燃料代（木賃）を支払う宿。おかずは無料（汁・菜など）寝具は不十分で衛生上も問題があったとされる。

通夜堂（つやどう）

札所寺院が修行僧、経済弱者・病弱者の遍路等のために建設、提供した無料宿泊所。

駅路寺（えきろじ）

慶長3年（11598）蜂須賀家政により制度化された、藩による遍路の支援と旅人の監視を目的とした施策。阿波国内の主要街道沿いに配置され、鳴門市長谷寺・上板町瑞雲寺（6番安楽寺）・吉野川市福生寺・東みよし町長善寺・三好市青色寺・阿南市梅谷寺・美波町打越寺・海陽町円頓寺の8ヶ寺がある。

③ 遍路が四国に伝えた文化

接待や善根宿は、地域住民と遍路の交流を生み、各地に遍路たちがもたらした技術や様々な知恵を定着させ、地域の産業や文化の発展に大きな役割を果たした。

遍路による交流がもたらした文化として、代表的なものに次のようなものがある。

- ・大谷焼 豊後（大分県）の遍路，文右衛門（万七）が製法を伝授
- ・和三盆糖 化政期に日向（宮崎県）の遍路が情報を伝え，丸山徳弥により成功
- ・におい米（高知） 窪川町仁井田から九州・中国地方へ伝わる
- ・大洲和紙（愛媛） 福井の六部が越前和紙の技術を伝える
- ・藍染（愛媛） 天保5年八幡浜の谷口文六が阿波より葉藍の種を持ち帰る
- ・和三盆糖（香川） 薩摩国奄美の遍路，関良介が種子キビと製法を伝える

（４）四国遍路を世界遺産に

① 世界遺産

世界遺産条約に基づき世界遺産リストに登録された、遺跡・景観・自然など人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を有する遺産

○世界遺産条約（世界の文化遺産及び自然資産の保護に関する条約）

1972年 ユネスコ総会で採択

2016年7月現在の世界遺産

世界の登録件数＝1052件（自然遺産203・文化遺産814・複合遺産35）

日本の登録件数＝ 20件（自然遺産4件・文化遺産16件）

② 世界遺産登録に向けた四国4県の取り組み

平成18年 4県共同提案で暫定リスト入りを目指す→暫定リスト記載ならず

平成19年 4県と58市町村で共同再提案→暫定リスト記載ならず・課題が明確化

課題① 史跡など，文化財として保護された札所寺院や遍路道を増やすこと

課題② 四国遍路の世界史的・国際的な重要性の証明をすること

平成21年以降 札所寺院と遍路道の文化財調査と指定を開始

「四国八十八箇所と遍路道」世界遺産登録推進協議会の設置

平成22年 「阿波遍路道 鶴林寺道・太龍寺道」の約4.5kmが史跡指定（四国初）

平成28年度現在 阿波遍路道約11.4kmが史跡指定

平成28年8月8日，四国4県と関係58市町村が，暫定一覧表記載に向けて，再度「提案書」を文化庁に提出している。

コラム 史跡とは

貝塚・古墳・都城跡・城跡・旧宅その他の遺跡で，わが国にとって歴史上または学術上価値が高いものについて，国および地方公共団体が史跡として指定をすることで法律上の保護措置を行ったもの。文化財保護法に基づく国史跡，県条例に基づく県史跡，市町村条例に基づく市町村史跡がある

参考文献

四国遍路について

- 『巡礼の社会学』前田卓 ミネルヴァ書房 1971
『旅の中の宗教—巡礼の民俗誌』真野俊和 NHKブックス 1980
『四国遍路記集』伊予史談会 1981
『四国遍路の宗教学的的研究 その構造と近現代の展開』 星野英紀 法蔵館 2001
『四国遍路』辰濃和男 岩波書店 2001
『遍路と巡礼の社会学』佐藤光久 人文書院 2004
『遍路と巡礼の民俗』佐藤光久 人文書院 2006
『四国遍路と世界の巡礼』四国遍路と世界の巡礼研究会編 法蔵館 2007
『四国八十八ヵ所』石川文洋 岩波書店 2008
『巡礼の文化人類学的研究 四国遍路の接待文化』 浅川泰宏 古今書院 2008
『遍路文化を活かした地域人間力の育成 報告書』鳴門教育大学 2010
『四国遍路と山岳信仰』四国地域史研究会連絡協議会編 2014
『図説 徳島県の歴史』河出書房新社 1994
『徳島県の歴史』山川出版社 2007
『遍路道』徳島県教育委員会 2001
『阿波遍路道 鶴林寺道・太龍寺道・いわや道』徳島県教育委員会 2010
『阿波遍路道 いわや道・かも道』徳島県教育委員会2011
『阿波遍路道 恩山寺道・立江寺道』徳島県教育委員会2012
『舎心山常住院 太龍寺』徳島県教育委員会2013
『霊鷲山宝珠院 鶴林寺』徳島県教育委員会2014
『母養山宝樹院 恩山寺』徳島県教育委員会2015
『黒巖山遍照院 大日寺』徳島県教育委員会2016
『阿波遍路道 焼山寺道・一宮道』徳島県教育委員会2016

D V D

- 『ロード88—出会い路，四国へ』村川絵梨・長谷川初範 他 2005
『ウォーカーズ—迷子の大人たちへ』江口洋介・戸田菜穂 他 2007

2 ねらい

◎我が国を代表する文化遺産である「四国遍路」について学ぶことを通じ、四国及び本県の歴史や風土について、理解と愛着を深める。

◎「お接待」が四国に根付いた伝統であることを理解し、訪問者に対するおもてなしの心情や態度を養う。

3 教材選定の理由

四国遍路は、88箇所の札所寺院と1,400kmに及ぶ遍路道からなる、壮大な巡礼行為であり、一般民衆や四国の地域社会が長年にわたり支え続けてきた、他に例を見ない文化遺産である。現在、四国4県は「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録に向けた取り組みを続けており、四国遍路を通じて四国が一つになろうとしている。

四国遍路について学ぶことが、郷土に対する理解と愛着を高め、四国を訪れる訪問者に対する、おもてなしの心情と態度を養うことに資すると考え、本教材を選定した。

4 学習の流れ（例）

	学習活動	指導上の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四国遍路について知っていることを自由に発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知識だけでなく，自分や家族の経験などがあれば，感想も発表させる。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四国遍路の歴史を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート 1 ・ 真言宗の開祖である空海が関係していることを理解させる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遍路道に残る石造物や史跡「阿波遍路道」について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート 2 ・ 石造物や遍路道は，四国遍路の歴史を物語る貴重な文化財であることを理解させる。 ・ 遍路道が校区を通過している場合は，実物の写真等を見せる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ お遍路さんを支えたお接待を知り，お接待を受けた時の心情について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 見ず知らずの人から受けた親切や喜ばれて感じる，うれしい気持ちを想像させる。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 四国遍路の世界遺産登録に向けた取り組みについて知る。 ・ 四国遍路を未来に伝えるためにどんなことをすればよいか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート 3 ・ お遍路さんや訪問者への接し方など自分たちにできることを考えさせる。
結論	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時のまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートの自己評価を行わせる。

【13】 橋でつながる人・もの・地域

1 生徒用資料解説

【冒頭の5枚の橋の写真資料について】

上段の5枚の写真は完成年の順に関係なく掲載してあります。したがって、古い順に並び替える作業をさせると、橋の工法についても触れることができます。また『吉野川に架かる橋梁の位置図』と結びつけて使用すると効果的と考えます。三好橋は昭和2(1927)年、吉野川橋は昭和3(1928)年、阿波中央橋は昭和28(1953)年、人道橋の旧岩津橋は昭和33(1958)年、阿波しらすぎ大橋は平成22(2012)年にそれぞれ完成しています。阿波しらすぎ大橋は、吉野川下流の干潟の存在を配慮し、工法にかなりの工夫がなされ、周辺の景観も考慮して架けられました。

なお、大鳴門橋は昭和60(1985)年に完成し、上路は高速道路として、下路は新幹線用として計画されましたが、現在うず潮見物の観光施設(渦の道)として利用されています。明石海峡大橋は平成10(1998)年に完成しました。世界最長の吊り橋です。主塔間が1990mとなっていますが、平成7(1995)年の阪神・淡路大震災で野島断層のずれで1m伸びて、1991mとなりました。

「明治7年(1874年)における県下の有料渡船場数」

(徳島県史第五巻 p 476～478)

徳島県の三大河川(吉野川、那賀川、海部川)のうち、やはり吉野川にもっとも多くの渡船場があったことがわかります。特に当時の板野郡(現在の鳴門市も含む)には50もの有料渡船場がありました。これには吉野川の支流も含まれています。上流の三好郡にも8ヶ所の有料渡船場がありました。また、那賀川には21ヶ所の有料渡船場がありました。この渡船場の位置を参考に橋を架ける場所を選定したものと考えられます。ちなみに現在吉野川に架かる橋で有料のものはひとつもありません。

郡名	有料渡船場の数	郡名	有料渡船場の数
※名東郡	13	三好郡	8
名西郡	2	那賀郡	21
※板野郡	49	海部郡	5
阿波郡	3	勝浦郡	9
麻植郡	5		
美馬郡	12	合計	127

※当時の名東郡には現在の徳島市が、板野郡には現在の鳴門市が含まれている。

(『名東県下阿波国川々舟渡賃銭表』：小松島市本田純一所蔵より)

フェリーボートの開業年（徳島県史第6巻 p 468～469参照）

鳴門・明石間のフェリーボートは昭和21(1946)年4月に開設され、鳴門と明石に2隻ずつ配置され、鳴門フェリーは1日に9便、明石フェリーは16便が就航しています。物の輸送が貨物自動車になるにつれ、徳島・阪神間、徳島・和歌山間にフェリーボートが次々と就航していきました。初期は貨物自動車の割合が、やはり高く、乗用車はその次でした。しかし、大鳴門橋、明石海峡大橋が開通するまでは、自動車交通が主流になった昭和40年代以降はフェリーボートが、海上における物流の主役だったのです。

表「徳島県内発着の高速バス運行状況」（p 73）

：平成26(2014)年11月T新聞掲載の高速バス運行表より作成

大鳴門橋・明石海峡大橋が開通するまでは、高速バスの運行は県内の一社による東京までの便が1日に数回運行されていた程度でした。しかし、平成10(1998)年に明石海峡大橋が完成したことで、フェリーボートはほとんど姿を消し、ヒトの移動、物の輸送は車になりました。フェリーボート会社によっては、バス会社を共同で設立したりし、輸送手段の大変化に対応していきました。この高速バスの運行状況を、その回数、行き先等の視点から分析、検討すると、徳島県内の地域の変化、産業、観光などの変化を推察することができます。これだけ多くの高速バスの運行は、大鳴門橋に続く明石海峡大橋の完成により、主として関西方面とのつながりが一段と濃くなったことを象徴しています。

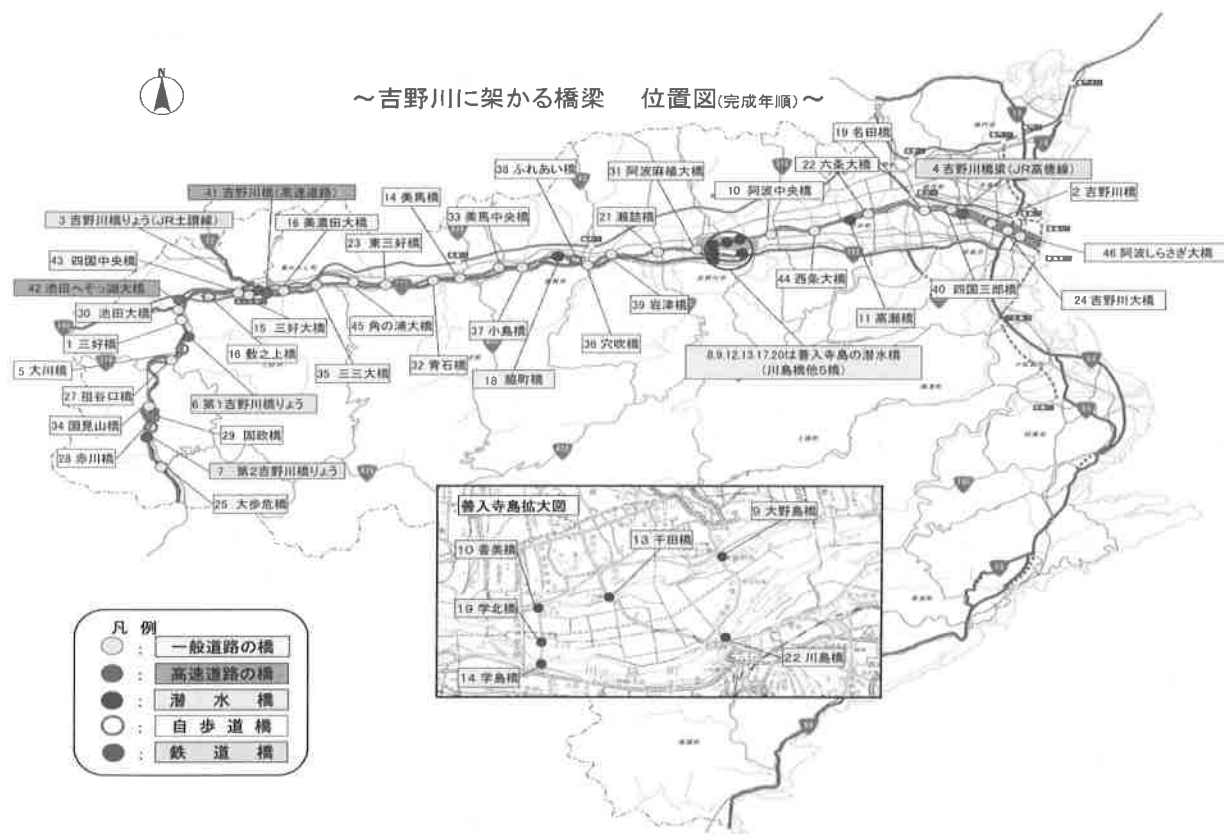
なお、毎週地方新聞の1面をさいてバスの運行表を掲載していることに注目させることも効果的と考えます。

2 本教材・題材に対する視点及び位置づけ

- ◎この教材は橋の影響についていわゆる3ルートのうち、大鳴門橋、明石海峡大橋に焦点をあて、主として徳島県内を発着場とする高速バスがどのように運行されているかを生徒たちに考えさせる。そのことを通して橋が結ぶ地域間のつながり方を考え、橋の役割、影響について理解させる。吉野川に架かる橋については導入的な教材として取り扱う。
- ◎したがって、本教材を取り扱う授業は地理学習の中国・四国地方全体の導入教材として位置づけるか、発展的な教材として位置づけ授業展開していただくと、他の2ルートの影響についても、深く考える教材にもなると考えます。
- ◎大鳴門橋・明石海峡大橋の建設技術、構造などについては、軽く触れる程度にとどめ、どちらかといえば、その影響について考察させることに重点を置きます。
- ◎現在の中学生が生まれた時には、すでに大鳴門橋、明石海峡大橋は完成し開通しています。このため、高速バスには日常生活の中で、すでに乗車経験がある生徒がいることを授業展開の上で視野に入れておく必要があります。

吉野川に架かる橋梁（位置図） ～橋の博物館《とくしま》～平成25年3月 p 5～6より
徳島は水の都と呼ばれ、吉野川をはじめ大小約500の河川が流れており、その河川には

全国でも有数の橋が数多く架けられています。特に吉野川には昭和初期に架設された三好橋，吉野川橋に始まり，平成24年現在で県内で46もの橋が架けられており，多種多様な橋梁・形式が存在し，まさに「橋の博物館」となっています。



3 引用文献並びに参考文献

(引用文献)

(1) 『吉野川に架かる橋梁～橋の博物館《とくしま》』2013・3月ホームページ p.5

(2) 徳島県史編さん委員会編：『徳島県史第5巻』昭和41年9月 p.476～478

徳島県史編さん委員会編：『徳島県史第6巻』昭和42年3月 p.462, p.468～469

(参考文献)

(1) 『橋梁シンポジウム』 - 橋の博物館！よしのがわ - 2013・3月ホームページ

(2) 本州四国高速道路株式会社：『本四架橋と私達の暮らし』平成21年9月

(3) 徳島県：『本州四国連絡橋 神戸・鳴門ルート全線開通に伴う影響調査』平成11年3月

(4) 徳島県観光国際総局：『平成23年度版 徳島県観光調査報告書』

(5) 財団法人徳島経済研究所：『徳島経済VOL. 55』1998年 冬

(6) 塩井幸武：『長大橋の科学』2014年8月 S Bクリエイティブ株式会社

(7) J T B時刻表1997・5月 & 1990年5月

(8) 文部科学省：『中学校学習指導要領解説社会編～一部改訂～』2014年1月

【徳島県内発着の高速バス運行状況】

(2014/11/13発行の県内T新聞の掲載による「高速バス・フェリー時刻表」より作成)

行き先 方面	発着地	1日の 発着本数	所要時間	大鳴門橋・明石 海峡大橋経由
京阪神 ・ 名古屋 ・ 東京方面	徳島 ↔ 神戸	36	約2時間30分	
	徳島 ↔ 大阪	45	約3時間	
	徳島 ↔ 関西空港	10	約2時間45分	
	徳島 ↔ 京都	7	約3時間	
	徳島 ↔ 名古屋	2	約5時間	
	井川・池田 ↔ 神戸	3	約3時間	
	井川・池田 ↔ 大阪	6	約4時間	
	三好～土成 ↔ 東京	1	約10時間	
	三好・脇町 ↔ 神戸		約2時間40分	
	三好・脇町 ↔ 大阪	4	約3時間50分	
	三好・脇町 ↔ 京都		約3時間40分	
	阿南(橋) ↔ 東京	2	約11時間	
	川島 ↔ 東京	1	約11時間	
	阿南 ↔ 大阪	7	約3時間40分	
	松山・徳島 ↔ 名古屋	1	約9時間30分	
	徳島 ↔ 寝屋川・枚方	2	約3時間20分	
	中国 ・ 四国方面	徳島 ↔ 高松	12	約1時間35分
徳島 ↔ 高知		4	約2時間50分	
徳島 ↔ 松山		7	約2時間30分	
徳島 ↔ 岡山		3	約2時間30分	(瀬戸大橋)
徳島 ↔ 広島		2	約3時間45分	(瀬戸大橋)
	合 計	155		

(注1) 県内K観光の高速バス運行が集計に入れば、阿南・徳島～神戸・大阪間で往復で11本、阿南・徳島～新宿・東京間で往復で4本、増加します。

(注2) 1990年当時徳島～東神戸間がフェリーでの所要時間が約3時間10分でした。

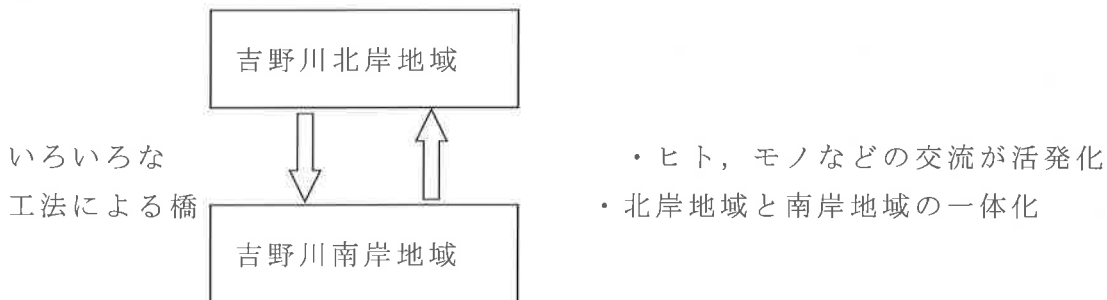
4 学習課題

- ①昭和に入り吉野川には、鉄あるいはコンクリートでつくられた多種多様な橋が架けられたことを知り、その影響について理解しよう。
- ②本四架橋（3ルート）がすべて完成し、本県の人々の生活や産業にどのような影響を与えたのかを考え、自分なりの考え・判断を表現してみよう。
- ③地域と地域の結びつき方に橋はどのような影響を与えたのか、客観的な資料をもとに自分の考えを述べてみよう。

5 板書計画

～橋の役割とその影響～

◎吉野川にかかる多くの橋の役割（「わたし」から「橋」の時代へ）

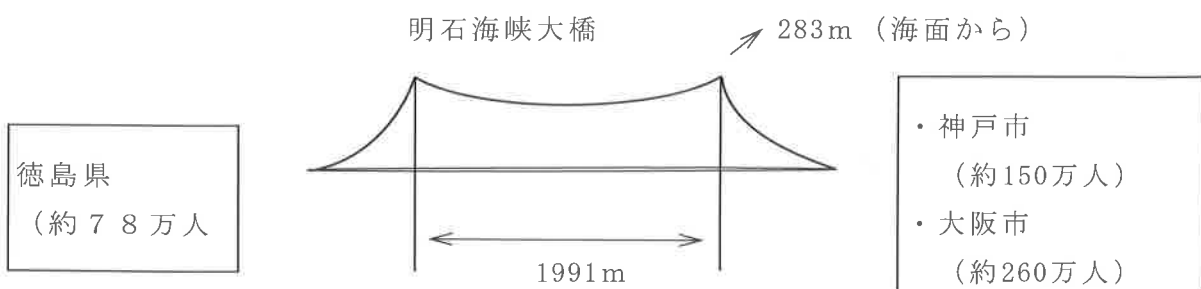


◎フェリーボートから大架橋時代へ

（強まる本州と四国との結びつき）

- ・徳島の人々は本四架橋（鳴門 - 明石）にどんなことを期待したのか。
- ※大都市への買い物が便利になる。
- ※大都市から観光客がたくさん来る。
- ※徳島県の特産品が大都市で売れる。
- ※さまざまな産業を誘致できる。
- ※大架橋そのものを観光の名所にできる。

（この部分の板書は場合によっては削除するか、あらかじめ準備しておいたものを提示する方法をとってもよい。板書量が増える可能性があるから）



高速バスの運行から
読み取れること・
考えられることは？

・京都市
(約140万人)

合計 550万人
(国政調査2010年)

徳島県の人口を
■で表すと
(約80万人として)

徳島県の人口の約7倍

■■■■■
■■■■■

※徳島県の人口の約7倍の地域とつながりました。どんな影響が考えられますか。
(自由に発表させた内容を板書する)

6 授業の目標と授業過程

(1) 授業の目標

(関心・意欲・態度)

○橋の役割とその影響について、自分なりの考えを持って、積極的に発表しようとする。

(思考・判断・表現)

○学習した具体的な内容，資料に基づいて，橋の影響についてさまざまな視点から，自分の意見，考えを説明できる。

(資料活用技能)

○日常生活の中で目に触れる資料を取り込み，自分が考える資料として活用できる。

(知識・理解)

○人と人，地域と地域を結びつける橋の役割について，多面的な視点から説明できる。

(2) 授業過程

(導入)

○「橋」という言葉からどんなイメージを持つか考え，発表させる。

(展開)

①吉野川に架かる橋の完成順と位置図を見て，そこから読み取れることを答えさせる。
また写真を見て古い順に並び替える作業を通して，橋の工法についても考えさせる
(「～吉野川に架かる橋梁 位置図～」，「写真」)

②橋が架かったことで吉野川北岸地域と南岸地域の結びつきかたがどのように変化したのか，推察させる。

③徳島県外への人やものの移動・輸送手段がフェリーボートから大架橋を通じて行き来するようになり、徳島県という地域が全体として、あるいは地域的にどのように変化してきたのかをグループに分かれ想像、推察させ、意見をまとめ、発表し議論をさせる。

④高速バスの利用者はどんな目的で利用しているのか、県内から県外への視点と県外から県内への視点で考えさせる。(P73の表「徳島県内発着の高速バス運行状況」の大鳴門橋・明石海峡大橋経由の覧に、経由すると思われる高速バスに○印を記入させる。)

(まとめ)

○ 展開の③で出てきた主張をふまえながら、大架橋（鳴門 - 明石ルート）の架かったことで、県内外に与える影響についてさまざまな視点から整理させる。

1 教材について

〔教材設定の理由〕

徳島県内には、地域の特産物や気候・風土を生かした郷土料理が、数多く受け継がれている。特に、徳島を代表する「そば米雑炊」や「ふしめん汁」は、食品として商品化され販売されたり、学校給食に取り入れられることによって、限られた地域だけでなく、広く県内各地で食べられるようになってきた。

しかし、その一方で、近年の食生活の変化や家庭の核家族化によって作られる機会が少なくなり、食文化として次代へ継承していくことが難しくなっている郷土料理や伝統的な行事食もある。

そこで、本教材を中学校の国語科、技術・家庭科（家庭分野）、外国語科等の学習に取り入れ、資料による学習や調理実習など体験的な学習を通して、それぞれの郷土料理の特徴や、背景にある地域性等を理解させるとともに、郷土料理を貴重な伝統文化として次代へ保存・継承していこうとする態度を育てていく。

以上のような学習を通して、ふるさと徳島に愛着と誇りを持ち、将来国際的な舞台上で生き生きと活躍する中学生を育成することを目的に、本教材を設定した。

（1）徳島を代表する郷土料理

①「農山漁村郷土料理百選」とは

平成 19 年度に「全国各地の農山漁村で脈々と受け継がれ、かつ『食べてみたい！食べさせたい！ふるさとの味』として、国民的に支持されうる郷土料理」として、農林水産省が選定したもの。選定にあたっては、インターネットによる人気投票の形で得た意見を参考に、「郷土料理百選選定委員会」が最終審査を行った。

徳島県からは、「あめごのひらら焼き」「おでんぶ」など、25種類の郷土料理が選定の候補となり、その中から、「そば米雑炊」「ぼうぜの姿寿司」が選ばれた。

②「そば米雑炊」について

「そば米」は、ソバの実を塩ゆでして、陰干しし、乾燥させて、殻をとったもの。ソバは、タデ科の1年草で、播種から収穫までが2～3か月と成長が早い。また、痩せた土地や乾燥した土地でも容易に成長することから、古くから救荒作物として栽培されていた。

本県では、三好地域の山間集落において、急な斜面が多い、昼夜の寒暖の差が大きい等の特徴を生かし、古くからソバの栽培が行われてきた。収穫されたソバは、そば米として使う以外は、粉にしてそば切りやそば練りとして利用された。民謡の「祖谷

の粉ひき」は、祖谷地方でソバや小麦を粉にする仕事に合わせて歌われた「労働歌」である。

祖谷地方では、お祝い事に作られる「そば米雑煮」と、雑煮よりそば米を少なくし、汁を多くした「そば米の雑炊」が、ふだんの日の料理として食べられている。⁽³⁾ソバをつぶのまま調理するのは、徳島独特の調理方法である。

現在では、そば米は、商品化されスーパーマーケットで販売されるなど、身近な食材の一つとなり、そば米雑炊が家庭で作られるようになってきたり、「そば米汁」が学校給食のメニューとして取り入れられるなど、祖谷地方に限らず、広く県内で食べられるようになっている。また、フリーズドライ化された「そば米雑炊」が販売されるなど、徳島県を代表する郷土料理の一つとして、広く県外にも知られるようになってきている。

③「ぼうぜの姿寿司」について

「ぼうぜ」は、スズキ目イボダイ科に属する魚で、標準和名は「イボダイ」である。地方名が多く、ボウゼの他、シズ、ボウデ、クラゲウオ、バラケ、ムツと呼ばれている。徳島県では、7月から11月にかけて徳島の近海で漁が行われ、年間100～200トンの漁獲量がある。徳島では、姿寿司のほか、塩焼きや煮付けにするなど馴染み深い魚であるが、他県ではあまり食べられていない。

「ぼうぜの姿寿司」は、徳島の秋祭りになくてはならない行事食の1つである。

各家庭では、時期になると、ぼうぜを「背から開いて骨、内臓、目玉をとり、濃い塩水に3時間ほどつける。身がしまったら一度水洗いし、15分から30分間、酢につける。すし飯には、すだちの汁も少し加える。このごはんをぼうぜの腹にいっぱい詰め、すし桶に順番に並べ、すだちの輪切りを一ぴき一切れずつのせてふたをし、重しをする。」⁽³⁾などの作り方で姿寿司を作っていた。ぼうぜの代わりに「あじ」を使った「あじの姿寿司」も作られている。

(2) 受け継がれてきた郷土料理 ※「とくしまの郷土料理」参照・一部抜粋。

() 内は、掲載されているページ数を表示。

①れんぶ (徳島県下全域・P40)

金時豆や黒豆等の豆類と根菜類を使った五目煮豆のこと。「おでんぶ」「おれんぶ」とも呼ばれている。正月のおせち料理として、また建前のような祝い事の時に作られていた。

②たらいうどん (阿波市土成町御所・P27)

ゆでたうどんをゆで汁ごと木製の大きな器(飯盆)に移し、つゆにつけて食べる。地域を流れる宮川内谷川に生息する「じんぞく(標準和名:カワヨシノボリ)」からとっただし汁を使うのが伝統的なつゆである。「たらいうどん」の名前は、昭和6年、

当時の徳島県知事が御所を訪れ、飯盆に入ったうどんを食べた際に、「たらいのような器に入ったうどんを食べてうまかった。」と言う話をしたのが始まりだと言われている。この地区では、江戸時代から地域で収穫された小麦を、水車を利用して小麦粉に製粉していた。その小麦粉を使って作られたうどんは、仕事納めなど、特別な時にふるまわれる行事食であった。

③おみいさん（徳島県下全域・P13）

みそで味付けした雑炊のことで、「みい」はみそのことである。これに、尊敬語である「お」「さん」がついて、「おみいさん」と呼ばれるようになったと言われている。少量のこめ（精米時に割れてしまい、ふるいにかけてときに選別された小さな米）を、豊富にとれる大根やさといもでかさ増しして食べることから始まったと言われている。当時、貴重であったお米を大事に食べようとする、先人の工夫がうかがえる。

④そうめんのふし汁〔ふしめん汁〕（つるぎ町半田・P24）

つるぎ町半田で製造される「半田そうめん」は、上下2本の棒で麺を伸ばし、吊して乾燥させて作られるが、その時に棒にかかっていた曲線部分を乾燥後に麺と切り分けたものを「ふしめん」と呼ぶ。そうめんよりこしが強いのが特徴。ふしめん汁は、いりこのだし汁に、にんじん、ゆでたふしめん、豆腐などを入れ、しょうゆ味で仕上げる。

⑤鮎ろうすい（勝浦川流域・P4）

勝浦川は、鮎の有名な産地で、とれた鮎を丸ごと1尾使う。「ろうすい」は、雑炊（ぞうすい）がなまった言い方で、「いれろうすい」とも呼ばれている。だし汁に米を入れ、なすやじゃがいも、たまねぎなどの野菜を味噌で味付けした雑炊である。

⑥でこまわし（三好市祖谷地方・P29）

ごうしゅういも^{〔註〕}（在来のジャガイモで、祖谷いも、源平いも、ほどいも、とも呼ばれ、濃厚な味で煮くずれしないのが特徴）、そば団子、岩豆腐、丸こんにやく（プリプリとした食感がある）を串に刺し、囲炉裏に立てて焦げないように串を回しながら焼く様が阿波人形浄瑠璃の木偶（でこ）人形の頭を回しているように見えるので、「でこまわし」と言われるようになった。

⑦あめごのひらら焼き（三好市祖谷地方・P3）

「ひらら」とは、平たい石を指す。この石をかまどの上で熱し、みそで作った円形の土手の中に水、砂糖、酒を入れ、みそを溶きくずして魚や野菜を焼く原始的な野外料理である。家族や友人が集まったときに作られたり、来客があったときの接待料理として作られていた。写真は、石ではなくホットプレートを使い料理を再現したものである。「あめご」の標準和名は、「ヤマメ」である。

⑧ 出世いも（県南地方・P20）

蒸したさといもをつぶして形を整え、それをあずきのこしあんで包み輪切りにしたもの。元々おはぎに見立てて考案されたもので、米が貴重だった時代、米の代わりにさといもを使ったのが始まりだと言われている。「いもが米に出世した」としてこの名前がつけられた。今では、さつまいもで作られることが多くなっている。端午の節句、結婚式などに作られた。

（3）所変われば・・・

郷土料理や行事食の中には、同じ料理であっても、調理に使う材料や名称が異なっている場合がある。

① ちらしずし

ア 名称について

「ちらしずし」は、節句やお祭りの時に行事食として食べられてきた。ちらしずしの県内での名称は、「五目ずし」「かきまぜ」「おすもじ」「ばらずし」「いのこずし」と多い。

○おすもじ：徳島県内に伝わる女房詞（にょうぼうことば）で、寿司を意味する。⁽²⁾

※ 女房詞とは、室町時代初期に宮中に仕える女官たちの間で上品な言葉遣いだとされる。

○いのこずし：陰暦十月の亥の日に、農作物とともに神前に供えた「かきまぜずし」のこと。

イ 材料について

「ちらしずし」の具材となる野菜や山菜は、季節毎に多少変わるが、ちくわ、ごぼう、コンニャク、にんじん、油揚げ等を細かく切って煮付けたものを酢飯に混ぜて作る。

県内の「ちらしずし」は、「金時豆」を具材として入れることが特色となっている。また、県南では、「落花生（ピーナッツ）」を入れたり、特産である「ひじき」を使って寿司を作る地域もある。

② 雑煮

徳島で食べられる雑煮は、丸餅、さといも、にんじん、青菜（こなつな等）を入れた、いりこだしの白みそ仕立てが多いようであるが、地域や家庭によって、使われる具材や汁に使う調味料などは様々である。

吉野川北岸地域では、白みそを使わず、赤みそ仕立てとなる。鳴門市の海岸地域では、いりこではなく、秋に釣ったベラ（スズキ目ベラ科に属する魚）を焼いて干したものを使う。那賀川上流地域では、焼いた丸餅を雑煮に入れる。特に、三好市東祖谷地域の雑煮は「うちちがえ雑煮」と呼ばれ、餅を入れない珍しいものである。さといもの親いもを3つ入れ、長方形の豆腐を2つ十文字にうち重ねしてのせたすまし汁仕立ての雑煮となっている。

2 ねらい

- 1 本県の郷土料理について学習し、その魅力に気づかせるとともに、食文化として大切にすることを養う。
- 2 県内各地域における郷土料理について材料や名称などを分類・整理し、食文化について理解を深める。

3 展開例

○技術・家庭科（家庭分野）：「B 食生活と自立(3)日常食の調理と地域の食文化(イ)地域の食材を生かした調理，地域の食文化」の学習において，教材を活用する。

活用例Ⅰ

【活用教材】（１）徳島を代表する郷土料理 （２）受け継がれてきた郷土料理

【発問例】

- ・（（１）の資料）「そば米ぞうすい」と「ぼうぜの姿寿司」の２つが，郷土料理百選に選ばれたそうですが，食べたことはありますか。
- ・（食べたことがある人に対して）どのような料理で，どのような時に食べましたか。
- ・（（２）の資料）徳島には，地域ごとに，いろいろな郷土料理が受け継がれています。（２）の中で，徳島県内のどの地域の郷土料理か知っているものはありますか。

活用例Ⅱ

【活用教材】 （３）「所変われば・・・」

【発問例】

- ・「ちらしずし」の資料のとおり，同じ料理でも料理の名前や材料が違っている場合があります。
あなたの地域や家庭で作る「ちらしずし」については，名前や使っている材料はどうですか。
- ・「雑煮」も地域によっていろいろな特色があります。特に三好市の東祖谷地域の「うちちがえ雑煮」は，もちを入れず豆腐を代わりに使う珍しいものです。あなたの地域や家庭で作るお雑煮はどういうものですか。

4 参考文献

- (1) 「とくしまの郷土料理」(H24.3. 徳島県農林水産部ブランド戦略総局とくしまブランド戦略課)
(<http://www.pref.tokushima.jp/shokuiku/recipe/kyoudo/2012060800092/files/kyodo-ryori.pdf>)
- (2) 中国四国農政局ホームページ・「伝統料理(徳島県)」
(<http://www.maff.go.jp/chushi/chisanchisyo/dentou/ryouri/36tokusima/index.html>)
- (3) 農林水産省選定「郷土料理百選」ホームページ
(<http://www.rdpc.or.jp/kyoudoryouri100/>)
- (4) 「日本の食生活全集 36 聞き書 徳島の食事」
[1990.10. (社) 農山漁村文化協会]
- (5) 「阿波の郷土料理」[2011.3 (株) アワード]
- (6) 「とくしま味の四季」[1983.1 徳島新聞社]
- (7) 徳島県ブランド水産物もの知り図鑑ぼーぜ疣鯛^{いぼ}
[徳島県農林水産部ブランド戦略総局水産課]

【15】 地域の食材を使って「そば米汁^{じろ}」を作ろう

1 資料等の解説

カラサオ※（唐竿）

日本の農具の一種で、麦や大豆など、穀物の脱穀作業に利用する道具。長い竹竿の先端に、回転する短い棒を取り付けた形をしている。この竿を持ち、むしろの上に広げられた穀物を、短い棒を回転させながらたたき、脱穀する。

郷土料理や地域の食材

地域の食材を生かした日常食などの調理を通して、地域の食文化について関心をもつことや、地域の食文化について、地域や季節の食材を用いた調理を通して、その意義を理解することが目的である。そのため、「そば米汁」の他に、地域特有の「汁もの」（例えば、雑煮やみそ汁など）がある場合は、それらを題材として扱うことが望ましい。

そばアレルギー

アナフィラキシーショック等を伴う急性アレルギー症状を起こすことがあるため、調理実習で扱う場合は、本人や保護者、養護教諭等関係者と連携し、アレルギーに関する十分な確認等が必要である。

除去食の調理を行うに当たっても、調理台、器具や食器は完全に分離し、前時の洗い残しやそば湯が混入する等がないように、細心の配慮が必要である。

2 本時の目標と展開

《本時の目標》

地域の食材を生かした調理に関心を持ち、郷土料理や地域の食材を使うことの意義について理解し、調理の目的や食材にあった調理計画を立てることができる。

《展開》

- ① 「そば米汁」の由来について知る。
- ② 野菜たっぷり「そば米汁」の作り方を知る。
- ③ 「そば米汁」に合う地域の食材を検討し、1つプラスする。
- ④ 調理実習の計画を立てる。
- ⑤ 次時の調理実習について確認する。

3 板書計画

地域の食材を使って野菜たっぷり「そば米汁」を作ろう

- ① 「そば米汁」の由来
 - ・祖谷地方の郷土料理
 - ・そばの栽培
- ② 野菜たっぷり「そば米汁」
 - 地域の食材をプラスしよう
 - 特徴，調理法など
 - 例) すだち，ゆず，れんこん等

「そば米汁」の【材料と分量】【作り方】

- ・材料の下準備 ・切り方 ・味付け
- ・だしのとり方 (かつおと昆布の混合だし，干しいたけの戻し方とだし汁)
- ・鶏肉の衛生的な取扱い方 など

※そばアレルギーの注意や確認

4 参考文献

- ・「徳島県の郷土料理指導資料集 & 実践報告書」(平成25年2月 徳島県教育委員会) P62・P63
- ・「とくしまブランド協力店美味いよ! とくしまブランド店なっとくレシピ Copyright©2012 新鮮なっ! とくしま通信 All Rights Reserved.」<http://www.pref.tokushima.jp/nattoku/taste/easy/sobagomejiru.html>
- ・「見てみよう! 日本各地の郷土料理 農林水産省」
http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/kodomo_navi/cuisine/cuisine6_1.html

【16】

徳島の天然記念物を見に行こう

1 教材について

〔教材選定の理由〕

徳島県内には、国指定の天然記念物をはじめ、県指定や市町村指定の天然記念物が多く存在している。平成26年、三好市の大歩危が国指定の天然記念物に正式に指定され、地元では新聞やテレビ等で大きく報道され、今後、県内外から多くの人々が大歩危を訪れることになると思われる。

しかしながら、天然記念物と言われてもイメージが湧かないのが現状である。大歩危が指定されたことで人々の関心が集まっている今だからこそ、あまり普段は意識していない天然記念物について、興味・関心を深めるとともに、地域に存在する天然記念物に目を向けさせることで、我々の生活と切り離すことができない自然との共存、及び自然に対する畏敬の念を持つきっかけになればと思い、本教材を選定した。

(1) そもそも天然記念物とは？

文化財保護法第2条では、天然記念物を以下のように定義しています

→動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で我が国にとって学術上価値の高いもの。

天然記念物は、全国で1,011件（うち特別天然記念物が75件）が指定されています。徳島県では、平成26年3月18日に三好市の大歩危が正式に国の天然記念物に指定され、県内の国指定天然記念物の総数は25件（うち特別天然記念物が4件）になりました。中でも、548件の天然記念物（植物）のうち、特に重要なものとして特別天然記念物（植物）が全国で30件指定されています。そのうちの1件が、東みよし町の『加茂の大クス』なのです。

※全国の指定件数は平成26年4月1日現在（文化庁ホームページより）

徳島県の指定件数は平成28年4月1日現在

※新聞記事解説

大歩危は、一級河川吉野川の中流に位置し、四国山地を浸食してできたV字谷を形成し、関東から九州まで日本列島を縦断して分布する三波川変成岩（さんばがわへんせいがん）が典型的に見られ、徳島では「阿波の青石（あおいし）」と呼ばれ、石材として著名です。今回指定された部分は、三好市山城町西宇（にしう）と三好市西祖谷山村徳善西（とくぜんにし）を隔てる約500mの区間で、近くにはドーム状の「背斜（はいしゃ）構造」と呼ばれる褶曲（しゅうきよく）構造が間近で確認でき、全国広く分布する三波川変成帯の中でも砂質片岩（変成岩の一種で、原岩である砂岩が地下深くに押し込まれ、高温・高圧等により岩石のつくりが変化したもの）が見られるのは全国的にも珍

しい特徴です。

この背斜構造の存在は、四国山地の隆起と形成の歴史を知ることができ、しいては日本列島の成り立ちを知る上で重要であり、学術的価値が高いと認められ、今回の国指定に至りました。

（２）天然記念物の意義とは？

文化庁発行のパンフレット「天然記念物って、なに？」には、天然記念物の意義について以下の３点が記されています。

①歴史の証人

日本の自然の成り立ちを知る上で欠かせない学術的価値のあるもので、「自然史」としての意義をもつもの。

例）地質現象，化石，固有種などの動植物

②日本の自然誌

日本の風土や文化を育んできた自然，すなわち、「自然誌」としての意義を持つもの。

例）亜熱帯のマングローブ，亜寒帯の針葉樹林

③人と自然とのかかわり

日本人と自然とのかかわり方，また，心象風景を語る上で欠かせないもので、「文化史」としての意義をもつもの。

巨樹やホテルなどの日本人の自然観の形成に寄与したものや，並木，家畜・家禽など人がかかわって作り上げたもの

（３）天然記念物からわかること

※天然記念物を『まもる』，そして『いかす』（文化庁発刊「天然記念物って、なに？」より）

『まもる』

天然記念物の考え方は，元々ヨーロッパで生まれたもので，明治時代に日本に導入されました。天然記念物を守ることは，自然全体と自然にまつわる文化を守ることに繋がるとされています。

『いかす』

天然記念物を守るために，行為（捕獲や採集，工事等）には一定の規制がかかるため，天然記念物と地域住民との距離が遠くなってしまいがちですが，天然記念物は地域の遺産であり，天然記念物の価値を明らかにして生かすことで，人々の自然観や地域との繋がりを育むことができるとされています。

(4) 徳島県の天然記念物

徳島県にある国指定の天然記念物25件の内訳は、動物が10件（うち地域を定めない種の指定のものが7件）、植物が11件（特別天然記念物1件を含む）、地質・鉱物が4件です。

①大浜海岸のウミガメおよびその産卵地（昭和42年8月16日国指定）

→大浜海岸は、前面が広く障害物もない砂浜で、傾斜が緩やかなことや砂浜の砂質も良いことから、昔からアカウミガメの産卵地として好適な産卵地である。指定当初は年間300頭余りの上陸が見られたが、その後上陸頭数も減り、平成8年以降は100頭以上の上陸は確認されておらず、数頭しか確認できなかった年もあった（美波町ホームページより）。

地元ではウミガメ保護に対する取り組みも盛んで、5月末から8月末までウミガメの保護規制のため、人の砂浜への立入や車の通行を規制したり、保護監視員による夜間巡回、また近くには「日和佐うみがめ博物館カレッタ」があり、ウミガメの保護管理・保護繁殖に努めている。

②美郷のホタルおよびその発生地（昭和45年8月29日国指定）

→美郷は川田川の上流に位置し、昔からホタルが群棲する場所として有名である。ここには、ゲンジボタルを中心にヘイケボタル等、5種類のホタルの生息が確認されている。

戦後、水田や果樹の農薬使用や台風被害、谷川改修など様々な原因でホタルが減少したが、地元の有志や小学校の子どもたちが保護・生態観察等に取り組み、現在では毎年5月下旬から6月中旬に乱舞する頃にあわせて「美郷ほたるまつり」を開催したり、平成12年には「美郷ほたる館」が開館し、ホタルに関する保護・調査研究・野外体験学習など幅広く活動している。

③加茂の大クス

（大正15年10月20日国指定、昭和31年7月19日特別天然記念物に指定）

→加茂の大クスは、旧若宮神社（その後4つの神社が合社され武大（たけお）神社になる）の社地跡にあった御神木で、樹齢は1000年と推定され、幹周り約17m、樹高約26m、枝張りは東西、南北とも約40～50mで、豊かに広げた樹形の美しい巨樹として全国的に知られている（東みよし町ホームページより）。

しかし、落雷による損傷や周辺環境の変化のため一時樹勢が衰えたが、その後、昭和40年代に入り、様々な保存策を講じたことで樹勢は回復し、現在では周囲を「大クス公園」として整備し、地域の人々の憩いの場として親しまれている。

④^{にゅうほ}乳保神社のイチョウ（昭和19年11月7日国指定）

→乳保神社は吉野川中流の古い沖積地にあり、その境内にはイチョウ（雄株）の巨樹がある。その巨樹の幹の周囲には、無数の大小のこぶのような突起が垂れ下がっており、

「イチョウの乳」と呼ばれている。地元では、古くから授乳の神木として地域の人々に崇められている。

幹周り約17m、樹高は約28mで、樹齢800～1000年と推定され、県下でも最長老の巨樹のイチョウとされている。

⑤ 沢谷のタヌキノショクダイ発生地（昭和29年12月25日国指定）

→タヌキノショクダイは、ヒナノシャクジョウ科に属する腐生植物で、昔のろうそくをともし燭台に見立てて、その名が付けられた。毎年7、8月頃、草丈3～4cmの茎を出し、その先に1個の乳白色の花をつける。

もともとは、阿南市の太龍寺の竜の岩屋（鍾乳洞）で発見されたが、その生息地は石灰石採掘のため破壊された。その後、亀井谷の南東斜面にも生育することが明らかになった。発生する個体数はその年の降水量等の気象条件に左右されるが、近年は当初に比べて著しく減少している。国内での分布は霧島山（宮崎県）、徳島県、静岡県の3ヶ所に限られている。

⑥ 出羽島大池のシラタマモ自生地（昭和47年3月16日国指定）

→シラタマモは、シャジクモ科に属する藻類で、体長20～50cm、冬季には繁殖のために仮根部に白い球状体（直径1～2mm）をつけることからこの名前が命名された。

今から約1億数千年前の中生代白亜紀に繁殖し、その形状は海産生物から淡水産生物へと進化していった生物の過程を今も残しており、『生きた化石』とも言われている。

出羽島は、牟岐港から約4km離れた海上にある周囲約4kmの島で、大池は島の南西部に位置する。東側を山に、西側は海岸に接していることから、淡水と海水が流入することで半塩水（海水：淡水＝2：1）となり、シラタマモの自生するのに最適な環境になっている（牟岐町ホームページより）。

⑦ 鈴が峯のヤッコソウ発生地（昭和54年11月26日国指定）

→ヤッコソウはラフレシア科に属し、シイノキの根に寄生する草丈約3cm余りの乳白色の寄生植物で、毎年11月頃に発生する。その姿が『やっこさん』に似ていることから、牧野富太郎によって名付けられたとされている。

この仲間のほとんどは熱帯に生息しており、日本では唯一ヤッコソウのみが自生しており、中でも徳島県が世界の北限地とされている。鈴が峯（海陽町久保）以外にも妙見山（海陽町奥浦・県指定天然記念物）等でも発生が見られる。

⑧ 阿波の土柱（昭和9年5月1日国指定）

→阿波の土柱は、ヨーロッパのチロル地方やアメリカのロッキー山脈の土柱とともに『世界三大土柱』の一つとされている（阿波市ホームページより）。

土柱は『土柱層』と呼ばれる礫層（れきそう）が風雨により浸食され、柱状になったもので、年代的には今から約130万年前の新生代第四紀のものとされている。天然記

念物に指定されている波濤嶽（はとうがたけ）をはじめ、橘嶽（たちばなだけ）、不老嶽（ふろうだけ）、筵嶽（むしろだけ）、燈籠嶽（とうろうだけ）があり、中央構造線の隆起量の大きさを物語っている。

⑨坂州不整合（平成23年2月7日国指定）

→坂州不整合は、1級河川那賀川の支流である坂州木頭川に架かる坂州橋の直下で見られる古生代二疊紀（ペルム紀）と中生代三疊紀の地層との間に見られる不整合である。不整合とは、地層が堆積する際に大きな時間的隔たりが生じ、地層の堆積が不連続になることである。

坂州不整合は、1950年代、地向斜造山運動論に基づく日本列島形成論の重要な論拠となった不整合であり、その後のプレートテクトニクス説の台頭により、新たな解釈がされるようになった学史的に重要な露頭である。

⑩穴喰浦の化石漣痕（かせきれんこん）（昭和54年11月26日国指定）

→穴喰浦の化石漣痕は、海陽町穴喰浦の旧国道55号線沿いの崖に見られる地層で、様々な波形の模様が露出している。この地層は、新生代古第三紀（約4000万年前）のもので、地層面には水流漣痕のほか、底生成物の生痕化石（生物が活動した痕跡）が見られる。

そもそも漣痕とは、堆積層の表面を水や空気（風）の流れによりできた波状の模様（痕跡）で、鳥取砂丘の風紋等はよく知られている。穴喰浦の化石漣痕の場合は、海底の堆積物が水流の影響を受けてできたもので、その形状から当時の水の流れを推定することができる。

※上記以外の天然記念物（国指定）

動物：母川オオウナギ生息地（海部町）、カモシカ*、オオサンショウウオ*、カワウソ*、コクガン、ヒシクイ、マガン、ヤマネ（斜字は種指定〔地域定めず〕、

※印は、特別天然記念物）

植物：弁天島熱帯性植物群落（阿南市）、野神の大センダン（阿波市）、津島暖地性植物群落（牟岐町）、船窪のオンツツジ群落（吉野川市）、三嶺・天狗塚のミヤマクマザサ及びコメツツジ群落（三好市）、赤羽根大師のエノキ（つるぎ町）

※徳島県指定天然記念物の件数

動物：3件、植物：52件、地質・鉱物：7件（平成28年11月1日現在）

直近の県指定は、つるぎ町の五社神社にある「端山（はばやま）のタラヨウ」（平成25年6月4日県指定）

2 ねらい

- 1 本県の天然記念物について学び、身近にある地域の文化財に関心を持たせるとともに、その背景には人類の文化的活動が関わっていることを伝える。
- 2 地域の人々が天然記念物に関心を持つことが、天然記念物の保護や活用に繋がっていくことを理解させ、自ら保護・継承に積極的に関わろうとする態度を養う。

3 展開例

- 理科（第2分野）の「大地は語る」、及び第1分野・第2分野の：「人間と環境」の学習において、県内にある天然記念物について触れることで、教材を活用する。

《参考文献》

- 『徳島の文化財』（徳島県教育委員会 徳島新聞社） 2007年
- 『天然記念物って、なに？』（文化庁記念物課）→文化庁ホームページからダウンロードできます。『文化庁 パンフレット』で検索。

[関連サイト]

- 文化庁ホームページ「国指定文化財等データベース」, 「文化遺産オンライン」,
「文化財」

http://kunishitei.bunka.go.jp/bssystem/index_pc.asp

<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>

<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/index.html>

- 徳島県観光情報サイト「阿波ナビ」

<http://www.awanavi.jp/index.html>

- 徳島県立博物館ホームページ

<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/default.htm>

1 教材について

1年生「生きている地球」の3章「大地は語る」の中に、「4 大地の歴史」という単元がある。地層の特徴や重なり方を観察し、観察結果から過去のできごとを考察したり、地層や地形から分かる大地の変化を推測したりする単元での発展的な学習として、「阿波の土柱」を扱うことができる。

「生きている地球」では、大地の変化についての認識を深めさせ、時間概念や空間概念を形成し、地学的な事象・現象は長大な時間と広大な空間の中で変化したり生じたりしているという見方や考え方を養うことができる。世界的に見てもめずらしい地形が、私たちの住んでいる徳島県にあることを紹介するとともに、野外観察を行い、観察結果を基に地層のでき方を考察し、地層の重なり方や広がり方、風化や侵食についても考えることができるので、この「阿波の土柱」は、取り扱っていただきたい教材である。

解説

阿波市阿波町切戸から阿讃山麓にかけて、土柱層と呼ばれる礫層が分布している。「土柱」はこの礫層の崩壊地形に刻まれた雨裂の集合による侵食地形である。ひだやカーテン状に切り立った尾根が形成され、土柱が林立するスケールの大きな景観が特徴的である。



「阿波の土柱」は、礫層からなる

高さ10m程度の柱状の土塊が林立した特異な景観が見られる悪地地形（バッドランド）の一種といえる。ただし、柱状の形態をなす礫層は、土柱層の分布域の中でも限られた場所にしか存在せず、土柱分布域で普遍的に形成された侵食地形ではない。このことも、土柱が斜面崩壊に起因する侵食崩壊であることを示す。「阿波の土柱」を構成する礫の基質を埋める砂は適度に固結しており、この地層の風化と侵食に対する抵抗力や降雨量などの気象条件のバランスの上に土柱が出現し、次第に姿を変えながら侵食地形が維持されているとみられる。土柱層の礫は、角礫ないし亜角礫で、円磨度が低く、淘汰もほとんど受けていない。

阿波市北部に分布する阿讃山脈には、白亜紀の堆積岩である和泉層群が分布している。阿波市に分布する和泉層群の大部分は、主に海底を重力により流れ下る混濁流性の砂岩泥岩互層（ダービーダイト）で構成される主部層である。土柱層は和泉層群と一部は不整合、一部は断層関係で接する。また土柱層は地下600mに及び、この地の中央構造線である父尾断層より北側の和泉層群が、土柱層の上にせり上がっていることが確認されている。

2 学習課題・発問・活用例

○学習課題例

- ・「阿波の土柱」について調べてみよう。
- ・徳島県の地形について調べてみよう。
- ・徳島県の地質について調べてみよう。
- ・風化・侵食について詳しく調べてみよう。

○発問例

- ・「土柱」はどのようにしてできたのだろう。
- ・なぜ阿波市に「土柱」が見られるのだろう。

○活用例

- ・海外で見られる「土柱」を調べてみよう
- ・「土柱」の他に、徳島県で見られる特徴的な地形にはどのようなものがあるか，調べてみよう。
- ・大歩危について調べてみよう。
- ・みんなの住んでいる地域にも特徴的な地形はないか，探してみよう。

3 参考文献

- ・「阿波市の地形と地質-とくに「阿波の土柱」の成因と景観保全-」
(2010年7月 阿波学会紀要 第56号)
- ・「徳島県地学図鑑」(平成2年12月 徳島新聞社)
- ・「徳島県 地学のガイド」(2001年7月 コロナ社)
- ・<http://www.city.awa.lg.jp/> 阿波市ホームページ
- ・<http://www.awa-kankou.jp/> 阿波市観光協会ホームページ

【18】 陶器（セラミックス）で豊かな生活

1 生徒用資料について

大谷焼は、徳島の代表的な伝統工芸品の一つである。生徒も大谷焼の名前は知っているが、詳しくは知らないと思われる。この教材は、1年生を対象として設定をしている。大谷焼について知り、焼き物に関心を持たせ、自分たちの身の回りにある食器などの陶磁器がどのようにしてつくられるかなどを、実際に焼き物を制作することを通して、理解させたい。

大谷焼の花瓶（一輪ざし）をじっくり見させ、用途による形の違い、色合いのよさや美しさに気付かせてから自分の焼き物の制作に発展するようにする。大谷焼を知ることがきっかけに、自分たちの生活の中の陶磁器に関心をもち、さらに大谷焼について知りたいと思わせるよう、制作後にもじっくりと鑑賞の時間を設定している。

2 題材の目標

- 徳島県の代表的な焼き物である大谷焼について関心をもち、自分の生活の中に生かそうと焼き物の制作に意欲的に取り組むことができる。
- 家庭で自分や家族が使うことを考え、その用途・目的にあった焼き物のデザインや制作の工夫について考えることができる。
- 粘土の特性を理解し、材料や用具などを適切に使い、成型方法等を工夫して、自分のつくりたい焼き物をつくることができる。
- 自分や友達の作品、作家の作品を素直に見つめ、そのよさや美しさを感じ取り、用途や目的など意識した工夫などに気づくことができる。

3 題材の評価規準

a 美術への関心・意欲・態度	b 発想や構想の能力	c 創造的な技能	d 鑑賞の能力
①自分の生活の中に生かそうと、用途や目的を考え、焼き物の制作に意欲的に取り組んでいる。 ②徳島県の代表的な焼き物である大谷焼について関心をもって作品を味わおうとしている。	①家庭で自分や家族が使うことを考え、その用途・目的にあった焼き物のデザインをしている。 ②つくりたい焼き物の制作の手順を考え、制作方法などを工夫している。	①粘土の特性を理解し、材料や用具などを適切に使い、工夫して焼き物の制作をしている。	①自分や友達の作品を素直に見つめ、そのよさや美しさ、作者の工夫に気付いている。

4 指導計画（8時間）

- | | |
|---------------------|------------|
| 第1次 大谷焼の理解と焼き物のデザイン | 2時間（本時1／2） |
| 第2次 焼き物の成型 | 4時間 |

第3次 施釉

1時間

第4次 鑑賞

1時間

5 本時の展開

(1) 本時の目標



- 大谷焼について歴史や特色を理解し、意欲をもって焼き物に取り組むことができる。
- 家庭で使うことを考え、用途や目的にあった焼き物のデザインを考えることができる。

(2) 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	学習活動における 具体の評価規準	評価方法
導入	1 大谷焼について、その歴史や特色について知る。	○徳島県の伝統工芸品である大谷焼について関心を持たせ、焼き物制作への意欲づけを図る。	・大谷焼のよさや美しさに気づき、意欲的に焼き物づくりをしようとしている。	観察
展開	2 自分のつくりたい焼き物をデザインする。	○家庭で自分や家族が使うことを意識してつくりたいものを考えさせる。 ○用途や目的、使う人などを考え、焼き物の色や形を工夫してデザインさせる。	・用途や目的にあった焼き物のデザインを考えている。	ワークシート
結論	3 班で互いの焼き物のデザインについて、話し合う。	○互いのデザインについて、付箋にアドバイスを書いて交換させ、次時の構想につなげさせる。		

6 板書計画

<p>陶器（セラミックス）で豊かな生活</p> <p>大谷焼</p> <ul style="list-style-type: none"> ・徳島の代表的な焼き物（伝統工芸品） ・寝ろくろ、登り窯 ・ざらざら感、金属的な光沢 	<p>①自分のつくりたい焼き物を決めよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・誰が使うのか ・どのように使うのか ・どんな感じにつくりたいか <p>②自分や家族が使うことを考えてデザインをしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使う人の立場になって ・使い方や用途を考えて <p>○自分のデザインを発表をしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・付箋にアドバイスを書いて交換
---	--

7 その他の題材

- 他県の焼き物（信楽焼，砥部焼など）との比較鑑賞
- 総合的な学習の時間における大谷焼の体験学習
- 学校行事（遠足）での見学・実習
- 職場体験学習としての実習

8 参考資料等

- 広報なると2010年6月特集（大谷焼）
URL：www.city.naruto.tokushima.jp/koho/html/2010.../ootani.html
- 公益社団法人徳島物産協会公式ホームページあるでよ徳島
URL：tokushima-bussan.com > トップページ > 阿波の手仕事
- 家族で学ぼう！阿波の宝物 大谷焼
URL：www.pref.tokushima.jp/_files/00620291/otaniyaki.pdf

1 解説

○東京書籍 NEW HORIZON English Course 2

- ・ Presentation 2(pp.92-93)「町紹介」：自分が住んでいる町を紹介するという，4技能統合の自己表現活動。

○東京書籍 NEW HORIZON English Course 3

- ・ Presentation 1(pp.18-19)「日本文化紹介」：身近な日本の風物を取り上げ，4技能すべてを使う総合的自己表現活動。

○開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 2

- ・ PROGRAM 11③(pp.100-101)「自分が住んでいるところや，今までに見た印象的な景色を紹介しよう。」：自分が住んでいるところを紹介するという，4技能統合の自己表現活動。

○開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE 3

- ・ PROGRAM 6③(pp.58-59)「お祭りなど日本の文化について紹介しよう。」
- ・ My Project 8(pp.62-65)「日本文化を紹介しよう」：日本の伝統行事や有名な祭りについて紹介するという，4技能統合の自己表現活動。

2 使用表現

I live in …	It's in the … of …	It's famous for …
There is / are …	This is called …	It's used when …
Where are they used?	What do you think?	What's your impression?
Have you ever …?	I have …	

3 発問例

〈Check the reading comprehension.〉

- ・ What is Hiroko talking about?
- ・ What souvenirs from Tokushima are famous according to "Aru-Net"?
- ・ What can you see at an elegant Japanese restaurants around a dish?
- ・ Why do many Japanese restaurants in big cities want many kinds of leaves?
- ・ Why do old people in Kamikatsu-town use a computer?

〈What do you think?〉

- ・ Do you know "Happa Business"?
- ・ Have you seen leaves decorations around the dish?
- ・ What's a famous souvenir from Tokushima?
- ・ Which historical spots in Tokushima are you interested in?
- ・ Where can visitors see and take part in art activities in Tokushima?
- ・ Which famous sight-seeing spots have you been to in Tokushima? / Why?
- ・ What do you want foreign people to know about Tokushima?

4 参考

- ・株式会社いろどり HP 「葉っぱの町上勝町」 <http://www.irodori.co.jp/own/index.asp>
- ・徳島県観光協会 <http://www.tokushima-kankou.or.jp/>
- ・徳島県観光情報サイト 阿波ナビ <http://www.awanavi.jp/feature/awaodori.html>
- ・徳島県物産協会 あるネット徳島 <http://www.arunet-awa.com/>

5 日本語訳

みなさん、こんにちは。今日、私は「徳島の今一押しの特産物」についてお話しします。徳島県の「あるねっと」によると、徳島のお土産としては、すだち、鳴門金時や鳴門わかめが有名だということです。実際に、それらは徳島の特産物として日本中に認められています。

しかし、今日、私が紹介したいのは、まだあまり知名度が高くないものです。では、今から、3つのヒントを出します。まず1つ目…この特産物は徳島の山間部で採れるものです。そして2つ目…それらは、普段の生活の中で目にすることができます。最後に3つ目…私たちは、あまりその重要性や価値を認識していないかもしれません。さて、何だと思いませんか。

みなさんは、伝統的な日本食レストランへ行ったことはありますか。私は、家族で1度だけ行ったことがあります。そのレストランで、私は、料理の脇にある1枚の葉っぱを見つけました。私は、それが何のためのものかわからなかったので、父に「これ、食べられるの？」と尋ねました。すると、父は「いや、見るためのものだよ。」と言いました。

高級日本食レストランでは、よく料理の脇に添えられた葉っぱの飾りを目にします。例えば、桃の小枝や笹の葉、カエデ等です。それらは食べるものではありませんが、その存在によって季節の移ろいを感じることができます。これらの葉っぱの飾りを目にした時、私たちは早春や晩秋の景色を想像することができるのです。

徳島では、比較的簡単に季節を感じることができますが、都会に住む人々の中には季節を感じる機会に乏しい人もいます。また、都会では葉っぱを集めることも難しいのです。だから、このような都会のレストランが、たくさんの種類の葉っぱを必要としているのです。

現在、上勝町にある会社が、葉っぱビジネスでとても有名です。みなさんは、この「葉っぱビジネス」という言葉を聞いたことがありますか。上勝町の多くのお年寄りが、この仕事に携わっています。お年寄りは、どんな種類の葉っぱが必要とされているかを知るために、コンピュータを使っています。そして、毎日、葉っぱを集め、売っているのです。

彼らは、「いろどり」という映画の中で紹介されたことで、大変有名になりました。「いろどり」とは、英語で「配色」を意味しますが、私はこの「いろどり」という日本語が大好きです。私は、この特産物を誇りに思います。

ご静聴、ありがとうございました。

1. 生徒用資料解説

写真資料について

池田町三所神社の川崎獅子太鼓と徳島市阿波踊り会館の阿波踊り

川崎獅子太鼓とは、地域の豊作を祝い、また厄病退散の祈願をこめて、獅子舞を奉納する伝統行事。

阿波おどり会館は、「徳島を訪れる観光客のみなさんに、一年中をとおして「阿波おどり」にふれていただくとともに楽しんでいただくための施設」。(同館ホームページより引用)。

<補足解説>

阿波おどりが、季節限定的な地域のお祭りから脱皮し、年間を通じて提供される観光資源として成立するうえで、本会館は重要な役割を果たしている。

藍染めで製品化された日傘

藍住町歴史館藍の館は、「旧屋敷・奥村家文書・藍関係民俗資料(国指定)の恒久的保存と学術的利用をはじめ、藍の専門博物館として阿波藍の知識を普及するとともに、藍の生活文化の創造と藍の情報センターとしての役割を担っている」(同館ホームページより引用)。

藍染体験

写真は、カナダで草木染めをされている方が、本藍染め矢野工場の藍建て勉強会に参加された時の様子です。

昭和南海地震最高潮位標識と津波十訓

1996年、海部郡海陽町海南庁舎浅川出張所前広場に、昭和南海地震「震災後50年南海道地震津波史碑」と「津波十訓」の碑が設置された。地域住民が次世代の人々に託したい思いやメッセージが、端的なことばで記されている。南海地震の実態を知るのに有益な徳島県の地震・津波碑は、下のホームページが参考になる。

http://www.jishin.go.jp/main/bosai/kyoiku-shien/13tokushima/material/tksm_22_3.pdf

<補助解説>

「津波十訓」には、以下の10項目が刻まれている。

- 1 南海地震津波の最高潮位標識をみよ。それより高い津波もあることに注意せよ。
- 2 非常時の最小限の持出品の準備を日頃よりおこたるな。
- 3 わが家の緊急時の避難道、避難場所を日頃より定めておけ。
- 4 携帯ラジオ等を常備し、停電時でも正確な情報を知れ。デマにまどわされるな。
- 5 真剣に防災訓練に参加せよ。日頃の訓練、それが緊急時にわが身を救うと心得よ。
- 6 「津波警報」ができれば、直ちに近くの高い所に避難せよ。もし、津波が来なかったら幸

いと思え。

- 7 大地震のあと、直ちに津波が来襲すると思え。津波の来襲前に海水は必ずひくとは限らない。
- 8 大地震のあと、車で防潮堤外の埋立地に入るな。門扉が閉じられ、車も命もなくすことがあることを知れ。
- 9 津波は必ず数回やってくる。避難後、警報が解除されるまで避難所で待機せよ。命より大切なものはない。
- 10 沖で地震を感じたら、直ちに湾外の深いところへ船を移動せよ。湾内では直ちに下船し緊急避難せよ。

徳島県立城南高校の「野球発祥校」の碑

1898年（明治31年）、当時の徳島中学校（現在の徳島県立城南高等学校）に徳島県で初めての野球部が創られた。1998年（平成10年）年には創設100周年を迎え、同校の地に「野球発祥校」の記念碑が立てられた。

<補助解説>

「野球発祥校」記念碑には、以下の内容が刻まれている。

明治三十一年／

わが校に野球部が／創られた／徳島縣における／野球の始まりである／

創部時の野球部歌

春は花映ゆ朝ぼらけ／ノックの響き雲破り／秋は月照る夕まぐれ／ボールの光我にあり
炎熱互寒惨憺の／苦心を積みし／歳月や／

徳島中学校／第一高等学校／城南高等学校／野球部／

創部百周年記念碑／平成十年四月／野球部後援会長／布川隆美 書

神山アーティスト・イン・レジデンス

「神山アーティスト・イン・レジデンス」とは、「神山町のNPOグリーンバレーを中心に、1999年からスタートした国際的なアート・プロジェクト」。「毎年8月末から2ヶ月間、日本国内および海外から3名のアーティストが神山町に滞在。作品を制作し、10月下旬に展覧会を開きます」（同企画ホームページより引用）。

<補助解説>

本企画の特色は、国内外から招聘された芸術家が、神山という環境で生活し、作品へのイメージを膨らましつつ、地元住民との交流を通して作品を制作していること。作品は地元で展示されており、地域の環境に溶け込んだオブジェともなっている。

マチ★アソビの来訪者数の変化

「マチ★アソビ」とは、「”徳島をアソビ尽くす”ことを目的とした複合エンターテイメントイベント」。「徳島のシンボルである眉山山頂や、新町川沿いにある“しんまちボードウォーク”，阿波おどり会館やポッポ街，徳島駅周辺を巻き込み，各エンターテイメント関連会社や人気声優が一堂に会し，さまざまなイベントや展示が行われる一大イベン

ト」(同企画ホームページより引用)。

<補助解説>

2009年10月に始まり、既に15回開催された(2015年現在)。地域の活性化とアニメイベントを結び付けて観光産業化した「アニメツーリズム」の成功例として注目される。第7回より、若手アニメーターやアニメ産業の育成に関心を寄せる文化庁も後援している。

2. 授業の目標と授業過程

(1) 授業の目標

<重点目標B>

- 「あわ文化」の取組を事例に、文化が継承されるための理由・条件を説明できる。
- 「あわ文化」の取組を事例に、文化を発信していくための手段・方法を説明できる。

<重点目標D>

- 「あわ文化」を主体的に評価・創造し、次世代に伝承していくためのプランを提言しようとしている。

(2) 授業過程

<導入>

- ・ 徳島の魅力ってなんですか。次のなかから1つ選んで、その魅力を語ろう。
→ 例：阿波おどり、うだつの町並み、藍染め、人形浄瑠璃、ベートーベン「第九」、マチ★アソビ、神山アーティスト・イン・レジデンス、地元のお祭りのX、地元の特産品のY(教師の判断で適宜加えてよい)
- ・ あなたの選んだ「お勧め・あわ文化」は、30年後(あなたが44歳の頃)どうなっているだろうか。予想して発表しよう。
→ 「Aの30年後は……なっていると思います。なぜなら……だからです」の形式で。

【本時の中心的な学習課題】

- ◎ あなたの「お勧め・あわ文化」が30年後にも生き残るための作戦を立てよう。

<展開1>

- 長く受け継がれてきた文化には、どのような秘密が隠されているのだろう？ 文化継承の条件を予想しよう。
 - ・ 藍染め体験の写真を見て、気づくことを指摘しなさい。伝統的な藍染め製品と現代的な藍染め製品を比べて、違いを書き出そう。
 - ・ なぜ傘やコースター、Tシャツの藍染め製品が生まれたのだろう。
 - ・ 池田町三所神社の川崎獅子太鼓と徳島市阿波踊り会館の阿波踊りのようすの写真を見て、気づくことを指摘しなさい。例えば、次の視点から2つの催しを比較しよう。
例：目的、開催の時期や場所、参加者の人数や住所、催しの規模、会場へのアクセ

スなど。

- ・なぜ1年を通じて阿波おどりを楽しむことができるようにしたのだろうか。あなたはそれに賛成ですか、反対ですか。

- 長く受け継がれてきた文化には、どのような秘密が隠されているのだろうか？

文化継承の条件を、①地域の自然や日常生活との結びつきに加えて、②社会の変化に応じた伝統的な芸能・物産の観光化、商品化、③活動の場の提供や経済的な支援、これらの視点から説明できる。

<展開2>

- 後世に文化を伝えていくためには、どのような戦略が必要だろう？ 文化発信の手立てを考えよう。

- ・最高潮位標識と津波十訓の写真には、何が記されているか。読み取りなさい。住民はどのような思いでそれをつくったのだろうか。

- ・徳島県立城南高校の「野球発祥校」の碑の写真には、何と記されているだろう。いつ、だれが、なんのためにつくったのだろうか。

- ・あなたの学校や市町村に残された記念碑や鎮魂碑、博物館を探してみましょう。私たちは、どういうときに「碑」や「館」を作ったり、訪ねたりするだろうか。

- ・マチ★アソビ（グラフ）や神山アーティスト・イン・レジデンス（写真）とは、どんなイベントだろう。2つを比較して、似たところを書き出そう。

- ・なぜこれらのイベントに、県内外からたくさんの人々が訪れるのだろうか。

- 後世に文化を伝えていくためには、どんな戦略が必要だろう？

文化発信の方法を、①担い手の育成に加えて、②了承したい記憶を記録にとどめ、その記録を共有・発信できるように公の場に展示する、③地域の自然や歴史を生かし、住民や企業等が助け合って、その土地らしいイベントを運営する、これらの視点から説明できる。

<終結>

◎（学習の成果を踏まえて）

あなたの「お勧め・あわ文化」が30年後にも生き残るための作戦を立てよう。

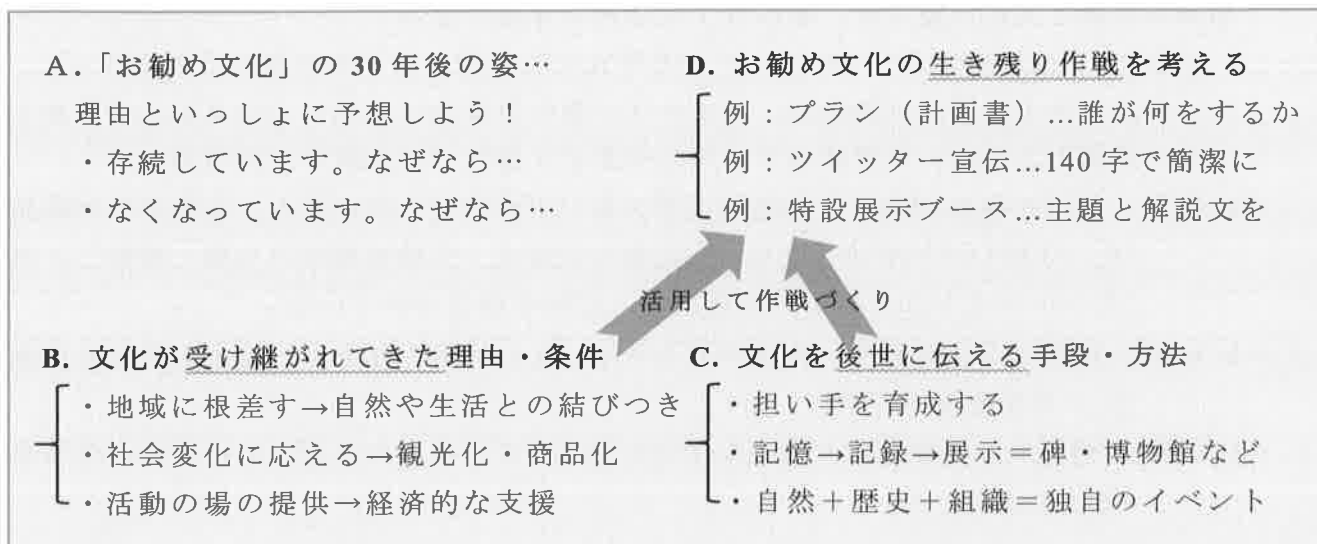
- 例えば、以下のような表現活動が考えられる。生徒の実態や使える時間数、学校の経営目標などを考慮して決定することが望まれる。

- ・作戦①： ツイッター発で全国の人たちに、「お勧め・あわ文化」を紹介しよう。140字でコンパクトな宣伝メッセージをつくろう。（易）

- ・作戦②： 学芸員または知事になったつもりで、私の「お勧め・あわ文化」の推薦文または推薦ポスター（写真や絵入り）を書こう。（並）

- ・作戦③： 学校の図書室や地域の公民館に私の「お勧め・あわ文化」特設展示ブースをつくろう。どのようなテーマを設定し、どのような素材を選び、素材をどのように組み合わせ、どのような解説パネルといっしょに展示するとよいか。ブースのデザイン案を描こう。（難）

3. 板書計画



4. 発展的教材研究のための資料

文化の継承について理解を深めるためには、以下の専門書が参考になる。

- 阿部安成，見市雅俊，森村敏己，小関隆，光永雅明『記憶のかたち－コメモレイションの文化史－』柏書房，1999年。
- 片桐 雅隆『過去と記憶の社会学－自己論からの展開－』世界思想社，2003年。
- 矢口祐人，中山京子，森茂岳雄『真珠湾を語る：歴史・記憶・教育』東京大学出版会，2011年。
- 若尾祐司，羽賀祥二『記録と記憶の比較文化史－史誌・記念碑・郷土－』名古屋大学出版会，2005年。
- 若尾祐司，和田光弘『歴史の場－史跡・記念碑・記憶－』ミネルヴァ書房，2010年。
- A.ヘンダーソン，松本栄寿・小浜清子訳『スミソニアンは何を展示してきたか』玉川大学出版部，2003年。

5. 評価規準の設定と評価方法

<重点目標B>

世界や日本の中における徳島の伝統と文化について思考し、公正に判断する。

「なぜ「あわ文化」は長く継承されてきたのでしょうか。どのようにすれば「あわ文化」を後世に継承していけるのでしょうか？ 具体例を挙げて説明しなさい」。

この課題に対する答え（説明文）を評価する。

- A 水準：①自然や生活に密着，②観光化や商品化，③担い手の育成・支援，④記憶の記録化，⑤関係機関の協働・連携などのなかから3つ以上の視点を用いて，徳島の取組を説明できている。
- B 水準：Aに例示された1つ以上の視点を用いて，徳島の取組を説明できている。
- C 水準：Aに例示された視点を用いて，徳島の具体的な取組を説明できていない。

<重点目標D>

徳島の伝統と文化の魅力を、県内外で主体的に発信できる。

「あなたの「お勧め・あわ文化」が、30年後に生き残るための作戦を立てよう」。

この課題に対する答え（例えば、ツイッター発の宣伝メッセージ、知事からの推薦文または推薦ポスター、特設展示ブースのデザイン案などの作品）を評価する。

- A 水準： 徳島の文化の継承・創造のプランを、①自然や生活に密着，②観光化や商品化，③担い手の育成・支援，④記憶の記録化，⑤関係機関の協働・連携などのなかから 3つ以上の視点を根拠に，作戦を提言できている。
- B 水準： 徳島の文化の継承・創造のプランを，A に例示された 1つ以上の視点を根拠に，作戦を提言できている。
- C 水準： 徳島の文化の継承・創造のプランを，A に例示された視点を根拠に，作戦を提言できていない。

※ 生徒用テキストのデータの出典

写真 池田町三所神社の川崎獅子太鼓と

<http://gurutabi.gnavi.co.jp/event/item/129358/>

写真 徳島市阿波踊り会館の阿波踊り

<http://www.city.tokushima.tokushima.jp/kankou/kankoushitsu/awaodorikaikan.html>

写真 矢野工場での藍染め体験

<http://livedoor.blogimg.jp/honaizomeyanokozyo/imgs/9/3/93d1241c.jpg>

写真 藍染めで製品化された日傘

<http://aizome-tokushima.jp/?pid=73281280>

写真 昭和南海地震津波の最高潮位標識と津波十訓（海部郡海陽町）

<http://anshin.pref.tokushima.jp/docs/2012082900114/>

写真 徳島県立城南高校の「野球発祥校」の碑

<http://hamadayori.com/hass-col/sports/YakyuHasshoKo.html>

写真 神山アーティスト・イン・レジデンス

<http://www.in-kamiyama.jp/art/kair/top/279/>

図 マチ★アソビの来訪者数の変化

（資料：徳島県商工労働部観光国際局にぎわいづくり課調べ）

【21】 俳人 大高 翔 の世界に触れよう

俳人 大高 翔

俳句の学習では、自分の心に響く俳句を見だし、を読み味わうことが大切である。

また、表現の仕方を工夫して俳句を作り、友達と感想を交流することも、俳句に親しむ効果的な方法として挙げられる。

徳島県出身である大高 翔氏の、日常生活を題材とした俳句を学習することで、生徒は俳句を身近な表現だと認識することができるだろう。また、大高氏の俳句を題材とし、使われている言葉を吟味することによって、ものの見方や感じ方を豊かにするとともに、俳句創作への意欲を喚起することができると考えられる。

1 プロフィール

俳人。1977年生まれ。13歳より作句。執筆を中心に講演や校歌作詞など幅広く活動している。ライフワークとして、子どもたちや初心者への作句指導を行っている。

また、海外でも日本語や日本文化の魅力を伝える活動を展開している。

2009年徳島県立徳島科学技術高等学校、2012年徳島県立鳴門渦潮高等学校の校歌を作詞する。2013年より徳島県阿南市の「阿南ふるさと大使」となる。

2 作品

体育館わたしのひとつが終わった夏
春スキーさしだす君の手が欲しい
ふくらんだかばん明日は始業式
おはようの声がゆきかう更衣
新学期となりの席の恋敵

『ひとりの聖域』 大高 翔 邑書林

すぐそばに明け方のおい夏休み
捨てられるだけ捨てていこう春休み
十九歳秋空に名を刻みたし

『十七文字の孤独』 大高 翔 角川書店

春暁の美しき眠りのつづきかな
秋刀魚焼くいつしか君の妻となり
名を呼んで子を振り向かず花の昼
髪解きて秋思こぼるる洗面器
光りつつ来たるべき恋待つ林檎

『〈キリトリセン〉』 大高 翔 求龍堂

3 著作から見られる俳句への思い

私は、中学一年生くらいから俳句を始めて、最初は難しいなと思いました。難しいからこそできるようになりたくてやめられなかったんです。十代の多感な時期に俳句が身近にあったので、性格の大部分は俳句が作ってくれたように思います。

「～かもしれない」とうじうじ迷っていると十七音からはみ出すので、自分の感情をある程度断定して表現するクセがつく。それで気持ちや考え方を切り替えて次に進めたような気がします。何が本質かという答えのない問いを続ける十代の頃、俳句にかなり救われたなって思います。俳句がなければ、とめどなく悩んでいる性格だったと思うんですよ。

(「俳句」2015年9月号 KADOKAWA)

漱石さんの俳句と向き合いながら、改めて思ったのは、俳句というものの摩訶不思議、俳句というものは、恐ろしいくらい正直に、詠んだ人の心を映してしまう、ということ。小説にも随筆にも書かず、家族にも友人にも語らなかった、心のなかの密やかな部分でさえ、俳句は知らぬ間に写し取っている。わたしはことばの力を改めて教えられた気がします。ことば、というもののパワー。力あることばは、志あるものに宿る。百年後の誰か、百年前の誰かにも、恥ずかしくない俳句、あるいは生き方というものを、私たち俳人は課せられているのかも。そんなことを意識をさせられて、わたしは、背筋を伸ばします。すると、目の前の景色が、洗い立てのように、少しちがってみえてくるようです。

(「漱石さんの俳句」2006年 実業之日本社)

4 学習指導の実際

【例1】

- (1) 2の大高 翔氏の「作品」からベスト1ないしはベスト3を選ぶ。
- (2) その理由を、俳句の言葉を根拠として書く。
- (3) 書いた根拠をもとに、意見の交流をする。
- (4) 選んだ俳句の鑑賞文を書く。

【例2】

- (1) 一枚の写真（校舎内外の写真や学校行事の写真、光村図書教科書「単元の扉」の季節写真）を見て表現技法を使った俳句を作る。
- (2) 班で、句会を開く。

【例3】

『ゼロから始める俳句入門』（大高 翔）を参考にして、表現技法を学習する。

5 参考文献

『こども俳句塾』 大高 翔 明治書院

ワークシート集

このワークシート集は、授業ノートとして活用することを想定して作成してあります。必要部数を印刷してお使いください。

また、徳島県教育委員会教育文化課のWebページには、授業の展開に応じて活用できるように、一太郎版及びWord版のワークシートデータを公開しています。

授業の予習やまとめのプリント、自習課題などに利用する場合も、自由に加工してください。

【1】「銅鐸と朱に込められた思い」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 「銅鐸」について、知っていることや調べたことをまとめよう。

- 2 弥生人の朱の使い方について、まとめよう。

- 3 弥生人になりきって、銅鐸や朱に込めた思いを想像してみよう。

【銅鐸】

【朱】

【2】「木簡から見える古代の阿波」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 「国府」とはどんなところのことか、まとめてみよう。

- 2 発掘調査でいろんなものが出土していますが、出土品からどんなことが分かると思いますか、想像してみよう。

- 3 （ ）に適切な言葉を入れてみよう。

律令制が導入されたことで、地方の役所では（ ）を作成する必要があった。観音寺・敷地遺跡からは、木製品をはじめとして多種多様な出土品が出ていますが、これらの出土品から（ ）の成り立ちや終わり、当時の（ ）の生活の様子を知ることができます。その学術的価値の高さから、（ ）年には、「徳島県観音寺・敷地遺跡出土品」として、（ ）点が（ ）に指定されました。

- 4 記録に木簡が使われた理由を二つあげてみよう。

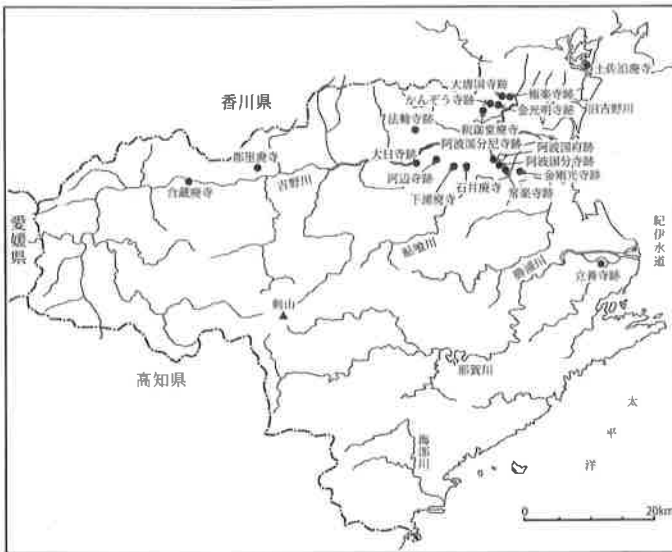
【3】「阿波の古代寺院を探ろう」ワークシート

組 () 番号 () 氏名 ()

- 1 国分寺や国分尼寺は、どうして国府の近くに造られたのか考えてみよう。

- 2 下の地図で、古代寺院がある場所を○で囲んでみよう。また、自分が住んでいる地域の近くの古代寺院について調べてみよう。

自分が住んでいる地域の古代寺院



- 3 古代寺院の発掘調査から見つかった建物跡や出土した瓦などをもとに、当時の様子を想像してみよう。

【4】「阿波から都へ～三好氏の時代～」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 三好氏の最大勢力圏の図を見て、最盛期に支配していた領地名を書き出そう。

--

- 2 三好長慶がなぜ近畿から四国にかけての広い領地を支配できたのか、その理由を予想してみよう。

--

- 3 阿波の港から積み出された産物を示した表を完成させ、気づいたことを発表しよう。

港の名前	積み荷	港の名前	積み荷
土佐泊		橘	
撫養		牟岐	
別宮		海部	
惣寺院		穴喰	
平島			

気づいたこと

--

- 4 勝瑞が阿波の中心地として発展していった理由を考えよう。

--

【5】「なぜ徳島に城下町ができたのか」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 蜂須賀氏は、どうして一宮城ではなく、徳島城を拠点にしたのか予想しよう。

- 2 テキストの「阿波国徳島城之図」を見て、気がついたことを発表しよう。

気がついたこと

友達の意見

- 3 城下町を流れる川は、どのように利用されていたのだろうか。話し合ってみよう。

自分の意見

友達の意見

【6】「小学校のはじまり～学制と徳島の教育～」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 江戸時代の「寺子屋」と明治初期の「小学校」の授業の様子を比較して、違う点を書き出してみよう。

- 2 次の（ ）に言葉を入れて、文章を完成させよう。
徳島では（ ）年に（ ）に一番小学校，（ ）に二番小学校，
（ ）に三番小学校が開設され，（ ）歳から（ ）歳までの児童
が入学しました。その頃の名東県では，公立小学校（ ）校，私立小学校
（ ）校が誕生しました。

- 3 明治時代になって「小学校」が必要だと考えられた理由を書いてみよう。

- 4 国民の義務として教育を定めたのに，就学率が低かったのはなぜだろう。

- 5 当時の徳島の人たちに，学校が無いと困る理由を考えて説明してみよう。

【7】「阿波おどりの歴史と魅力について語ろう」ワークシート

組（ ） 番号（ ） 氏名（ ）

1 阿波おどりについて知っていることを書き出してみよう。

--

2 阿波おどりの歴史について（ ）の中にあてはまる言葉を書き入れよう。

「阿波おどり」の起源はお盆に祖先の霊を供養するために踊られた（ ① ）にあると考えられています。盆踊りの形態の変遷を見ていくと（ ② ）の影響が見られます。

その後、徳島城下では、（ ② ）を継承する（ ③ ）が盛んになりました。盆踊りが最も流行したのは、幕末の文化・文政期（1804～1830年）です。「阿波盆踊図屏風」では、現在の阿波おどりにつながる当時の（ ④ ）が見えます。明治期以降も盆踊り（阿波の盆踊り）は徳島市民に受け継がれ、郷土の夏の芸能として広く定着していきました。

昭和初期には日本画家の林鼓浪が「阿波の盆踊り」を（ ⑤ ）と呼ぶように提唱しました。

①		②		③		④		⑤	
---	--	---	--	---	--	---	--	---	--

3 テキストをヒントに、阿波おどりが400年以上もの期間、受け継がれてきた理由・特徴について話し合い、下の空欄に適切な語句を入れてまとめよう。

- | | |
|-------------------------------------|---------------|
| ①（ ）する踊りなので、 ^{やぐら} 櫓も広場も不用 | ②（ ）拍子で陽気なテンポ |
| ③（ ）奔放さ | ④誰にでも（ ）に踊れる |
| ⑤ 踊りがいろいろ異なっており、飽きない | |

4 今日の授業を振り返り、自分の関わりも含めて、これからの阿波おどりに、どのようなようになってほしいか書いてみよう。

--

【8】「阿波に根付いた人形浄瑠璃」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 （ ）の中に言葉を入れて、人形浄瑠璃の特徴をまとめよう。

人形浄瑠璃は、（ ）・三味線・人形遣いの三つが一体となって演じられる芸能です。三味線には低く大きな音の出る（ ）棹が用いられます。主要な登場人物の人形は三人で操る三人遣いで、主遣い・左手遣い・足遣いです。

- 2 人形浄瑠璃の発展にかかわった人々の名前をあげてみよう。

- 3 徳島で演じられる人形浄瑠璃の人形頭、人形の動かし方の特徴を箇条書きにしてみよう。

- 4 テキストの資料「地域別の農村舞台の分布」で、Aの吉野川流域に農村舞台が少ない理由を考えてみよう。

- 5 阿波人形浄瑠璃に、あなたはどのように関わっていくことができると思いますか。

【9】「板東俘虜収容所」で結ばれた、日本とドイツとの交流」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 日本とドイツの交流について、知っていることを書いてみよう。

--

- 2 次の文の（ ）にあてはまる言葉を書き入れよう。

板東俘虜収容所は、（ ）によって俘虜となった中国山東省青島の（ ）を収容するために（ ）年、当時の徳島県板野郡板東村桧に建設されました。板東俘虜収容所では（ ）所長の（ ）な考えの下で、国際的な標準をはるかに上回る処遇が行われていました。

- 3 収容所での生活の様子を、「日常生活」「文化活動」「スポーツ活動」それぞれについてまとめよう。

日常生活
文化活動
スポーツ活動

- 4 日独の交流がどのように始まり、現在のように発展していたのかまとめよう。

--

【10】「アジア初演「歓喜の歌」」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 ベートーヴェン「第九」について知っていることを書こう。

- 2 鳴門市の「第九」が6月に開催されている理由を調べて書こう。

- 3 「第九」の本公演を開催した板東俘虜収容所の人々の心情を想像して書いてみよう。

【11】「人々の衣服を染めた阿波の藍」ワークシート

組（ ）番号（ ）氏名（ ）

- 1 江戸時代に吉野川流域で農業を行うことのメリットとデメリットは、どのようなことがあるか、書き出してみよう。

メリット（利点，価値）

デメリット（欠点，不利益）

- 2 藍屋敷「田中家住宅」にはどのような建物がありますか。また、どのような工夫がありますか。考えたことを書いてみよう。

- 3 藍で染えた阿波の様子を現在に伝えるものには、どのようなものが残っていますか。思いついたことを書いてみよう。

【12】「四国遍路とお接待」ワークシート

() 年 () 組 ()

1 四国遍路について、知っていることをあげてみよう。

2 四国遍路の歴史について、つぎの () に言葉を入れてみよう。

○四国遍路は、() 時代に () が四国で修行したことに始まると言われています。

○四国遍路は、() 箇所の札所寺院と全長約 () km の遍路道を回る巡礼で、現代の日本を代表する文化遺産の一つとされています。

3 遍路道の石造物について、つぎの () に言葉を入れてみよう。

○遍路道沿いには、道案内のための () やお寺への道のりを示した () が建てられました。また () と呼ばれるお遍路さんのお墓も残されています。

4 四国遍路を未来に伝えていくために、あなたはどんなことができるでしょうか。

【13】「橋でつながる人・もの・地域」ワークシート

() 年 () 組 ()

- 1 今まで「渡し船」でしか渡れなかった川に「橋」がかかったらどんなことが起こると思いますか。「橋」の役割について思いつくまま書き出してみよう。

--

- 2 次のそれぞれの地域が「橋」で繋がったことで、どんなことが起こったと思いますか。

吉野川の北岸と南岸
徳島県と兵庫県・京阪神地方

- 3 テキストの高速バスの運行状況表を見て気がついたことを書いてみよう。

--

- 4 「橋」の役割についてまとめてみよう。

--

【14】「徳島の郷土料理を知ろう」ワークシート

() 年 () 組 ()

- 1 テキストに載っているもの以外で、徳島の郷土料理だと思うものを書き出してみよう。

--

- 2 徳島の郷土料理を一つ選んで、なぜその料理が生まれたかについて、調べてみよう。

選んだ郷土料理
「 」(料理の名前を入れよう)は、こうやって生まれた。

【15】「地域の食材を使って「そば米汁」を作ろう」 ワークシート

() 年 () 組 ()

調理実習の計画を立てて、調理をしよう。

献立			
実習のねらい			
自分の目標		材料	
役割分担表			
名前	役割	名前	役割
調理の手順			
時間	作業内容や注意点		
<div style="border-left: 1px dashed black; border-right: 1px dashed black; width: 80%; margin: 0 auto;"></div>			
○感想			

【16】「徳島県の天然記念物を見に行こう」ワークシート

() 年 () 組 ()

1 次の言葉の意味を確認して書いてみよう。

天然記念物	
特別天然記念物	

2 天然記念物を守る意義はどんなところにあるのだろう。また、あなたが天然記念物を守るためにできることは何だろうか。自分の言葉で考えをまとめてみよう。

3 自分の身近にある天然記念物を探して、レポートしてみよう。

【17】「奇勝「阿波の土柱」」ワークシート

()年()組()

- 1 次の()に言葉を入れて、土柱の説明を完成させよう。

徳島県()市にある土柱は、アメリカ合衆国の()にある土柱や、イタリアの()にある土柱と並び、「()」のひとつとされている、世界的にも大変珍しい地形です。

一般には、()や砂からなる地層が風雨により()されてできたもので、個々の土柱の上には礫がのっていることが多く見られます。

- 2 土柱のような天然記念物を観察するとき、気をつけるべきことを箇条書きにしてあげてみよう。

- 3 「阿波の土柱」を県外の人に紹介してみよう。

【18】「陶器（セラミックス）で豊かな生活」 ワークシート

組（ ） 番号（ ） 氏名（ ）

1 自分のつくりたい焼き物を決めよう。

つくる焼き物	決めた理由（使う人や使い方も考えて）

2 自分や家族が使うことを考えてデザインをしよう。

完成予想図
工夫した点（色や形などについて）
友人からのアドバイス（付箋をここに貼って、参考になったことに赤で線を引こう）

【19】「徳島の名所や史跡・特産物を紹介しよう」 ワークシート

() 年 () 組 ()

- 1 あなたは海外の人達に、どんな「あわ文化」を紹介したいと思いますか。
理由も一緒に考えてみよう。

- 2 あなたが選んだ「あわ文化」を紹介するために必要な単語や表現を、英語でメモしてみよう。

- 3 2 で書いたメモをもとに、5文～7文くらいの英文を書いてみよう。

【20】「暮らしのなかに息づく伝統・文化」ワークシート

()年()組()

1 次の「あわ文化」の中から、あなたの「お勧め・あわ文化」を一つ選んで、その魅力を書いてみよう。

- ①阿波おどり ②人形浄瑠璃 ③藍染め ④ベートーヴェンの「第九」
⑤マチ★アソビ ⑥その他（具体的には、)

選んだもの〈 〉

魅力：

2 あなたが選んだ「お勧め・あわ文化」は、30年後にどうなっているだろうか。想像してみよう。

3 地域の文化が生き残っていくために必要なことって何だろう。考えてみよう。

4 あなたの「お勧め・あわ文化」が30年後に生き残るためには、どうしたらよいだろうか。作戦を立ててみよう。

「あわ文化テキストブック」教師用教材解説集

平成29年3月発行

編集・発行 「あわ文化テキストブック」活用検討委員会

委員長 福家 清司 公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター理事長

委員 梅津 正美 鳴門教育大学副学長

委員 草原 和博 広島大学教授

委員 町田 哲 鳴門教育大学准教授

委員 橋本 隆 徳島県立総合教育センター次長

委員 井上 隆 松茂町教育委員会社会教育指導員

徳島県教育委員会教育文化課

徳島県立総合教育センター

出版・印刷 協業組合 徳島印刷センター

徳島県徳島市問屋町 165

Tel:088-625-0135 Fax:088-622-0734

平成28年度「我が国の伝統・文化教育の充実に係る調査研究」事業（文部科学省）